

Title	堀田善衛と中国：「上海体験」に始まる初期作品の形成と展開
Author(s)	曾，嶸
Citation	大阪大学，2012，博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27265
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

文庫 15937

2012 年度

大阪大学大学院文学研究科

文化表現論専攻比較文学専門分野

博士学位請求論文

堀田善衛と中国

—「上海体験」に始まる初期作品の形成と展開—

曾 嵘

ZENG RONG

97
98

目次

凡例	
序章	1
第一節 「堀田善衛と中国」についての問題意識	
第二節 研究動機	
第三節 堀田文学の先行研究の概略	
(1) 新聞に掲載された評論	
(2) 文学史における堀田の扱い	
(3) 研究論文	
第四節 本論の目的と研究の方針	
第五節 論文の構成	
第一章 「上海体験」前の堀田善衛文学について	13
— 『批評』を中心に—	
第一節 本章の問題意識と方法	
第二節 堀田善衛と『批評』	
第三節 「歴史の捨象」という認識	
第四節 古典の提唱へ	
第五節 堀田善衛「西行」について—小林秀雄との比較	
5-1 西行の「決断」	
5-2 西行の「信念」	
5-3 西行の歌の素直さと平明さ	
第六節 河上徹太郎文芸復興活動との接点	
第二章 堀田善衛と「上海体験」	33
— 「身分転換」でめざめた日中関係への思考	
第一節 本章の問題意識と方法	
第二節 状況と認識のズレ	
第三節 「敗戦」による認識の獲得	
第四節 「敗戦」後の意識	
第五節 「留用」での認識の変化	
第六節 国際問題と「人性」の関連—林語堂の『啼笑皆非』を参照して	
第三章 歴史認識への意志(一)	55
— 「広場の孤独」再読—	
第一節 本章の問題意識と方法	
第二節 従来の読み方への疑問	
第三節 小説の構造と木垣の人物像	
3-1 小説の冒頭と結末の対比	
3-2 冒頭における木垣の人物像	
第四節 「広場の孤独」の人物関係と木垣の変化過程	

- 4-1 木垣とハントー紛争を参与する新人
- 4-2 木垣と御國—「左」の人間
- 4-3 木垣の認識 (一)
- 4-4 木垣と無国籍者ティルピッツ
- 4-5 小説に対する木垣の構想
- 4-6 木垣と原口—「右」の人間
- 4-7 木垣の認識 (二)
- 4-8 木垣と張国寿—政治の浮浪者
- 4-9 木垣の変化—「人間的」な小説の創作

第四章 歴史認識への意志 (二) 85

—「祖国喪失」の「共犯」と「広場の孤独」の「コミットメント」を通して—

- 第一節 本章の問題意識と方法
- 第二節 「祖国喪失」の再解釈
- 第三節 「祖国喪失」——「共犯者」対その「自覚者」という構造とその特徴
- 第四節 「広場の孤独」の「コミット」の意味の再構成
- 第五節 「広場の孤独」——「コミット」する人対その「自覚者」という構造
- 第六節 「コミット」する人物の特徴
- 第七節 人間・社会・歴史を描く堀田善衛の意志
- 第八節 「共犯者」に対する認識と「上海体験」の関連

第五章 新たな小説方法への追求 107

—「歴史」と『子夜』の比較を通して—

- 第一節 本章の問題意識と方法
- 第二節 「現代史を文学に収斂」に対する堀田の追求
- 第三節 堀田善衛と茅盾の接触
- 第四節 『子夜』を読む視点の比較
 - 4-1 日本の出版社と訳者の視点
 - 4-2 堀田善衛の視点
- 第五節 「歴史」と『子夜』の全体構造
 - 5-1 『子夜』の全体構造
 - 5-2 「歴史」の全体構造
- 第六節 『子夜』と「歴史」の冒頭の導入方法
 - 6-1 『子夜』の冒頭の導入
 - 6-2 「歴史」の冒頭の導入
- 第七節 『子夜』と「歴史」の時間
 - 7-1 時間の逆戻りによる全体性への志向
 - 7-2 連続の場面転換による全体性の達成

結語 143

初出一覧 149

書誌 150

凡例

- ・ 本論文で取り扱う作品の本文引用にあたっては、漢字の旧字体は新字体に改め、一部ルビを省略した。
- ・ 紹介文や評論等は、初出誌におけるコンテキストを考察している論の都合上、出来る限り初出雑誌に拠った。その場合、誤字や脱字も初出誌のまま引用した。
- ・ 本論では作家の名字を「堀田善衛」にしているが、多くの先行研究において「堀田善衛」と記されている。引用の場合は、原文のまま「堀田善衛」を使い、敢えて統一していない。
- ・ 本論文で取り扱う作品の、本文引用中における下線及び省略（中略、後略）は、特にことわりがない限り、すべて論者による（脚注も同様である）。
- ・ 本論文で取り扱う作品の書名、雑誌名、論文集は、すべて『』（二重鉤括弧）で囲んで記した。単行本中の作品名、詩篇、論文名は「」（一重鉤括弧）で記した。
- ・ 作品名の直後に丸括弧で囲んで記した数字は刊行年と頁数をあらわす。

序

第一節 「堀田善衛と中国」 についての問題意識

本論文は堀田善衛（一九一八～九八）と中国、殊に上海との関わりを、彼の初期作品を分析することによって考察するものである。この問題意識は、上海での体験に対する堀田自身の語りと批評家らの評価に起因している。堀田は「一九四五年三月二十四日から、一九四六年十二月二十八日まで、一年九ヶ月ほどの上海での生活は、私の、特に戦後の生き方そのものに決定的なものをもたらした」¹と、「上海での生活」が戦後の「生き方」を決める要因であると語る。また、佐々木基一も「この期間の外地体験が堀田善衛の意識を決定した。彼の思想、彼の日本観、彼の日本人観、彼の中国観、彼のアジア、アフリカにわたる独立運動への評価を決定した」²と言い、堀田の思想、価値観及び社会活動における「外地体験」の重要性を指摘している。そのほか、本多秋五は「上海における敗戦体験が、堀田善衛の文学を決定した」³と堀田の文学における上海の「敗戦体験」という点を強調する。この上海での体験、中国との関りが戦後作家となる堀田の出発点だと考えてもよいだろう。では、堀田の作家となる条件を決めた「上海での生活」あるいは「外地体験」あるいは「敗戦体験」（以下は「上海体験」⁴に統一する）とは具体的にどのようなものだったのだろうか、中国人とはどのような交渉があったのか。また、これは堀田の戦後の文学とどのように関係しているだろうか。さらに、それ以降に反安保条約運動、反帝国・反植民地運動、中国との国交正常化運動、反核運動など社会活動に身を投じた堀田との接点はどこにあるのか、などの疑問が浮び上がってくる。そのため、本論では戦後作家・堀田の形成と中国との関わりを、「上海体験」と初期の文学作品との関わりから論じようとする。

堀田の「初期」文学を如何に限定するか、ここに堀田の個人経歴⁵を少し紹介する必要がある

¹ 堀田善衛「上海にて」（筑摩書房、一九五九・七、引用は『堀田善衛全集』十二、筑摩書房、一九七四、三頁に拠る）。

² 佐々木基一「堀田善衛」『戦後の作家と作品』、未来社、一九六七年、一二七頁。

³ 本多秋五「国際関係に眼を開く堀田善衛」（『週刊読書人』一九六二・三・一九、引用は『本多秋五全集』第七巻、菁柿堂、一九九五・八、五二六頁に拠る）。

⁴ 「上海体験」は一九四五年三月二四日から一九四七年十二月二十八日（日本に上陸したのは一九四七年一月七日）までの堀田の上海での体験を指している。花森重行の「歴史に抗する“歴史”へ—堀田善衛における上海体験と「第三世界」」（『日本学報』、二〇〇三・三）では、特別な標示をしていないが、本論ではその特性を強調するため、括弧を使用することとする。

⁵ 年譜は『堀田善衛展 スタジオジブリが描く乱世』（神奈川近代文学館、二〇〇八・一〇）

ある。一九四二年九月に慶応義塾大学を繰り上げ卒業し、国際文化振興会に就職。一九四五年三月二四日に上海資料室へ赴任するため日本を出発、八月に上海で日本の「敗戦」を迎え、同年十一月、中国国民政府（国民党）中央宣伝部に「留用」し、一九四六年十二月二十八日に引揚げるまで働いていた。一九四七年一月七日に日本の佐世保港から上陸した翌月、世界日報社に就職、一九四八年九月の世界日報社が解散のため退社した。同年十二月に「波の下」を皮切りにして小説創作が始まり、後に「祖国喪失」に収めることになる一連の小説「共犯者」、「国なき人々」、「被革命者」などが続々発表された。長篇連作「祖国喪失」は第四章で詳しく分析するが、全て上海を舞台にして、日本が「敗戦」を迎える前後に起こった事件を描いている。その後、中篇小説「広場の孤独」と「漢奸」が、第二十六回芥川賞（昭和二十六年下半期）を与えられ、文壇における堀田の位置を確立したのである。前者は一九五一年の冷戦開始時の日本を舞台にしているが、後者は前述の作品群同様「敗戦」前後の上海を描いている。一九五二年二月からは、「歴史」に着手し、第五章で詳しく分析するが、一九四六年の上海で革命を起こす中国人と日本人との葛藤を中心にしている。この小説は堀田にとって最初の長篇小説であり、後の「時間」、「記念碑」、「奇妙な青春」と共に、久松潜一の指摘するように、「いずれも壮大なスケールの思想小説で、戦後文学運動の終焉した地点に第二の次元を切り開いている。」⁶もし久松潜一が概括したように、「歴史」からの作品を堀田文学の「第二の次元」とするならば、「祖国喪失」から「広場の孤独」までの小説は堀田の初期の代表作で、「歴史」以降は第二の展開期に入る作品として扱っても良いであろう。

この分け方に基づいて、本論では「祖国喪失」と「広場の孤独」を取り上げ、堀田文学の土台の形成と「上海体験」の関係を考察したうえで、「第二の次元」の文学となる「歴史」の小説方法の変化、及びその変化と中国文学との関係を論じる。この流れを通じて戦後の堀田文学の形成と中国との緊密な関係を具体的に論証して、堀田の文学が、日本人の彼と、中国の歴史や社会及び人間との葛藤の中から形成したことを考察し試みる。堀田善衛と中国というテーマに拘った理由については、第二節と第三節において詳しく説明する。

第二節 研究動機

大岡昇平に関する座談会において、樋口覚は「戦争文学」を見直さなければならないと主張し、次のように述べた。

大岡さんをはじめ第二次世界大戦における日本の「戦争文学」は、武田泰淳の『富

や『堀田善衛全集』（筑摩書房、一九七四～七五）などに拠る。

⁶ 久松潜一編『新版日本文学史七 近代Ⅱ』（至文堂、一九七三、一〇五七頁）。

士』、埴谷雄高の『死霊』、島尾敏雄の『出発は遂に訪れず』、大西巨人の『神聖喜劇』など、それぞれの卓越した個別性において「世界文学」の領域に達しています。⁷

樋口は小説に描かれた戦場や作家の創作動機に着目し、「戦争文学」がある意味で一国の文学の枠組を超え、「世界文学」に到達したと指摘している。国文学、外国文学、世界文学などのジャンルを区分する標準が曖昧なところがあるものの、異文化の他者に対する認識あるいは意識が強いという点から言えば、単一の文化背景より、多元的な文化の下で読む必要があるという意味では、首肯できるだろう。

同様な道理で、堀田善衛が引き続き上海や中国を描いたのは、エキゾチックな趣味のためではなく、本論の第三、四、五章に詳述するが、日中戦争、あるいは日中の歴史を描くためである。このテーマ自体が日本だけではなく、中国と直接的な関係を持っている。このような作品が容易に歴史資料として断片的に解釈され、作品全体の背後にある作家の意図が容易に後の読者に誤解される。たとえば、堀田の「上海にて」に対する中国人作家・張承志の解説がその一例として挙げられる。

堀田の「上海にて」は、一九五七年に彼が中国を訪問した後に書かれたものである。その中の「はじめに」には、以下の一段がある。

つまり、日本と中国、中国と日本という、そういうようなことが、なにか文学とか芸術とかというものと関係があるものかね、という問い方に対しては、あるものかないものか、そんなことはおれの知ったことではない、おれにあってこれがこうなっている、と言うよりほかに私には言い方がないのだ。日本と中国との、歴史的な、また未来における、そのかわりあい方というものは、単に国際問題などというよそよそしい、外在的なものではなくて、それは国内問題、というより、われわれ一人一人の、内心の、内在的な問題であると私は考えている。われわれの文化自体の歴史、いやむかしむかしからの歴史そのものでさえあるであろう。そうして、内在的な問題というものは、問題と称されるさまざまのものやことなかでも、結局のところ、もっとも攻撃的な性格をもっているものであった。⁸

この文章に対して、張承志は殊に最後の一文「もっとも攻撃的な性格をもっているものであった」に着眼して、次のように詳しく分析する。

⁷ 小森陽一 井上ひさし編『座談会 昭和文学史』第四巻（集英社、二〇〇三・十二・二三、三三三頁）。

⁸ 堀田善衛「上海にて」（筑摩書房、一九五九・七、引用は『堀田善衛全集』十二、筑摩書房、一九七四、四頁に拠る）。

これは豊富なものを表現する日本語の一例かもしれない。いかに屈折且つ直接的な表現であろうか。「もっとも攻撃的な性格をもっているものであった！」という最後の一文で、鋭く中国に対する日本人のコンプレックスを示している。言うまでもなく、政治の解釈を除いて、単に一種の感情から言っても、この表現は、十分に人を驚愕させる。

これは日本人から中国人へという一方通行的な表現であり、中国人から日本へ同等の感情は許せない。これは主観的で、強情かつ蛮行で、相手の異なる考えを全く気にせず、既に「もっとも攻撃的な性格を持つ」と言い示している。

(略)

そのひどさとは、相手への強迫性を隠していることである。到底平等ではないと言える。深く愛されているものの、その対象である中国は、もはや拒絶する権利を奪われた！

中国はそれを受け止められるか？いや。この点を承知した上で苦しんでいるのが、堀田善衛の文学である。だが、この苦しみの底には、文人の放任——母国に賦与された、占有の権利と主人の感覚を刻印されている。⁹ (拙訳)

張は「内在的な問題」が「もっとも攻撃的な性格を持つ」という一文を皮切りにして、これが中国人に対する日本人のコンプレックスだと分析し、日本から中国への一方通行的な感情で、中国への不平等が隠れていると指摘する。

しかし、引用文の文脈を見てみると、その前に、堀田が自分自身「断層」、「歴史」、「時間」などの小説を書く度に、「中国とのことを自分の問題として書いたりするのは、これでやめにしたい」¹⁰と思うということから始まるが、その後すぐに「しかし」でニュアンスを

⁹ 以下は原文である。“或许这还是一个日语的表达丰富的例子。如此的曲折和直截，它于定音的最后一针见血，道出了日本人的中国情结：‘最富攻击性格的东西！’不用说，即便排除政治的解释，单就一种感情的类型而言，这一表现，也足够令人震惊不已。／它是单向的，独属于日本人对中国的一方，而不能允许中国人对日本也照样情深意长。它是主观的，倔犟且稍有霸道，毫不在意对方可能还另有想法。它已经明言在先：它最富攻击的性格。／(略)／它的过分，隐喻着施予对方的强迫。说到底仍不平等——既然被它深爱，那么作为对象的中国，已被夺去了拒绝的权利！／中国能够接受它么？否。深知这一点并为此而痛苦，便是堀田善卫的文学。虽然这痛苦的底色也印着文人的放纵——由母国强盛而被赋予的、占有权利和主人的感觉。”（张承志：《上海的新娘与攻击的性格》，http://blog.sina.com.cn/s/blog_566198290100cuor.html）。

¹⁰ 堀田善衛「上海にて」（筑摩書房、一九五九・七、引用は『堀田善衛全集』十二、筑摩書房、一九七四、四頁に拠る）。

一変して、「いまでは、そうは思っていない」¹¹と述べている。その理由が、先述した引用文である。すなわち、堀田は中国を舞台とした創作活動を続ける理由を、この引用文で表していることがわかる。具体的にいえば、この「内在的な問題」が「もっとも攻撃的な性格を持っている」からこそ、彼自身の創作活動を続けなければならないということなのだろう。したがって、堀田はこの日本人の「内在的な問題」が変わらないと次の危機が来ると、その後の文章で自分の憂いを語っている。

このように、堀田は中国を描く動機が日中歴史を繰り返したくないという危機感に拠るものだと言っている。堀田の文学における苦悩とは日本人のコンプレックスが中国人に受け入れられないことから発したものだという張の指摘は、堀田文学に対する誤解だと言わざるを得ない。

この誤解には、ある種のイデオロギーが働いていると考えられる。これは中国だけでなく、日本、あるいは各国の文学研究に起こりやすい問題である。上記の例のように、小説の総体に目を向けず、断片だけに注視する読み方は、堀田文学だけの問題ではなく、大岡昇平文学や武田泰淳など戦争と戦後に関わるあらゆる文学を研究する際に起こり得る問題である。グローバル化が進んでも国家や民族などが解体しない限り、このような危険性が存在するわけである。次には、このような視点を持って従来の日本の堀田文学研究を考えてみたい。

第三節 先行研究の概略

各章における先行研究で具体的に言及するが、ここでは、堀田文学についての批評と研究を、新聞に掲載された評論、文学史における扱い、学術論文から鳥瞰して、これまでの研究動態を全体的に把握してみたい。だが、本論は堀田善衛と中国をテーマにするため、特に中国との関わりについての言及に焦点を絞る。

(1) 新聞に掲載された評論

前述したように、堀田は芥川賞を受賞する前に、上海を舞台にして一連の小説を創作した。長編連作「祖国喪失」や中編小説「歯車」などがその例として挙げられる。この「上海物」についての評論は、管見の限り、一九五〇年から新聞紙上に掲載され始めた。当時の新聞の評論を見通れば、山本健吉は主に日本人の「祖国喪失感」¹²や、世界危機と新文明

¹¹ 前掲「上海にて」、四頁。

¹² 山本健吉「創作月評」(『東京日日新聞』、一九五〇・五・一)。

などの要素に追い込まれる運命の力¹³に注目している。亀井勝一郎は「彷徨する猶太人」を「日本人の哀愁」¹⁴と評したが、この評語は山本健吉の言う「祖国喪失感」と相似である。吉田健一は作品における「人間の問題」と「人間の条件」¹⁵に興味を覚える。一九五一年の「広場の孤独」の受賞は、新聞紙上で多く取り上げられた。第三章に詳細に紹介するが、芥川賞の選評委員たちはこの作品における「時代感覚」や「国際意識」および「国際情勢」を高く評価した。そのほかに、青野季吉は現代の政治と人間との問題を描くのは堀田以外にいない¹⁶と断言した。河上徹太郎も「広場の孤独」を、時代意識を持っている充実した政治小説として肯定しつつも、一方で小説の「風俗化」を批判した¹⁷。こうして、「祖国喪失」、「歯車」、「広場の孤独」を発表した堀田は、日本人の「祖国喪失感」や複雑な国際情勢を描き、政治と人間の関係を表す作家として新聞紙に登場する。

一九六〇年代に注目された作品は「海鳴りの底から」（『朝日新聞』一九六〇・九・一八～一九六一・九・一四）であろう。当時、この作品は大きな反響を呼んだ。一九六一年三月一八日の『朝日新聞』に掲載された『「海鳴り」論争の問題点』では、次のようにある。

野間宏が『現代日本文学の問題』（思想・一月号）という評論で、「朝日ジャーナル」に連載された堀田善衛の『海鳴りの底から』を、安保反対闘争にもっとも深く触発された作品と評価したことは、その後平野謙の反論を呼び、野間もまた反論し、まだ結着がついたとはいえない。……この論争は、江藤や吉本を加えて、多角的に発展しようとするけはいが見えている。「政治と文学」の問題、文学「アクチュアリティ」説の帰結ともからみ合い、また文学以前の問題として、新日本文学会所属の作家たちの、政治参加の問題なども結びついているのである。¹⁸

この記事の通り、野間宏と平野謙は「海鳴りの底から」を安保反対闘争の視点から読むべきか否かという論争に始まり、次第に政治と文学との問題、また文学のアクチュアリティの問題へと広がっていた。そのほか、主人公山田右衛門の人物像についても、江藤淳¹⁹と宮本三郎²⁰が『朝日新聞』という場所を利用して異なる意見を示した。

¹³ 山本健吉「『世界危機への意識』の感銘」（『毎日新聞』、一九五一・四・二七）。

¹⁴ 亀井勝一郎「政治と文学の抵抗一二月号の作品から一」（『朝日新聞』、一九五二・一・二五）。

¹⁵ 吉田健一「体験と製作動機」（『東京新聞』、一九五〇・五・八）。

¹⁶ 青野季吉「私の推す新人 堀田善衛」（『朝日新聞』、一九五一・一〇・六）。

¹⁷ 河上徹太郎「時評 中間小説の実体」（『朝日新聞』、一九五一・一〇・一二）。

¹⁸ 「『海鳴り』論争の問題点」（『朝日新聞』、一九六一・三・一八）。

¹⁹ 江藤淳「『海鳴りの底から』と堀田氏の歴史観」（『朝日新聞』、一九六一・十一・二五）。

²⁰ 宮本三郎「島原の乱の人間模様 堀田善衛著『海鳴りの底から』（『朝日新聞』、一九六

一九七〇年代になると、武田泰淳との対談集『私はもう中国を語らない』（一九七三）と堀田の『ゴヤ』四部作（一九七四～七七）から示唆されたように、堀田の視線がヨーロッパへ向けられるようになったと考えられる。後に大仏次郎賞を受賞した『ゴヤ』は、堀田文学の新たな局面として認識された。一九七四年から七七年まで堀田に関する新聞における評論は、全てこの作品をめぐるものである。加藤周一の「ゴヤ論」の連載だけではなく、『ゴヤ』の書評、『ゴヤ』についての対談などもある²¹。この作品から、スペインと関わる新たな堀田文学が現れた。

『ゴヤ』四部作を書き終えた後、堀田は十年間（一九七七～八七）スペインに移住していた。日本に帰国してから、『ミシェル 城館の人』（一九九一～九四）で和辻哲郎文化賞（一九九五）を受賞した。『ゴヤ』四部作と『ミシェル 城館の人』という両大作は、その賞を受賞したことで明らかのように、批評界の称賛を得て、注目を浴びた作品である。

以上、新聞誌上で注目された堀田の作品と彼の受賞歴で分かるように、公式に評価された『ゴヤ』四部作と『ミシェル 城館の人』の反対に、一九五〇～六〇年代に上海や中国を舞台にした小説は、評価された作品の陰に隠されてしまっているように思われる。また、上記のように、一九五〇年代の「上海物」が山本健吉や吉田健一に評されても、主に日本人の内面に光を当てられ、上海或は中国がその取り扱う対象にならなかったと言える。

(2) 堀田文学に関する文学史の叙述

荒正人は戦後から一九五〇までの日本文学を三つに大別する。第一は「戦後文学」で、彼の言葉を借りれば、現代の混沌に執着する文学である。第二は伝統的な文学である。第三は民主主義文学乃至は人民の文学である。堀田の文学は戦後文学の直系として位置づけられている。²²

一方、一九五三年、山本健吉が『文学界』に「第三の新人」という評論を載せ、その中では、堀田善衛、安部公房などが第二の新人、すなわち、第二次戦後派として挙げられる。この分類は当時の荒正人と少し異なるが、一九五九年に荒正人が堀田を第二の新人に加えることから見れば、堀田の属性について山本に同調したと考えられる。²³

一・十一・十二)。

²¹ 「生きる小説家の目 堀田善衛著『ゴヤ』」（『朝日新聞』、一九七四・四・一五）、加藤周一「自分の言葉で存分に 堀田善衛『ゴヤ』細部は色々疑問も」（『朝日新聞』、一九七七・五・二七）など二〇篇以上がある。

²² 荒正人「戦後の文学」（近藤忠義編『現代文学総説Ⅱ 大正昭和作家篇』、学燈社、一九五二、二七四頁）。

²³ 山田博光「第二次戦後派の台頭」（『国文学 解釈と教材の研究』、一九七三・六、五七～五八頁）を参照した。

このように、堀田は第二次戦後派として文学史に位置付けられている。後の文学史における堀田の位置は、殆ど荒正人と山本健吉の説に基づいたものと考えられる。たとえば、久松潜一によって編集された『新版日本文学史 7 近代Ⅱ』（一九七三）と『岩波講座 日本文学史』第十四巻では、堀田は第二次戦後派に位置付けられている。

堀田の文学については、荒正人が「時代の矛盾に抵抗する意識を軸としつつ現代人の直面する危機感を追求する作風が、文学に広汎な社会性を回復し、日本文学の新しい可能性を示すものとして注目を集めている」²⁴と高い評価を与え、堀田文学が戦後文学を継承していると指摘した。「現代人の危機感」と「社会性」の回復に注目する荒正人と違って、平野謙は「堀田善衛は『歯車』以来、『祖国喪失』、『広場の孤独』、『歴史』、『夜の森』、『時間』と、つねにそのシチュエーションを時代の動乱期に設定してきた」²⁵ということから、堀田を第三新人との区別を見出している。全体を通して堀田の文学を紹介するのは、前記した久松潜一の『新版日本文学史 7 近代Ⅱ』²⁶である。この中で、彼は堀田の「広場の孤独」を「朝鮮戦争前後の緊迫した国際関係を背景に、左右勢力の激突する現代政治の非情なメカニズムにまきこまれて、自己の主体性を喪失する知識人の孤独と苦悩を描いた小説である」とし、その以降の「歴史」や「時間」や「記念碑」及び「奇妙な青春」を「戦争から敗戦後の二・一ストにいたる動乱期の全体像を描くという野心的な試み」として位置づけている。この分類は後の『新版現代作家辞典』²⁷に継承される。

以上に代表的な文学史や辞典を大雑把にまとめてみると、堀田の文学に関する史的な叙述は主に以下の三つの面にまとめることができる。第一は、現代人又は現代の知識人の抱く危機感や苦悩や孤独などを描くことである。第二は、時代設定を動乱期に設定することである。第三は、人間や社会の全体像を野心的に描くことである。しかし、忘れてならないのが、これらの叙述が堀田文学と中国との関連についてあまり言及していないことである。「時間」や「歴史」でさえ、「時代の動乱期」の設定や「時代の矛盾」などの抽象的な枠を用いて囲い込むだけであり、中国との関係へと問題を広げていないのは明らかである。

²⁴ 久松潜一編『近代日本文学辞典』（東京堂、一九五四、引用は一九六五年増訂十版、六三八頁に拠る）。

²⁵ 平野謙「堀田善衛」（『堀田善衛集』、『現代日本文学』二七、一九五八・十、四一四頁）。

²⁶ 以下の引用は久松潜一編『新版日本文学史七 近代Ⅱ』（至文堂、一九七三、一〇五七頁）に拠る。

²⁷ この辞典では、「広場の孤独」が「朝鮮戦争勃発とレッド・パージ事件の衝撃にゆらぐ知識人の内面を鋭くえぐった問題作」とされ、「時間」や「歴史」が「現代史の問題をいかに文学に収斂するか、という問題に取り組んだ作品として話題となる」と捉えられ、「記念碑」と「奇妙な青春」が「敗戦の憂色濃い戦時下から二・一ゼネストがGHQの命令で禁止されるまでの混乱期、時代の圧力をうけた人間群像を描く」と評されている。（大久保典夫編『新版現代作家辞典』、東京堂、一九八二、四五〇―四五一頁）。

従来の文学史に比べ、川西政明は『昭和文学史』において「上海体験」の重要性²⁸を強調している。だが、有力な証拠を挙げられず、「上海体験」或は中国と堀田文学との実質的な結びつきを見出していないと言える。

このように、堀田や堀田文学に対する文学史における叙述は主に上記のまとめた三点だが、中国あるいは「上海体験」との実質的な関係は整理されていないと言える。戦後派の作家として堀田を位置付けながら、その戦後派を定義する重要な要素である作家の体験²⁹を無視することは、一つの問題点だと言わざるを得ないのである。

(3) 研究論文

新聞での評論と文学史における扱いと比べ、研究論文では、堀田の「上海体験」の重要性が強調されていることである。

たとえば、服部達は「堀田善衛素描」において、「祖国喪失」「歯車」を分析した上で、「上海」によって堀田善衛の精神構造に印された対歴史・対政治コンプレックスが、堀田作品の基底に一貫して流れつづけていると指摘する³⁰。また、日野啓三は、堀田が戦争中から戦後にかけて上海にいたことと、帰国後新聞社に勤めたということが、ある意味でそのまま社会の渦巻の中心部であるような場所にいたこと、それゆえに、「その渦巻きの極度に複雑にして急速であるだけ、それだけ、そこで歴史は正しく現代的な素顔を露頭し、政

²⁸ 「四五年三月二十四日から四十六年十二月二十八日までの一年九カ月間がなければ、すなわち上海の時空間がなければ作家堀田善衛は存在しなかった。すくなくとも長編「祖国喪失」(四八～五〇)から「方丈記私記」(七〇～七一)「ゴヤ」四巻(七三～七六)へと到達するかたちでの堀田善衛というものはありえなかった」と川西政明が指摘する。(川西政明『昭和文学史 中巻』、講談社、二〇〇一・九、四九二頁)。

²⁹ 川村湊は戦後派を定義する時に、次のように述べる。「いま改めて、戦後派、特に第一次戦後派ですけど、その定義というか枠付ということを考えてみれば、当然一つは戦争体験と戦後体験、それからもう一つは社会主義というかマルクス主義というかそういうものの体験、それからもう一つは世界文学体験。」(川村湊、富岡幸一郎、柘植光彦「座談会 戦後派の再検討」、『国文学 解釈と鑑賞』、第七〇巻一一号、二〇〇一・一一、八頁) また、尾末奎司は「戦後派文学の性格」という文章において、「戦後派作家とは、文学が現実(体験)とあるべき関係において相互に抜きさしならず強力に作用しあう、その軌跡として、作品と作家とがともに独自の自己形成を遂げ、同時にそれが時代を照らす鏡ともなり得た、おそらく最後の文学世代なのだ」(日本文学協会『日本文学講座 6』、大修館書店、一九八八・六、三四八頁)と書き、戦後派作家と「体験」の重要性を強調する。

³⁰ 服部達「堀田善衛素描」(『近代文学』、一九五三・六)。

治はその「非人間的な怪物性」(歯車)を発揮して³¹いることを見出したという。村杉昭は堀田の「上海体験」がもたらしたものを以下の四点にまとめる³²。第一は「この戦争が内地で云々されているもの」とはまるで違ったものだという認識である。この認識によって「全体的な喪失感」がもたらされたという。第二は、「途方もなく大きな中国の広さ」である。このように中国に向かった時だけ、自らの祖国の時間に向き合う姿勢を生み出すという。第三は、もっと露骨に政治のメカニズムと、その中で役割を果たす人間の、非情な一面性を見たことである。このことから、「生活の目的化」という、社会的、かつ倫理的な課題が、知識人においてどのように果たされねばならぬか」という知識人の責任感が生まれたという。第四は、「侵略者であるという意識」である。この観点はやや全面的に堀田の「上海体験」の役割を分析したため、それ以降の研究は殆どこれを受け継いだと言える³³。

以上の論者たちは、堀田の「全体的な喪失感」、外側から「祖国」を見る角度、知識人としての責任感の獲得が、「上海体験」によるものだと大まかに結論にしている。

一方、小説の創作方法に注目して、堀田の「上海体験」を評価する評論家もいる。吉開那津子は、上海の体験が堀田に「生活それ自体より」、「国と国との関係、民族と民族の関係」という文学的課題を感じとらせたあげく、従来の「人間の生活、日常性」を重んじる日本文学の方法を「捨てざる」ことにさせた³⁴と指摘し、堀田の上海の体験で発見した文学的課題が堀田に新たな小説方法を要求したと説いている。竹内泰広は堀田が上海の体験

³¹ 日野啓三「堀田善衛論—颯風の眼ということ」(『近代文学』、一九五一・九、三八頁)。

³² 村杉昭「位置選択への決意——堀田善衛ノオト——」(『文藝首都』、一九五六・四、以下の引用はこの論文に拠る)。

³³ 羽山英作は「私の創作体験」を引用して、戦争の実態を見抜いた堀田の認識を示した後、上海で目撃した「日本人の残した無数の傷痕に喘ぐ中国人たちの統一をうちに孕んだ混乱と、国際都市上海に渦巻く政治と人間の激突がいかに凄絶であるかということ」が、堀田文学の出発と文学活動の全体を根強く規定したと判断する(羽山英作「堀田善衛論—体験について—」、『新日本文学』、一九六一・七)。このような上海の体験によって戦争から眼覚め、「日本、中国、アメリカの戦争処理の政治が渦巻く現実の中で」「“政治”と“人間”のかかわりを考えさせる」という観点は、鈴木昭一の「堀田善衛——「スフィンクス」論」(『日本文学』、一九六六・六、三九二頁)にも見られる。また、「このことが芸術至上主義の青年にとって一つの出発点となることができたのは、日本兵の蛮行のうちに、青春の扼殺者としての自身の投影を認めることができたからではなかったか」(松木新「堀田善衛の文学について」、『文化評論』、一九七二・九、一三八頁)と述べる松木新は、千頭剛と同じく、堀田の「加害者の意識と共犯者の意識」(千頭剛「堀田善衛における「政治と文学」」、『民主文学』、一九七三・五、一一三頁)に注目する。

³⁴ 吉開那津子「堀田善衛——「海鳴りの底から」など」(『民主文学』、一九七〇・六、九七頁)。

で獲得した「国際的なテーマ」や「外からながめる」視点を、伝統的な日本文学の方法では具象化し難い³⁵と相似とした観点を示している。

文学史の叙述や新聞の評論より、研究論文では、精神構造など思想認識の面と小説方法の面から「上海体験」の重要性や役割を強調している。しかし、ここで言われている「上海」は抽象的な概念でしかないように思われる。なぜなら、その論者たちが殆ど大きな社会環境や政治情勢から出発し、この中にいる堀田の精神構造や認識の変化を想像しただけであって、むしろこの大環境の中で推測された結論を、同様な社会環境に生きた人にも当てはまることにすぎないのではないか。つまり、堀田の「上海体験」の特殊性と彼の文学に与えた影響の独自性が具体的に論じられていないのである。

さらに言えば、前述した中国の読み方と同様、日本の先行研究においても、堀田の小説が同様に断片的に読まれていると言える。第三章に詳しく分析するが、堀田の初期文学に存在する中国的要素を無視して、知識人の内面心理に注目することは、前記した張と同様の都合によって取捨された読み方ではないか。この方法では堀田文学における国際情勢や「上海体験」の実像を読み取ることはできないと考えられる。

第四節 本論の目的と研究の方針

以上のような背景と問題意識に基づき、本論の目的は、従来の研究に具体的に論じなかった堀田文学と中国との関連を論証するため、堀田の「上海体験」に焦点を絞って考察することである。具体的には、「上海体験」が堀田の文学において如何なる位置を占めるか。また、上海で堀田が具体的に何を体験し、認識がいかに変化したか。そのほか、「上海体験」が思想と小説方法と両面から彼の文学にどのような影響を与えたのかなどの問題を解明することである。

そのために、本論は以下の研究方針で検討を行う。序の冒頭に触れたが、堀田にとっての転換点である「上海体験」の位置を明らかにするため、本論は、上海に行く前の堀田の文学を第一章にして、「上海体験」についての考察を第二章、堀田戦後の文学作品についての解説を第三、四、五章にするという構造を採る。また、堀田の上海での体験を具体的に呈するため、歴史的資料や文学史的事実を掘り起こし、作家を取り巻く状況へ還元を試みる。そのほか、堀田の文学と「上海体験」との関連を考察するため、テキストを具体的に分析し、検証する。従来 of 傾いた研究状況を克服して、より客観的に堀田文学を捉えるため、作品の全体構造に焦点を当てる。加えて、堀田と中国の作家たちとの関連も本論の注目点である。上海で知った中国の作家らが堀田文学に与えた影響も、堀田と中国との関係

³⁵竹内泰広「堀田善衛とアジア」(『戦後文学とアジア』、毎日新聞社、一九七八・十二、一六〇頁)。

の一環だと考えているため、これについても考察を行う。

このように上海の体験を具体的に考察し、作品を具体的な分析することにより、堀田文学の土台を多方面から見つめ、日中の複眼的な視点で日中歴史を描く堀田文学を捉えるという新たな方法が、本論の試みである。実証的に論じるため、資料的には、神奈川近代文学館の堀田善衛の旧蔵書や自筆原稿他の資料、中国上海档案馆や中国外務省にある「上海体験」時代に関わる公式文書の直接調査を行った。

第五節 論文の構成

本論は、五章からなる。

第一章では、戦後の堀田の変化をより明確にするため、同人誌『批評』（一九四二～四四）の性質とこの雑誌に掲載した堀田のエッセイや評論を分析して、上海へ赴く前の堀田の文学活動について考察する。特に、長編古典評論「西行」と小林秀雄の「西行」を比較することから、上海に行く以前の堀田が、河上徹太郎や小林秀雄などの影響を受けたことを明らかにする。

第二章では、上海へ行く動機、上海での体験、その体験による堀田の認識の変化について考察する。一九四五年八月から四六年十月まで堀田の日記や同時代の証言及び公式文書によって、堀田の「上海体験」を具体的に呈示する。それと同時に、上海の体験で彼が獲得した新たな認識について考察する。

第一章と第二章を踏まえ、第三章以降は、上海から引き揚げた後、堀田の思想と小説方法について考察する。テキストを分析することによって、堀田が如何に上海で得られたものを小説の中に反映したかを検証する。

第三章では、芥川賞の受賞作「広場の孤独」を取り上げ、文壇に認められた堀田の作品を読み直し、時代に制限された従来の読みを批判しつつ、この作品にどのような「上海体験」からの影響があるか考察する。

第四章では、堀田の初期代表作である長編連作「祖国喪失」と「広場の孤独」の作品構造から出発し、その中に投影される堀田の認識を明瞭にしなが、このような構造を用いる堀田の意図を明らかにする。このことによって、作家の認識と意図には、「上海体験」と関わる要素が浮かび上がらせる。

第五章では、堀田が初期作品から次の段階に移動する際の、その作風の変化を具体的に示し、その変化に中国作家からの影響を考察する。したがって、第五章では、この両側面を論じるため、両作家を比較する方法を採る。

このように、本論は戦時下から戦後の初期にかけて、堀田の思想や文学の変遷を細緻に辿りながら、中国と堀田文学と緊密な関連を呈したい。

第一章 「上海体験」前の堀田善衛について —『批評』を中心に—

第一節 本章の問題意識と方法

青野季吉は、一九五二年一月二八日、即ち第廿六回芥川賞が発表（一・二三）された一週間後の『愛媛新聞』に、「堀田善衛の文学——芥川賞受賞作家」という一文を寄稿し、堀田善衛について次のように書いている。

堀田善衛君がこんど芥川賞をもらうことに決まったのは大いにいいことだ。彼は、長い間文学青年時代をすごしてきたようだが、その間のことは 僕は知らない。しかしそういうことも知らない僕もこれだけのことは言える。つまり、彼が終戦前後をシャンハイで過ごしたことが、彼の文学の上に生きているということだ。¹

これは恐らく当時の文壇の堀田に対する正直なコメントであろう。芥川賞を獲得するさらに以前に推移すれば、一九四七年に日本に引き揚げる前に書かれた堀田の文学は、世に知られていないのが事実である。それにも拘らず、ここでは堀田の文学が「シャンハイで過ごしたこと」によって決められたと位置付けられている。

この事象には、三好淳史も気付き、「戦時期の堀田善衛」という論文において、堀田が上海に赴く前の文学を、主に詩と評論から分析して、「戦時期の評論には、小林（小林秀雄—筆者注）や芳賀（芳賀檀—筆者注）以外に、保田與重郎の影響を認めることもできるだろう」²と結論付けている。

本論は三好の先行研究を踏まえ、主に上海に行く前、すなわち『批評』同人時代の文学活動に焦点を絞り、詩やエッセイ及び評論から青年堀田の文学姿勢を見出し、戦後に作家になった堀田善衛を形成した土台について論究する。

¹ 青野季吉「堀田善衛の文学——芥川賞受賞作家——」（『愛媛新聞』、一九五二・一・二八）。

² 三好淳史「戦時期の堀田善衛」（『日本文学誌要』三九、一九八八・六、四五頁）。

戦時下の堀田善衛は主に詩を中心に創作活動を行ったが、詩集が刊行されたのは戦後になってからのことである。そのうちの一冊は彼が自ら作った『別離と邂逅の詩』と題する「詩集」で、没後に『堀田善衛追悼特集』（『すばる』一九九八・一一）という特集の形で掲載された。もう一冊は集英社より出版された『堀田善衛詩集』（一九九九）である。この二つの詩集に収録された詩は合計七四篇で、その内の五十篇が敗戦前に書かれたものである。³ また、詩人たちの活動にも多く参加した。例えば、慶応義塾大学仏文科在学中に、同窓の芥川比呂志や福永武彦や中村真一郎、その他に鮎川信夫や田村隆一らの『荒地』グループとの交流があった。しかしながら、一九四二年九月、戦時下の特例措置による半年繰り上げでの卒業の後に国際文化振興会に入ってから、堀田の文学活動は主に同人誌『批評』を中心にして展開された。詩については、武藤功氏が『「二重扼殺者」としての詩人』ですでに綿密な分析をしていることもあり、本論では触れないことにし、以下、主に戦時中に『批評』に掲載された堀田の評論とエッセイ、とりわけ「西行」を中心に分析し、当時の彼の歴史認識と文学観について考えてみたい。

第二節 堀田善衛と『批評』

昭和十四年八月に創刊され、昭和二十年二月までに通巻五十六冊を刊行した戦前版の『批評』は、山本健吉、伊藤信吉、中村光夫、吉田健一、西村孝次、権守操一、寺岡峰夫、青木照夫、足立重、斎藤正直、平野仁啓の十一人によって創刊された。堀田が入ったのは昭和十八年頃であった。前年に慶大を卒業して国際文化振興会に勤めていた彼は、同会の伊集院清三の紹介で吉田健一を知り、またそれまで改造社に勤めていた山本健吉もこの年に国際文化振興会に転職したことで、山本健吉とも親しくなった。⁴このような経緯で、堀田は『批評』の同人になり、同年七月号から作品を載せ始めた。一九四三年から一九四五年までの間に『批評』において発表した作品は表一（本章末に掲載）の通りである。さらに、十一月には西村孝次、吉田健一、平野仁啓、山本健吉と共に、『批評』の編集同人となり、

³ 武藤功『「二重扼殺者」としての詩人』（『堀田善衛——その文学と思想』、同時代社、二〇〇一年）を参照した。

⁴ 磯田光一「解説—あるグループの詩と真実」（『批評』復刻版、一頁）。

編集その他の事務を担当するようになった。⁵

戦時中の『批評』について、磯田光一は次のように解説している。

『批評』には日米開戦の直接的な影響は、とくにみられない。昭和十七年二月号の吉田健一の文芸時評は、非常時に何を守るかについての屈折した表現である。『文学界』昭和十七年一月号の河上徹太郎の文芸時評「光榮ある日」の冒頭部分は、完全な「大東亜戦争」讃美であり、『文学界』二月号は「愛国詩」の小特集をやって戦意をあおっている。こういうなかに『批評』（昭和十七年三月）で柳田・折口学を「国学」としてとらえた山本健吉「神代の発見——国学と歴史に就いて」を置いてみると、当時の民族主義に近接しているかともえながら、“古代”を知性ならぬ感性でとらえている点において、古事記—宣長—柳田—折口を“古代”の心への推参の系譜とみなす文化史観の提唱なのである。⁶

民族主義に見えながら、実際には文化史観の提唱だという磯田氏のこの解説には、『批評』を弁護する意向が透けて見える。確かに『批評』は『文学界』のほど戦意高揚的ではないが、実際に提唱している「国学」は、一種の国粹主義ではないかと疑われるほどのものである。直接的な戦争協力とまでは言えないが、ある意味で国家の側にあったと言えよう。例えば、『批評』の第五卷第九号の後記では、山本健吉は東北の村々の民俗から始め、民俗に満ちている「深い、暖い、血統を意識した民族の思慕」い感嘆し、「果たして世界に、これ程歴史の伝承に己れの栄光を見出し得た国が外にあらうか」と書き、日本民族や国家の優越性を高唱している。このように山本健吉は、民俗文化に着目して、民族や国家を第一義的に考えている。

そして、この考えは、彼の文学評論にも見られる。『批評』第五卷第十号の後記では、彼は「感受性の頹廢が我々から無心の享樂を閉出したのだ。宛もそのような成心をそそのかのやうなものが、近代の小説には充滿している。そして鏡花が我々に満喫させてくれるあの楽しみをもう一度回復すること、それ以外に小説の救はれる道はないと思へるのだ」⁷と

⁵ 山本健吉『批評』第五卷第十二号後記（一九四三・一一）を参照した。

⁶ 前掲、「解説—あるグループの詩と真実」、一頁。

⁷ 山本健吉『批評』第五卷第十号後記（一九四三・一〇）。

述べ、「近代の小説」を頽廃小説として否定し、当時の小説を救うためには日本の精神があらわされた文学を作らなければならないという意思を示している。一方、堀田は『批評』に入った当初は詩とエッセイを発表していたが、山本健吉の「救小説論」と時をおなじくして、「西行」(『批評』一九四三・一二～四四・一一)を書き始める。つまり、堀田の古典を提唱する行為には、山本健吉をはじめとした『批評』グループの影響が考えられるのである。以下、彼が具体的にどのような影響を受けたか、彼自身の歴史認識がどのようにあらわれているかという点について、分析したい。

第三節 「歴史の捨象」という認識

三好淳史は「歴史の捨象」という言葉から出発して、堀田における小林秀雄や芳賀檀との影響受容関係を論じた上で、死を有意義なものにするために戦争を正当化するという堀田の戦争認識を指摘している。つまり、堀田が自ら「正気の自分」を「扼殺」する方法を、「歴史の捨象」、「自己自ら運命を見做すこと」と要約したと三好は述べている。続けて、この「歴史の捨象」という言葉を用い、三好は堀田善衛と小林秀雄の関係を以下のように論じる。

「歴史を捨象」するとは、戦争当時の作者の内面に滞っていた歴史認識(「侵略戦争」)を放棄することによって、不可避な自らの死(戦死)を合理化し、正当化することを意味したが、その文脈は基本的に、小林秀雄が取った立場＝「マルクス主義の完全理論主義のトータルな否定としての決断主義」に負っていたのであり、「(史上の人物――もしここで人間を云ふならば、史上の人物とは、決断そのものであると云へる。はっきりと行為しははっきりと死んでいる。心理主義などではなく、曖昧な人間など一人も居らぬ)、小林によって「非常時の非常時たる所以は、まさに例外状態、すなわちいかなる一般理論も妥当しない状態ということに求められ」たから、「自然な生の方向」「素直な自然」を強調して、参戦行為を絶対化し、その一方で、概念装置を駆使して客観的な歴史認識を得ることの無意味を力説したのである。⁸

⁸三好淳史「堀田善衛論――敗戦前後の日本を描いた二つの作品――」(『国語と国文学』、

以上の通り、堀田が侵略戦争という歴史認識を拒絶することで、戦死を合理化するという「歴史の捨象」が、小林秀雄の自然や戦争に対する歴史認識から来たものだと三好淳史は述べている。堀田の血統や民族についての見方には、小林秀雄だけではなく芳賀檀の影響もあったと彼は付け加えている。このようにして、三好淳史は戦時期の堀田善衛は小林秀雄や芳賀檀の影響を受け、日中戦争を「侵略戦争」だとする歴史認識を拒絶することで、戦死を正当化して「自己救済」の目的を達成すると述べている。堀田における「民族」や「歴史」及び「自然」に対する認識においては後述するが、彼が小林秀雄と芳賀檀の影響を受けたのは確かであるものの、三好淳史が指摘するような戦争を正当化することによる「無意味な死」からの逃走という点には、おそらく「死」に対する恐怖を抜け出して「生」へ転換する堀田の決意を、一種の戦争において戦う決心として理解したものであろう。

堀田の作品は、決して戦死を合理化するものではない。「西行」において、彼は保元の乱と平治の乱を悲劇だと捉えている。そして、戦争を起こした理由を次のように問う。「この時の血族群郷武士の抗争、流血の悲劇は、人も知る如くまことに云ひ様もない惨憺たるものがあつた。戦ひの戦はるべき断然たる理由がどこにあるか。親子兄弟の運命劇」⁹。堀田は、「戦ひ」をあくまでも惨劇や理由のない「運命劇」として捉えている。抗争や戦争の中の「流血」と「惨憺たるもの」を強調することから、戦争や戦死を合理化するより、むしろそれを否定し、戦争で血を流す人々の無惨を悲嘆する彼の気持が窺える。

また、「西行」において、この乱世に生きている人々は如何にそれに直面しているのだろうか。以下に本文を引用する。

保元の乱、さうして、院の御遷行は、当時まことに筆舌につくしがたい一大事であつた。人々は「こは如何になりゆく世のなかぞや、天照大神は百王を守らんと御誓も尽きぬるやらんと申されければ、光頼卿つらつら事の心を思ふに、日本は神国なり、されば御裳濯河の流絶えずして……」とまでに考へたのであつた。日本は神国なり、との、この言葉が発せられる時は、如何なる歴史の時であるか。我々は今日の国難に

一九九三・七、五〇頁)。

⁹ 堀田善衛「西行」(『批評』一九四三・一二～一九四四・一一、引用は『堀田善衛全集』第十三巻、筑摩書房、一九七四、三七二頁に拠る)。

際するの時に生きて、保元の乱の時の人心について、自らの手のとどかないような深みに於いて深く理解するところがあると思ふ。¹⁰

堀田は『保元物語』から、乱世に生きる人々が「こは如何になりゆく世のなかぞや」と思い惑い、絶望に至った時に、藤原光頼が「日本は神国」であるから滅亡はしないという言葉で、そのような人々に希望を与えたことを引く。そして彼は、保元の乱当時の社会状況における「人心」と「日本は神国」という光頼の言葉に対し、「我々は今日の国難に際するの時に生きて」、「自らの手のとどかないような深みに於いて深く理解するところがあると思ふ」と、同じ「国難」に際している「我々」には深く理解出来るだろうと記す。ここで、彼が保元の乱が起きた平安末期と「今日の国難」を重ね合わせ、騒乱の世に生きる人々との心情の共有を示していることから、惨劇である戦争を運命として捉えるしかないという態度と共に、戦争の多発する社会に絶望しながらも希望を微かに持っている堀田の心境を読み取ることが出来る。

このように、堀田にとって戦争は悲惨でありながら、一種の運命的なものである。このような悲劇のなかでどのように生きるかということが、戦時中の彼の最も関心を寄せた問題であり、彼の戦時中の作品の大きな主題と言えるだろう。

第四節 古典の提唱へ

「西行」の前に発表された、「未来について」（『山河』一九四三）、「覚書」（『批評』一九四三・九）、「何処へ？——立原道造論」（『批評』一九四三・五）では、主に乱世における生き方をめぐって書かれている。

一九四三年に『山河』で掲載した評論である「未来について」の冒頭で、堀田は「どこへ行っても、どこにいても、いつもここにいるとは限らぬに——といふ思ひがするのである。朝、立ち出るに際しては、再び帰ることはないかもしれぬといふ思ひが陽の光をかすめる。夕暮の帰路にしても、もはや私には「帰路」といふ言葉の含むあらゆるものがよく

¹⁰ 前掲、「西行」、三六九頁。

わかるとは言へない気がする」¹¹と書き、毎日死に直面する状況を示している。このような状況下で、彼は「生」について考えるようになる。

だが、当時の堀田は「自分一箇にとって、己れ自らの未来は、いよいよ不可思議な唯一のものであった。身にこたへる死を胸に蔵した上では、未来があるといふことは、また現在そのものも、全く了解も何も出来ぬことに思はれるのだ」¹²という箇所に見られるように、混迷の状態に陥っている。彼は、「私は芸術作品を考へることなしには、思ひ描くことさへ出来ないのである。死といふ一限界を前提にした場合、未来への生を考へるについて、芸術ほど確実な土台はあり得ないやうに私は思ふ」のように、死の恐怖を克服するために芸術を「確実な土台」として拠り所とし、芸術を通して未来を描こうとする。毎日死に直面する状況にいる堀田にとっては、「未来への生」について考えることができるのは、芸術という「確実な土台」に立つことによってなのである。先に見たように、三好淳史は堀田が死の恐怖から脱出した理由について「参戦行為を正当化」するためと指摘しているが、堀田の評論「未来について」からは、むしろ芸術を拠り所として「死といふ一限界」を前にして、「未来への生」を考へる彼の姿が浮き彫りになってくる。

「未来について」と同じ時期に、『批評』に発表した「何処へ？——立原道造論（『批評』一九四三・五）においても、堀田は自分の居場所について混迷しながら、一種の自己への激励のように、「それ（居場所を見つける——筆者注）までは勇氣、或は謙虚さといふことばで言はれていたものが突然、進んで決意、或は信仰といふ名に呼びかへられなければならない、あらはな肯定でもなく否定でもなく、問ひ（居場所はどこ？——筆者注）が消え、従って眼をひらいたままの深い大きな頷きが訪れる」¹³だろうと述べている。この中には、自己存在に対する不安と混迷が見られると同時に、未来への希望をも抱いていると考えられる。それは「璽後（居場所が分かった後——筆者注）、詩人は純粹に己が言葉、詩によってのみ生きるやうになる」ということである。つまり、戦時中の堀田が憧れた生き方は詩人として生きることである。

¹¹ 堀田善衛「未来について」（『山河』一九四三、引用は『堀田善衛全集』第十三巻、筑摩書房、三〇七頁に拠る）。

¹² 前掲、「未来について」、三〇八頁。

¹³ 堀田善衛「何処へ？——立原道造論」（『批評』一九四三・五、引用は『堀田善衛全集』第十三巻、筑摩書房、三一三頁に拠る）。

以上の両作品と同じ年、『批評』に掲載された「覚書」(『批評』 一九四三・九)において、堀田は「長らく僕らの根本性情が冀ひつつ得るをえなかつた清らかな文学を、つひに一点に流露せしめるきっかけは何処にあるか」¹⁴と問い、「優にうつくしい古典がある」と提唱した。前述したが、同じ時期に山本健吉も『批評』の後記に、近代小説の頽廃から抜け出し、小説を救うのは古典を回復する道しかないと記している。『批評』という拠点における山本と堀田の呼応から、古典を提唱する意識は堀田一人だけではなく、同人の間で共有していたものだと考えられる。

このように、戦時期に書かれた堀田の評論には、死に対する恐怖と自己存在に対する不安が克明に描かれている。しかし、このような恐怖や懐疑を克服するため、堀田は芸術を武器として持ち出している。彼にとって、芸術は死を超越できるもの、未来へ生きていける希望を与えてくれるものと言えるだろう。芸術によって生きていく決意を固めつつあった彼が古典を提唱する最も大きい理由は、古典に「希望を読み取れる」ためである。古典によって小説を救うことが、彼が「西行」を執筆した背景にある大きな動機と言えるのではないだろうか。

第五節 堀田善衛「西行」について—小林秀雄との比較

「西行」が戦時中の堀田善衛の最も代表的な作品だと考えられるのは、当時の彼の作品で最も長編であるからだけではなく、この作品が戦争や文学に対する考えを最も多く含んでいるからである。一九四三年十二月号から四四年十一月号にわたって『批評』に連載されたこの作品は、五つに分けられている。即ち(一)「伝説」(一九四三・一二)¹⁵、(二)「出家」(一九四四・一)、(三)「原高貴性(一)」(一九四四・二)、(四)「原高貴性(二)」(一九四四・四)、(五)「崇徳院」(一九四四・一一)である。「原高貴性(二)」の後、一九四四年一月の堀田善衛の応召により一旦中断されたため、最後の「崇徳院」は彼が病気で除隊してから『批評』に復帰した時に書かれたものである。

¹⁴堀田善衛「覚書」(『批評』一九四三・九、引用は『堀田善衛全集』第十三巻、筑摩書房、三一九頁に拠る)。

¹⁵「伝説(一)——西行・序」として発表され、以下の号では「西行」が表題となる。

この作品は三好淳史が指摘したように、「小林秀雄の『西行』あるいは古典論に拠るもの」であるが、歴史観¹⁶のみを挙げて論じた三好淳史の説明を補い、以下堀田善衛と小林秀雄の「西行」を具体的に比較しながら、両作品の西行像の特徴に焦点を当てる。

5-1 西行の「決断」

小林秀雄と堀田善衛は、どちらも西行の出家について関心を持っていないと言いながらも、彼の和歌の読解において、出家という行為は一つの決断であり、彼は優柔不断な人間ではないと説いている。以下、小林秀雄の「西行」より引用する。

(鳥羽院に出家のいとま申すとてよめる)

惜むとて惜しまれぬべき此の世かは身を捨ててこそ身をも助けめ

(世にあらじとおもひける比、東山にて人々霞によせて思ひをのべけるに)

空になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひたつかな

(おなじ心をよめける)

¹⁶ 三好淳史は「戦時中の堀田善衛」(『日本文学誌要』一九八八・六)において、「堀田善衛は小林の歴史観(「歴史には死人だけしか現れて来ない。従って退っ引きならぬ人間の相しか現れぬし、動じない美しい形しか現れぬ」)「無常という事」を踏襲して、「史上人物——もしここで人間を云うならば、史上の人物とは、決断そのものであると云える。はっきりと行為しはっきりと死んでいる。心理主義などではなく、曖昧な人間など一人も居らぬ」と書き、歴史を「精神」の体験(「状態」)に還元するという小林の方法を援用して、「一人の詩人作家をとらえて、そのまわりに社会的歴史的時代的経済的の条件を仕掛けて、どの位い時代精神が反映しているかなどとのぞき眼鏡をのぞくようにしてみてもどれだけ面白かろうか。誰が社会などを見たものがあるろう。すべて折にふれて現れるのだ」と書いた」というように、歴史観と「歴史を「精神」の体験に還元するという方法」両点から、堀田善衛が参戦の不安から抜け出すため小林の観点を補強材として利用したという結論を出した。

世を厭ふ名をだにもさはとどめ置きて数ならぬ身の思出にせん

(世をのがれけるをり、ゆかりなりける人の許へ云ひおくりける)

世の中を反き果てぬといひおかん思ひしかるべき人はなくとも

これらは決して世を追いつめられたり、世をはかなんだりした人の歌ではない。出家とか厭世とかいう曖昧な概念に惑わされなければ、一切がはっきりしているのである。自ら進んで世に反いた廿三歳の異常な青年武士の、世俗に対する嘲笑と内に湧き上る希望の飾り気のない鮮やかな表現だ。彼の眼は新しい未来に向って開かれ、来るべきものに挑んでいるのであって、歌のすがたなぞにかまっている余裕はないのである。確かに彼は生得の歌人であった。そして彼も亦生得の詩人達の青年期を殆ど例外なく音ずれる、自分の運命に関する強い或は強過ぎる予感を持っていたのである¹⁷

二首目上の句の「空になる心」については、主に二通りの解釈がなされてきた¹⁸。一方は「欣求浄土への願い」を「春の霞」に譬えるという解釈、もう一方は「空になって落ち着きのない心」を「春の霞」にするという解釈である。この解釈にも拘らず、これらの歌を読み、西行を「世を追いつめられたり、世をはかなんだりした」人と捉えた人々に対し、小林秀雄は、彼らは「出家とか厭世とかいう曖昧な概念に」惑わされていると批判している。また、小林は掲出歌の中に、未来を拓く西行の決心を読み取り、厭世説や恋愛説など他の西行出家論を否定している。

一方、堀田は「生活から出家について云々するならば、西行などよりも近世の私小説作家の方が余程出家である」¹⁹と書き、社会や歴史から乖離する近世の私小説作家を諷刺し

¹⁷ 小林秀雄「西行」(『文学界』一九四二・一一、引用は『小林秀雄全作品』第十四巻、新潮社、一九九七、二刷、一七三頁に拠る)。

¹⁸ 白洲正子「西行」(一九八八・一〇、『白洲正子全集』十一、新潮社、二〇〇二、一二六頁)を参照した。

¹⁹ 堀田善衛「西行」(『批評』一九四三・一二～一九四四・一一、引用は『堀田善衛全集』第十三巻、筑摩書房、一九七四、三四二頁に拠る)。

た上で、「西行は世を捨てて却って歴史に生きた」²⁰と西行の出家を高く評価する。

西行出家もまた多くの伝説を生んだ。当然のことである。明らかなことは、ここに如何なる時にも人の切情に触れる、一つのはっきりした「決断」がなされたといふことだ。その決断が、恰も闇に於ける光炎の如くに皎々と燃えつづけているのだ。歴史はさうした決断の火継ぎである。しかも、西行の出家は、決して悲壮めいた災殃・悲劇への意思といふものではない。その光炎を、人々が夫々うけもって己が持し衷情と照し合ふ時に、光炎は更に他の炎と出会ひ、多くの西行伝説が生じる。(略)一般厭世説、政治原因説、恋愛説、おまけに総合原因説。いはゞ所謂「人間」を超えた決断を、「人間」で割り算をして何が割り出されて来るだらうか。残るものは依然として闇の光炎の如き決断そのもののみである。²¹

ここからは、西行の出家を一つの「決断」として評価し、西行の出家という決断精神を讃美している堀田の姿勢が明らかになる。このように、西行の出家については、小林秀雄と堀田善衛の二人の着眼点が、専ら西行の出家に対する毅然とした態度にあることが分かる。彼らは共に、西行を厭世的な人間ではなく、決断精神を持って未来に向けて前進するという人物像として捉えているのである。

5-2 西行の「信念」

前述したように、小林秀雄と堀田善衛は西行の出家を一つの「はっきり」した「決断」だと考え、強い決断精神を持つ西行像を作り出した。次は同じ歌に対するこの二人の解釈から見られる西行像に注目してみたい。まず小林秀雄の論評を見る。

世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけれ

こういう歌も仏典の弁証法の語法を借りた概念の歌として読み過す事は出来ないので

²⁰ 前掲、堀田善衛「西行」、三四二頁。

²¹ 前掲、堀田善衛「西行」、三四二頁。

あって、思想を追おうとすれば必ずこういうやっかいな述懐に落入る鋭敏多感な人間を素直に想像してみれば、作者の自意識の偽らぬ形が見えて来る。西行とは、こういうパラドックスを歌の唯一の源泉と恃み、前人未到の境に分入った人である。よほどの精力と意志とがなければ、七十三歳まで歩けやしない。従って、彼の風雅は芭蕉の風雅と同じ、決して清談という様なものではなく、根は頑丈で執拗なものであった。併し、こういう人物が、見掛けは不徹底な人間に見えるのは致し方なく、彼に意志薄弱な人間らしさを読みとり、同類発見を喜ぶ人も多いわけであるが、僕は、そういう現代人向きに空想された人間西行とか西行の人間らしさとかいうものを好まぬ。²²

引用された西行のこの歌について白洲正子は、この歌は述懐作で、西行がこの歌を作ったのは、出家前も出家後も彼の心が揺れて不安定な状態にいるからであると指摘している。²³しかし、小林秀雄の解釈は異なり、この歌は「思想を追おう」とした時に「やっかいな述懐に落入」った時の歌で、西行の「自意識の偽らぬ形」が見えて来ると論じている。また、小林はこのような述懐作から西行を「意志薄弱な人間らしさ」を読み取るような「現代人向き」の「空想」に反感を持ち、西行を徹底的に人間として意志の強い人間として捉え直している。

一方、堀田善衛は同じ歌について、小林秀雄と比較すると、より情熱的な調子で西行を解釈している。

半僧半俗といふ生き方。文覚上人は彼を見つけ次第打なぐってやらうと云っていたといふが、出家するとは僧になることなのである。彼は円位と云ひ、修行をももとよりこれを行ひ、形ははっきり僧なのである。しかし世を捨てて僧となることはさまでの難事ではなからうが、己れが持し天性のままに生きることは難しいのである。誰の罪でもない、世のせいでもない、天性である。

世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけれ

²²前掲、小林秀雄「西行」、一七六頁。

²³白洲正子『西行』（新潮社、一九九七・一二）を参照した。

どういう意味があるのでもない、私はたゞここにはつきりと詩人を見るのである。孤独な魂が底深く秘めている激越な振幅が音もなく、しかも音たてて物狂っている。何の弁解でも思弁でも決してない。己が運命についての怒りをさへ含んだ信仰告白である。天性、と生き方てふこと、これは同じことである——もとより天性なきものはない、だからこそ持つて生まれた、といふ言葉があるのである。しかもその自然の天性のまゝに生きた人は何と少ないことであらう。信じることは容易なことではないのだ。その少数の人々こそ史上の人物であらうに。²⁴

堀田は、西行のこの歌は「運命」に対する思索から来たもので、「天性」で生きなければいけない西行の「孤独な魂」の「底深く秘めている」ものが激しく「物狂って」、さらに「己が運命」に対する怒りさえもが表れていると主張している。換言すれば、西行はこの「運命」に遭遇して、孤独や怒りがあっても、天性を信じて生きるしかなかったが、それ故に歴史に残る「史上の人物」となった。このような解釈によって、堀田は運命に直面しても天性を信じて生きていく歴史上の人物としての西行像を創出した。

このように、小林秀雄と堀田善衛の解釈では、従来の「人懐かしい」人物像や「人恋い」等のイメージに反して、西行を決断力があり、信念を持って生きる人間としている。前述したように、小林秀雄は西行を歴史上有数の歌人として非常に高く評価しているが、彼がその評価の上で最も重要視していることは、西行の歌の「素直」さという点である。

5-3 西行の歌の素直さと平明さ

小林秀雄は、西行の「はっきりと見、はっきりと思ったところを素直に歌う」という点を「万葉集」以来にないことであると高く評価している。さらに、歌は素直だが、それは西行の心が単純ということを言いたいのではないと付け加え、素直さと単純さを区別して論じ始める。

勿論、彼の心は単純なものではなく、所謂「幽玄」の歌論が、言葉を曖昧にするという様な事は、彼の歌では発想上既に不可能な事であった。この人の歌の新しさは、

²⁴前掲、堀田善衛「西行」、三四四頁。

人間の新しさから直かに来るのであり、特に表現上の新味を考案するという風な心
労は、殆ど彼の知らなかったところではあるまいか。即興は彼の技法の命であって、
放胆に自在に、平凡な言葉も陳腐な語法も平気で馳駆した。²⁵

以上の引用から、小林が西行の歌における素直さを高く評価している点は明らかである。
即ち、即興という技法が彼の歌の「命」であり、「言葉を曖昧に」表現したり、屈折した
表現を用いたりせず、「放胆に自在に、平凡な言葉も陳腐な語法も平気で馳駆し」て歌
う点に西行の歌の特徴を見ている。小林秀雄のこの観点からは、「幽玄の歌論」や表現の
装飾などに対する彼の拒絶が読み取れる。

これと同じく、堀田善衛も西行の平明さを多く論じている。

学や芸にたけ、ひねくれて、悲愁の事に直接しても、己が慟哭の声をまさしく発する
ことができない人がある。技芸と称して悲しみをすら飾りはじめると、もはや道は決
定的な墮落へとゆくのである。しかも文芸の事に於いては、往々にして墮落は自他共
に知らずしていつている事があり、飾り飾っての空中楼阁は、つひに救ひやうのない
醜へと転ずる。新古今集中第一の歌人としてある西行の詠歌が、あの爛熟の時に凝り
つくされ肉声を失ひかけた声声の中でどうのやうな役割をもっていたかは、明らかで
あらう。²⁶

堀田善衛は装飾の「技芸」が「墮落」の始まりであり、「飾り飾っての空中楼阁は、つひに
救ひやうのない醜へと転ずる」とまで批判して、西行の歌の平明で「肉声」があり、「信」
のある点²⁷を高く評価する。堀田が、文芸における表現の「ひねくれ」や「技芸と称」す

²⁵ 前掲、小林秀雄「西行」、一七四頁。

²⁶ 前掲、堀田善衛「西行」、三六四頁。

²⁷ 堀田善衛は次のように西行の歌の平明さと信のある調べを評価している。「彼の歌の平
明さ（中略）は、かうした自問自答の形に多くよった独白に由来する。俊成は桐火桶を抱
いて凝然、歌を道とした、西行は己が天性の心に押されつつ、「遁世の身とならば一すぢに
仏道修業の外不可他事」にもかかわらず、文字通りここかしこにうそぶきありかねばなら
なかつた。さうした独白が、はっきり歌として成り立ち得るために最も必要なことは、歌

る悲しみなどの感情の「飾り」を「自堕落」だと見做し、非常に批判的に捉えていることもこの引用から窺える。

堀田善衛の「西行」は小林秀雄の歴史観と古典論から影響を受けている。だが、西行の歌を分析する仕方から分かるように、小林は戦争と関わりなく論じるが、堀田は西行を「乱世に於ける詩人といふ一運命の生き方をひらいた」²⁸人として捉え、西行の生き方を論じつつ、自分の生き方を語る。したがって、歌だけに注目する小林より、堀田は西行の「切情」という点や「半僧半俗」という生き方にも強い興味を示していると言える。しかし、このように西行にアプローチする方法が異なっても、これまで分析してきたように、堀田善衛の「西行」に表れている西行像は、小林秀雄の論じた西行像と非常に近似しており、決断力があり信念をもった史上人物でありながら、素直に歌う「詩人」である。では、なぜ二人は西行のこのような特徴に注目するのだろうか。この点については、歴史観の共有が考えられる他に、当時「大東亜共栄圏」という思想を背景として行われていた文芸活動とも深く関わっていると考えられる。

第六節 河上徹太郎の文学復興活動との接点

先述のように、小林秀雄と堀田善衛はそれぞれ一九四二年と一九四三年に「西行」を書いたが、二人の西行像は驚くほど似通っていることは明らかである。二人が共通して、西行を決断力のある信念を持った人間として評価した背景には、死がいつ訪れるか分からない戦争という日常において死への恐怖から抜け出すため、歴史を一つの武器として利用したという側面が考えられる。しかし、小林と堀田が、歌における言葉の曖昧さや表現の装飾を批判し、西行の歌を平明で素直な点において高く評価するのは、当時河上徹太郎が提唱していた文学復興活動と深い関係があるだろう。以下、堀田の「西行」に見られる文学批評と河上徹太郎の文学復興活動とを結びつけながら考えてみたい。

堀田は西行の歌を論じることと同時に、西行の生きた時代を近代と結びつけながら文学

の注釈者がよく云ふところの「調べによって生きる」といふやうなことではなくて、己の生に即いての信が第一なのである。」(前掲、堀田善衛「西行」、三四五頁)。

²⁸前掲、堀田善衛「西行」、三四三頁。

批評を行っている。「西行」の最後の一節「崇徳院」において、堀田は歌の平明さについて論じるとき、以下のように自分の観点を書く。

由来、表現せんとする意識があまりに強く意識され過ぎては、遂に表現は、その意識そのものの表現で一杯になってしまひ自然を喪ふことが多く、その結果、文学の文学が生じて、ひいては文学そのものが喪失の危機に瀕するといふことは、ないではないのである。この頃からそろそろと京都中央文壇はこのあやふさの中にあつたのだ。後の新古今文壇に於いて、この精神の危機を孕らみつつも、これを大きく救ひ一つの大記念塔とまで化成されたのは、後鳥羽院に他ならないのである。私は幽玄といふことをめぐっての近頃の論議を詳細に知ってはいないが、幽玄とは単なる美学論ではなく、精神の危機だと思っている。²⁹

西行時代の京都中央文壇の文学は、表現が意識され過ぎて、「自然を喪ふことが多」と堀田は批判し、「文学そのものが喪失の危機に瀕する」可能性を指摘する。最後に、「幽玄」とは、「精神の危機」を象徴していると彼は独自の文学・美学批評を示している。このように幽玄に対する批判と、前記した西行の素直さ、平明さへの称賛と対照すると、当時の堀田の文学観が浮かび上がってくる。

堀田にとって、喪失しやすい文学に対する、歴史に生き残る傑作とは、美学と民族精神を持つものである。例えば「源語はその美学と共に民族精神の深淵に根差し、それらの発現を集大成した一大傑作なのである。」³⁰と書き、源氏物語の偉大さはその美学と「民族精神」に深く根差していることによると論じている。

興味深いことに、一九四四年一月号の『批評』に掲載した河上徹太郎の「大正時代以後の日本文学」での文学の復興についての観点と上記の堀田の観点とは相似している。河上は、この文章を通して、明治から現代までの文学を系統的に語り、文学の復興について次のように唱えている。

要するに当時は今や漸く日本が文明開化運動以来取り入れて来た技術的な能力の一

²⁹前掲、堀田善衛「西行」、三六八頁。

³⁰前掲、堀田善衛「西行」、三六五頁。

応の総決算と反省の期が来たことを示し、ここに日本が文化全般に亘って世界の一流国としての自覚と反省が現れていて、西欧文明の行き詰まりの気配がそこに濃厚に反映すればする程、之を超克し得るものとして、わが文化の自主性と、東洋精神の再建とか、問題になって来るのである。そして此の課題に向って文学が、持前の誠実さと直覚力を以て、しかもこれを理論の形でなく、全人性といふ具体的な人間像のうちに個人で、文化全体の先頭に立たうとする気概が生まれて来たのである。³¹

今や「文化全般に亘って世界の一流国」となった日本に相応しい文学について、河上は「西欧文明の行き詰まり」を超克し得るためには、日本の文化の「自主性」と「東洋精神」を再建しなければならないと語っている。彼は、その対策として、「持前の誠実さと直覚力を以て」、「理論の形ではな」い文学を提唱するのである。さらに、同文で彼は次のように付け加えている。

(前略) ここに一般的にいつて、文学といふものは本来純芸術的良心に返る時、それは民族精神の発見に必ず落ち着くといふ原理が認められるのである。

従って此の民族精神の発見といふことは、偏狭な国粹主義者の陥る、独善的な観念論を指すものではない。文学精神の謙讓な素朴さと誠実さのうちに感得出来る。日本人の知性の優秀、感性の繊細、意思の強靱を、能ふる限りの文学表現力のうちに捕へんとするものである。³²

河上徹太郎の文学復興論において、真なる芸術は「民族精神」のあるものであり、日本人の「知性の優秀、感性の繊細、意思の強靱」を表現する文学であるとされる。しかも、そのような文学は素朴で誠実であると唱えている。言うまでもなく、河上の文学復興論はナショナリズムという見地から、大日本帝国文学の精神及びその表現について説明していると言えるだろう。すなわち、「日本文学」は日本人の優れている知性、繊細な感性、及び強靱な意志を描くもので、誠実さや素朴さによって民族精神を表すことが重要であると主張しているのである。

³¹ 河上徹太郎「大正時代以後の日本文学」(『批評』、一九四四・十一月、八三頁)。

³² 前掲、「大正時代以後の日本文学」、八三頁。

周知のように、河上徹太郎は小林秀雄と親密な関係であった。そして、堀田は国際文化振興会の仕事の上でも、『批評』の同人という個人の文学活動の上でも、河上徹太郎や小林秀雄と付き合いがある。山本健吉の回想によれば、応召に行く堀田の送別の宴には、河上徹太郎と芳賀檀が「やってきた」³³とある。また、堀田自身も「十八年の初めごろに河上は戦後の日本文化のあり方というものについて、われわれはいまから考えねばいかんと言ったことを、ぼくは覚えています」³⁴と語っていた。山本健吉と堀田自身の言説から、河上徹太郎と堀田が親密な交友関係にあったことが窺える。また、堀田が『批評』に入った頃から河上の教示を受けていたことも垣間見られる。このような背景において、河上徹太郎の文学復興論に影響を受け、あるいは相互に影響を与え合いながら、小林秀雄と堀田善衛は西行を決断力のある信念を持った人間として描きだし、素直で平明な歌を詠む歌人として捉える。その芸術的側面に関しては、日本文芸復興論の拠り所として西行を挙げたという意図が推測できる。

以上、本章では同人誌『批評』を中心にした堀田の文学創作、とりわけ「西行」の分析を通して、彼の戦時中の歴史認識と文学観を分析した。「未来について」、「何処へ? — 立原道造論」、「覚書」からは、戦争や死に直面して茫然とし、恐怖を見出しながらも、文学者として生きる堀田の強い意志が感じられる。換言すると、戦争を正当化するという最終的な目的より、むしろ戦時中の堀田は自己存在に対する混迷から、文学者としての自己確立へという変化を辿ったと言えよう。文学者として如何に生きていくのかという点が、戦時中の堀田が最も関心を持った問題だと考えられる。

仏文科出身の堀田であるが、元来古典に興味があったことは、彼の対談やエッセイ中からも十分にうかがえる。だが、「西行」の最初の部分、即ち「伝説(一) — 西行・序」を寄稿した『批評』の一九四三年十二月号の「後記」で、小説を救う道は古典を回復するほかないとする山本健吉の古典提唱説が同時に載せられていることから、堀田の「西行」には「国学」を提唱した『批評』グループの影響をも無視できない。

堀田善衛の「西行」は、小林秀雄の「西行」あるいは歴史観を踏襲したものであり、堀

³³ 山本健吉「堀田善衛論」(『三田文学』、一九五二・五、十五頁)。

³⁴ (座談会)「戦後文学の国際的背景—堀田善衛を囲んで—」(『文学的立場』、一九六六・一一、一二、八五頁)。

田の歴史や自然に対する認識には、明らかに小林秀雄の影響が見られる。堀田善衛の「西行」と小林秀雄の「西行」を比較してみると、両作品の西行像が驚くほど類似していることが分かる。すなわち、二人とも西行を、決断力のあることや信念を持っている人物として描き、彼の歌の素直さに着目して、その人間性と歌を高く評価していることが明らかである。

さらに、本章では堀田の「西行」の最終部分——「崇徳院」が掲載された『批評』一九四四年十一月号に同時に掲載された、同じく『批評』の同人である河上徹太郎の「大正時代以降の日本文学」と堀田の文学観の関係について分析した。帝国下での日本文学の復興を提唱した河上の観点は、小林秀雄や堀田善衛の示した文学観との類似点が明らかである。すなわち、日本が目指すべき文学は、日本人の知性、感性与強靱な意志を描くことと、素直さや誠実さを持つこと及び、民族精神があるという主張である。

本章の第二節に既に論じたが、堀田は戦争と戦死を正当化しておらず、この点において、『文学界』で「大東亜戦争」を賛美した河上徹太郎と根本的に違うと考えられる。「西行」に見出した、「厭世的」な側面ではない「毅然とした態度」、また、運命にふりまわされない「孤独な魂」が、堀田の求めようとした「自己確立」の在り方であり、乱世に生き延びる姿勢であるが、現実生活で行う古典の提唱や史上人物を典型化する活動は、山本健吉や小林秀雄の影響或いは相互的な影響によるものであり、また河上徹太郎の文芸復興活動とも関わることで、間接的に帝国日本の立場に立って文学活動をしたと言えよう。

しかし、一九四五年三月二五日から一九四七年一月までの「上海体験」が堀田の文学観を変化させ、戦後の民主作家としての萌芽を育んだと考えられる。次章はその「上海体験」について具体的に考察してみたい。

表一（『批評』一九四三～四四）

創作年	作品名	巻数
一九四三年	今宵何を語らう 祈り	一九四三年七月号
	挽歌 明るく歌のように	一九四三年八月号
	何処へ？——立原道造論	一九四三年五月
	覚書	一九四三年九月
	ハイリゲンジュタットの遺書	一九四三年一〇月
	『批評と信仰』に就いて	一九四三年十一月
	西行	一九四三年十二月～一九四四年一月
一九四四年	高原	一九四四年二月
	水のほとり	一九四四年四月

（表一：『堀田善衛全集』（筑摩書房、一九七三～七五）に基づいて整理したものである）

第二章 堀田善衛と「上海体験」

—「身分転換」¹でめざめた日中関係への思考—

第一節 本章の問題意識と方法

堀田善衛は、「一九四五年三月二十四日から、一九四六年十二月二十八日まで、一年九ヶ月ほどの上海での生活は、私の、特に戦後の生き方そのものに決定的なものをもたらした」²と、「上海での生活」を自らの人生の転換点として位置付けている。他方、本多秋五は「上海における敗戦体験が、堀田善衛の文学を決定した」³といい、「敗戦体験」が堀田文学の原動力だとも評価している。堀田本人を含めた以上の両氏は、「上海体験」が堀田の人生と文学に決定的なものをもたらしたと明言しているが、その「決定的なもの」の正体について言及しなかった。序で列挙したが、「上海体験」を論及した研究論文は全体的にその役割を分析したものである。つまり、研究者らは堀田が具体的に上海で何を体験したか、その体験が具体的にどのような影響をもたらしたかについては論じるに至っていない。

近年に出た研究成果を探ってみると、二〇〇八年十一月、上海時代の見聞や心情を記録した堀田の『上海日記 滬上天下一九四五』（以下、『上海日記』）が出版された。編集を担当した紅野謙介の解題や、林京子の特別寄稿及び郭偉の書評は、上海時代の堀田の軌跡を辿って、読者に当時の歴史背景や社会の実態を呈示したが、この「上海体験」に導かれて、堀田が如何に戦後作家へと成長したかについての分析はまだ行われていない。

堀田の「上海体験」は、言わば、一つの「身分転換」と言える。国際文化振興会からの派遣者という立場から、国民党中央宣伝部の役員という立場に至るまでの身分の転換につれて変化し続けた彼の認識こそが、戦後の堀田文学を形成する「決定的なもの」ではなかったかと筆者は考えている。本稿では、『上海日記』や対談、エッセイなど本人の残した叙

¹ 本論では、堀田が国際文化振興会という組織の一員として上海へ渡り、「敗戦」によって役職のない日本人となり、さらに中国国民党宣伝部という組織のメンバーになるという身分上の転換を主に辿りながら、その身分上の変化による認識の変化に焦点を当てる。そのため、あえて「身分転換」という言葉を使用する。

² 堀田善衛「上海にて」（筑摩書房、一九五九・七、引用は『堀田善衛全集』第十二巻、筑摩書房、一九七四、三頁に拠る）。

³ 本多秋五「国際関係に眼を開く堀田善衛」（『週刊読書人』一九六二・三・一九、引用は『本多秋五全集』第七巻、葦柿堂、一九九五・八、五二六頁に拠る）。

述と、他の関係者の証言、公式文書など、堀田以外の人物の記録に基づき、堀田の「上海体験」を歴史背景と共に分析し、それに伴う「身分転換」について考察を行いながら、その体験が彼の認識の変化にどのような影響を及ぼしたのかを分析したい。

第二節 状況と認識のズレ

一九三九年慶応義塾大学に入学した堀田は翌年に仏文科へ転科、大学在学中は主にフランス文学をはじめ西洋文学を耽読し、『荒地』『山の樹』『詩集』などの詩人グループと親しんで詩の創作を始めた。一九四二年九月、彼は戦時下の特例措置によって、半年繰り上げて卒業し、海軍部に属している国際文化振興会に勤務し、欧州からの軍事情報の翻訳などの仕事に従事する傍ら、伊集院清三の紹介で山本健吉や吉田健一が創刊した雑誌『批評』の同人、後編集者となり、詩や評論に力を注いだ。

一九四四年一月、召集を受けて東部第四十八部隊に入隊したが、骨折や肺炎で三カ月間の入院生活をしたあげく、ついに除隊、同年五月頃に再び国際文化振興会や『批評』に戻るようになる。当時の仕事の内容や文学活動から見れば、堀田の関心はもっぱら欧米にあり、中国や中国文学からは遠い場所にいた人間であるように見受けられる。ところが、一九四五年三月二十四日、彼は「上海客死」⁴という覚悟をもって国際文化振興会の派遣員として上海へ赴いた。その名目とは、「東京で日本語の「中国文化」っていう雑誌を出して、上海で中国語の「日本文化」っていう雑誌を出す」⁵というものである。

この雑誌を交換するプログラムは、軍事勢力が一九四三年以降「大東亜」に集中したという戦局の変動に合わせて、国際文化振興会によって文化宣撫活動を東アジアに移動する方針で計画されたものである。その経緯については、芝崎氏が詳しく説明している。

⁴『上海日記』の解題で、紅野謙介は次のように書いている。「上海行きはヨーロッパに行くためのステップだったと堀田はのちに記している。もはや敗戦は明かであり、日記にもあるように「上海客死」を覚悟で日本を飛び出したのであろう。ヨーロッパへ直行するコースは存在せず、上海を経由して何らかの機会を待とうとしたのだが、同時に中国をひと目だけでも見ようという強い意志があったと考えられる。(堀田善衛『上海日記 滬上天下一九四五』、集英社、二〇〇八、三四二頁)。

⁵ 武田泰淳、堀田善衛『対話 私はもう中国を語らない』(朝日新聞社、一九七三・三、四六頁)。

一九三八年以降発行されてきた『国際文化』は、昭和一六年度には六〇〇〇部、一七年度以降は四〇〇〇部と、部数制限を受けながら発行を続けてきたが、ついに四四年六月の第三一号で終刊した。同誌には、海外版を発行する計画があった。それは「大東亜共栄圏各地地域に於いて邦人による新文化建設並文化指導の参考に資するため月刊雑誌を編集発行致し度し」というような内容が予定されていたが、これは実現しなかった。結局この構想のかわりに、「中国路線」の一環として計画されていた「日華文化交換論文集」刊行構想が浮上した。そして、『国際文化』の終刊と共にその交換論文集が発展したかたちでの雑誌が創刊される計画が進められていたのである。この「日華文化交換論文集」は、国際文化振興会と国民政府宣伝部とのあいだで協議がおこなわれ、「文化に関する季刊論文集を夫々両国に於いて編纂し交換発行する」ことで合意を見た。⁶

一九四四年六月から、国際文化振興会は雑誌の海外版を発行する計画があったが、頓挫してしまい、その代わりとして、「国民政府」と協議を結んで「日華文化交換論文集」を創刊するに至った。このプログラムは、一見、日本と中国が平等な地平に立って文化交流を行うことを目的としているように見える。しかし、注目したいのは、文中の「国民政府」が帝国日本の後ろ盾によって成立した傀儡政権「汪兆銘政府」だということである。中国人に是認されなかった「汪政府」と締結した文化交流協議自体は、空疎なものにほかならない。この意味で、国際文化振興会と「国民政府」の協同の下作られた「日華文化交換論文集」は、実際は帝国日本の威光の下で遂行された文化活動であったと言えよう。このプログラムに取り組む堀田は、「植民地」における日本の文化の宣揚者に充てられ、いわば「外地」における日本の「文化役員」であった。

だが、当時の堀田はこのプログラムの背後にある歪んだ日中関係を看取することができなかった。日中関係に対する現状の認識を欠いていたことは、中国語を勉強する彼の態度からも窺える。彼は、一九四四年五月頃国際文化振興会に戻った直後に中国語の学習を始めた動機について、次のように回想する。

その頃国際文化振興会及び文学界周辺には一種の中国ブームがありましたが、河上徹

⁶ 芝崎厚土『近代日本と国際文化交流 国際文化振興会の創設と展開』（有信堂高文社、一九九九・八・五、一七六頁）。

太郎さん、山本健吉、それに私など、中国語を習うことが非常にはやりました。大東亜戦争の解決には日中問題の解決が不可欠である、というイデオロギーがそこにはあったと思います。河上さんなんかのサイドの大東亜文学者大会から来た線だと思いません。⁷

周りの「中国ブーム」という雰囲気に乗っかって「大東亜戦争」の解決に向かうために、中国語を習って中国に近づこうとする堀田であるが、その姿勢からは、日本の「文化役員」としてのイデオロギーが見られ、同時に、日中戦争という状況に置かれる自分の位置に対する彼の無自覚さも窺える。

現状の認識を欠く若い堀田は、素朴なイデオロギーに促され、上海に渡航した。開高健との対談において、彼は上海に着いた当初のことを次のように述べた。その中で最も注目したいのは、彼が上海の日本人の生活を見て怒りだしたことである。

ぼくはね、講演タレントになっちゃった。日本は空襲で大変だけど上海はのうのうとしているわけだからね。酒はいくらでもあるし、ビールだって何だって、タバコだってイギリスのスリーキャッスルなんかやたらにあるしね。で、最初はぼくは怒ったらしいんだ。格差があんまりひどいからね、天国と地獄どころじゃないからね。それで武田君（泰淳——筆者注）はぼくを連れて日本ビールへ行って、日本の状況についてぼくに講演さすんだ。そこでビール三ダースほど御礼に貰ってきて、それがなくなると、今度は武田がぼくをどこかの保険会社へ講演に連れていくんだね。⁸

上海の土地を踏んだ堀田は、食糧さえ欠乏している「内地」より、上海にいる日本人の生活が思いの外豊かであることに憤慨したという。この憤りとは、同じ日本の国民であるものの、「内地」と「外地」の生活には雲泥の差がある不公平さに注目して発せられたものである。逆の視点から見れば、彼は当然のように上海を日本の「外地」として捉えているのであり、「内地」と「外地」の生活の間のひどい「格差」を生み出した背景や、被植民地の中国人の民衆の生活にまでは目が届かなかったと考えられる。

文化交流活動の裏に隠された国際状況、及びその活動に取り組む文化役員としての自己

⁷ 大岡玲『文芸誌「海」精選対談集』（中央公論新社、二〇〇六、二〇六頁）。

⁸ 前掲、『文芸誌「海」精選対談集』（中央公論社 二一一頁）。

の位置に対して、堀田が認識できていなかったことは明らかである。この認識上の無自覚は、上海における実体験によって一掃された。殊に日本の「敗戦」が彼に大きな衝撃を与えた。

第三節 「敗戦」による認識の獲得

一九四五年八月十一日、朝の通勤電車の中で、堀田は中国新聞協会の赤間という男から日本の「降伏」を知り、その後、「中華日報」に勤める中国人・路易士⁹からその事実を確認した¹⁰。「和平です、和平です、戦争済みました」という路易士の歓声を聞いたその時の様子を、彼は日記において記している。

なみいる日本人の僕らはみな暗い表情になった、と同時に何とも云へぬ苦しいものがこみ上げて来、眼のやり場に困った。武田氏は眼を大きくまわくして、号外を読み込んでいた。私も読んだ。¹¹

驚愕と心の苦痛が表されている文章である。丸山眞男はポツダム宣言の受諾、それを知らされた時の国民の感情が、「公的」なイデオロギーと「私的」なエゴイズムとの分裂だったと表現したが、これは「外地」にいた堀田らには当てはまらないと思われる。堀田らの胸にこみ上げてきた「苦しいもの」とは、日本の「敗戦」とともに受けた衝撃と、中国人ではあるものの仲間であった路易士が日本側の「敗戦」により態度を変えたという、二重の衝撃への反応だと考えられる。つまり、「外地」にいる堀田らは、「公的」にも、「私的」にも一致して、共に日本の「敗戦」によってもたらされた国家の失敗と人間関係の失敗に苦しんでいると窺える。

中国人の変化は、堀田が上海で見た日本の「敗戦」風景の一つである。彼は日記の中に、共同で「日中文化交流」活動に取り組んでいた中国人の態度の変化に注意を払っていた。

⁹ 中国の詩人（1913～）。日本に留学し、堀口大学らの影響を受ける。当時上海の親日メディアである『中華日報』に勤めていた。（紅野謙介編 堀田善衛『上海日記 滬上天下一九四五』、集英社、二〇〇八、一七頁を参照した）。

¹⁰ 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、一八頁）。

¹¹ 前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（一八頁）。

諸がまたまたそはそはとどうしたらよいかわからない、と云ったあげくに「林さんたちはどうしますか」と云った。これで分かった。どうしたらよいかわからないと云ふのは、こちらのひがみではなく、お前たち日本人はどうしたらよいか分らないだろう、と云ふことなのだった。¹²

林俊夫の家を訪れて、終戦後の行方について相談する中国人の諸綬綺の言動を見て、堀田はその時に感じたことを正直に記録している。彼から見れば、戦時中は日本人の側に立っていた諸は、日本の「敗戦」によって、既に日本人を嘲笑する側に移行してしまった。このような体制の変化による中国人の心変わりに対して、堀田は一種の憤りを示していた。それと同時に、彼は中国人の心の移り変わりを「日策」の推進方策と結び付け、その最終的な原因は軍の統制にあると考えていた。

軍部の力による支配の先棒をかついでいた文化人から見れば、日本の政策の挫折を象徴する「敗戦」を招いた最大の原因とは軍部の失策である。堀田の日記には、「敗戦」の情報が耳に入った当日の林俊夫の言葉が収められている。

林氏、室伏女士と三人で虹口の方へ向ひ、四川路の憲兵隊の前まで来た時、林氏は思ひ屈したやうに、青白い顔を皺で刻んで遂に云った。「これが日本の対支政策の末路だ、己は帰って本を書く、『遠来の暴徒』といふ言葉、また『強盗の末路』といふ言葉を発せしめたものは何か、といふことは、どうしても今度といふ今度は書かねばならぬ」

……

林さんのこれが対支政策の真相だ、と云ふ言葉が耳にのこった。¹³

「暴徒」、「強盗」などの言葉には、「日策」の失敗をもたらした軍部の非人道的な振る舞いに対する文化人の批判が見られる。この林の発言の「対支政策の真相」という部分を受け止め、「耳にのこった」堀田は、林と共通する考えを持っていたと考えられる。堀田によれば、彼が上海に到着して「十日もたたないうちに」、現地で「強制され」る「変態的な」実

¹²前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（二〇頁）。

¹³前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社 二一頁）。

態に「絶望に近い憂鬱に襲われてしまった」¹⁴。日本の軍部と中国人の間に挟まれた文化役員の苦悩を、彼は後に正直に吐露している。

しかし、何故にかくも長期間前述のやうな出鱈目が行はれていたものであろうか。これについても、今日はっきり簡明に答へることが出来る。矢張り、日本のやり方が常に政策、国策の一点張りでその間に人間性に対する反省を欠いていたからである。これとても、私共にとっては以前から分っていたことなのだ。しかし我々の微力を以てしては如何にしても覆へすことが出来なかったことを、私は告白する。¹⁵

人間性を欠いた軍の政策に反感を持ちながら、軍に管制される状況に反抗できない「外地」の文化役員の姿が垣間見られる。もし前記の林の発言が直接に軍へ向って爆発した文化役員の怒りというなら、堀田の発言は文化役員が怒りを露わにする理由と背景を表したものだと考えられる。良識ある知識人として、軍部の人間の非道な振る舞いを目撃し、日本の政策を推進するやり方に憤りを感じていたが、一方で、軍の統制の下に置かれた文化役員としては、軍の乱暴に対して無力を実感してもいた。「敗戦」以前から文化人の心の中に潜んでいた軍の統制への反感、嫌悪が、この「敗戦」によって誘発され一気に爆発したと考えられる。林の批判はもちろんであるが、「敗戦」によって軍の統制力が弱まった際に、文化交流活動に従事する人間としての真情を中国人に伝えようと考えて、「告中国文化人書」を配布しようと思いついた堀田の行動も、軍部に反発する行為と捉えられる。

また、「敗戦」を知った当日に、武田泰淳に文学者として自分の使命を告げた堀田は、この軍への批判意識に基づいて語ったと考えられる。

今日この時の中国人のうつりかはりといふものを、人の心の内面の問題として、単に政策的なことではなくて、何とかして政治論ではなく人の心にしみ入るやうな工合にして内地の人に知らせねばならぬ、それをやるのは、僕ら文学に携る仕事をする人で上海にいるものの大切な仕事だ。¹⁶

¹⁴ 堀田善衛「反省と希望」（上海『改造評論』一九四六・六、引用は前掲『上海日記 滬上天下一九四五』、集英社、二〇〇八、三五二頁に拠る）。

¹⁵ 前掲、「反省と希望」（一九四六・六、三五三頁）。

¹⁶ 前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、二三～二四頁）。

この頃、堀田は「中国人のうつりかはり」を、「心の内面の問題として」、「政治論」と異なる形にして、「内地の人に知らせねばならぬ」と主張していた。彼の主張では、二つの点に注目する必要がある。一つは、「政治論」や「政策」より、彼はむしろ「人の心」、「内面の問題」に焦点を当てていることである。二点目は、「外地」のことを「内地」に知らせる使命感とも言えるものが彼にあったということである。堀田が前者に焦点を絞る理由として考えられるのは、専ら政策で動いた軍部の統制が、民心を把握できない空疎な強権に過ぎなかったということを堀田が認識し、それを逆に日本の失敗を招いた所以だと批判したからであろう。後者の「中国人のうつりかはり」を「内地」の人々に知らせるのは、「日策」の失敗から検証したことを「内地」の人間に伝えなければならないという「外地」の文学者の使命を感じたからと考えられる。

以上のことから、「外地」にいる軍部と文化界との分裂は明らかである。「敗戦」は、文化人の批判をより激しく誘発した。文化役員の側に立って、軍部のやり方は人間性が欠如していると批判する堀田は、言うまでもなく、当時の日本の「中日親善」という標語が幻像でしかないことを看破した。言い換えると、彼の軍への批判は「大東亜共栄圏」というスローガンに隠された惨めな事実を了解した上で発せられたものである。これが上海での実生活を通じて堀田が獲得した新たな認識とも言えよう。「日中文化交流」というプロジェクトに投身した青年堀田は、「大東亜共栄圏」という理想を抱えて上海へ赴いたはずであるが、上海での経験は彼に「対支の真相」を認識させ、それを改善することのできない無力感を味わったのである。

この状況と対面した彼は、「我々文学に携はるもの」が、「精神的に実に多くの無理をして、盲目の戦車の如くに破局に向ってまっしぐらに驀進する日本の後を遅れ遅れてついてゆかざるをえなかった」¹⁷と言い、文化役員としてやむを得ず国家の膨脹に加担したと、自己の位置に対して自覚するようになった。その自己認識は、勿論、社会現状を認識した上で獲得したものである。上海での実体験や日本の「敗戦」は、彼のイデオロギーに強い打撃を加えると同時に、日中情勢や自己の立場に対する一つの認識を与えたのである。だが、この頃の彼は主に民心の移り変わりや「日策」の失敗を軍の推進に求めるなど、その過ちを追究するだけで、日中の葛藤における根本的な内因を見抜くに至らなかった。他方、上海の「占領軍」が勢力を喪失したことにより、堀田の身分は、「占領国」の文化役員の立場から一般的な日本国民に移った。しかも、すべての勢力を失った「敗戦国民」として、

¹⁷前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、三五四頁）。

被支配者であった中国人の統治の下に置かれる境遇に陥ったのである。

第四節 「敗戦」後の意識

「敗戦国民」としての堀田の意識の変化に触れる前に、彼の置かれた周辺環境を説明する必要がある。紅野謙介氏は『上海日記』の解題において、「敗戦後、上海在住者だけではなく、南京、また華南の各地にいた日本人が多く上海の虹口地区に強制的に集められた。巨大な捕虜収容所となったのである」¹⁸と解説しているが、当時の状況に関してはより精確に把握しておく必要があるように思われる。

当時、国民党政府は引揚げ船が不足したため、便宜を図り、上海の周辺地方の「日僑」¹⁹を上海に集中させた。そもそも一九四五年八月十日までに上海にいた「日僑」は約六万四千五百四人であったが、新たに約三万三千五百五十五人が入り、合計約「十万」²⁰人に昇った。この膨大な人数は数に限りある引揚げ船で日本に送還される前に、同年十月十三日まで、全て「集中区」に住むよう国民党政府に命じられた。

「集中区」とは、国民党政府がナチスの「集中營」²¹と意識的に区別して、「民主主義」の人道面をアピールして設置された空間である。全体を四つの区²²に分け、元来の日本人住宅区虹口を含め、上海の東北部に位置していた。国民党の第三方面軍に属する日僑管理

¹⁸ 前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、三四四頁）。

¹⁹ 中国では、日本軍と区別するため、一般の日本国民を「日僑」と呼ぶ。

²⁰ この統計データは日僑管理拠が保存していた資料によるものである。当時中国に残った日本人の人数統計に関しては、いくつかのデータがある。①陳祖恩《上海日僑社会生活史》によると、一九四五年八月十日、上海の日僑は六万四千五百四まで減少する。日本投降後、命令により蘇州、杭州から集まってきた日僑は二万九千九百五十七名で、十月八日までに上海に住んでいた日僑は九万四千四百六十一人に昇るはずであるという。②日僑管理拠が発行した機関誌『導報』では、上海のみで、八月十日以前に日本軍以外の日僑数は六万四千五百四人。日本が降伏後、命令により上海に集中した者三万三千三十五人、十月中に集中を完了した者二万三千五百八十一名だと記載している。

²¹ 日本語で言うところの「強制収容所」のことである。

²² 第一区：東—斐倫路河濱、西—北四川路、南—百老匯路、北—斐西路と北四川路河濱；第二区：東—楊樹浦、西—斐倫路、南—楊樹浦・百老匯、北—旧公共租界線；第三区：東—黎平路、西—楊樹浦河濱、南—楊樹浦路、北—旧公共租界線；第四区：東—加納路、西—齐家宅劉家宅曹家宅、南—高家宅陳巷蔡家宅、北—旭街（上海日僑管理处宣伝科《導報》第一期、改造日報社、一九四五・十二、二二頁）。

処がその管理機関²³で、用いられた管理制度は中国伝統の戸籍制度「保甲制度」である。保甲制度は「集中区」を一般的な「収容所」と区別をつけ、日本人の自治を求める重要な制度であると、日僑管理処の責任者である王光漢氏は第一次保甲訓練会議において²⁴強調した。その編成基準としては、「戸を以て単位となし十戸を一甲とし、十甲を一保とす」るものであり、小さい単位から戸→甲→保→区という順番である。各管理者は、「甲長は本甲内各戸長より公選せられたる一戸長を任に充つ。保長は本保内より公選せられる一甲長を任に充つ。区長は本区内各保長より公選せられたる一保長を任に充つ」というように、民衆の選挙によって選出される。

「日僑」を指定地域に集中的に住ませ、彼らに出入りする時間²⁵を十分に与える国民党政府側の目的は、二つある。一つは日僑の人身安全を守って、正常な生活を維持するためである。もう一つは、集中居住で、統一的に思想教育を行い、日本人を日本の軍国主義と決別させるためである。だが、「日僑」側からみれば、生命まで脅かされる危険がなくても、資産家財などは全て没収され、引揚げ時期も確定できない状況の中で、基本的な生活を維持するため、経済上の圧力に怯え、生活の困苦や精神的な不安に襲われていたであろうことは容易に想像できる。終戦後、生活費を稼ぐため設けられた屋台がいたって繁栄した「集中区」の光景は、「日僑」の不安を現すものだとも言える。

このような状況の中、「留用」は生活難に直面していた日僑にとって一つの好選択であった。「留用」とは、戦後に日本人が中国政府や企業に残って働くことに対する中国側の用語である。その手続きとしては、一九四五年九月二十四日に第三方面軍より発行された訓令によると、主に本人の申請、日僑管理処の推薦、仕事先の承認という三つの段階がある。

²³ 戸→甲→保→区→日本自治会（会長、副会長、書託長、秘書室、組訓組、宣導組、文書組、総務組、帰国処理部）→日僑管理処（処長、副処長、秘書室、組訓科、宣導科、総務科、指導員）（上海日僑管理処宣伝科《導報》第二期、改造日報社、一九四五・一二、二二頁）。

²⁴ 王光漢氏は主に「集中区」と「保甲制度」をめぐって発言する。「見識のない人は「集中区」というこの名称を、ナチスの「集中営」と誤解し、厳しい制限を受けると想像するかもしれないが、それは日僑が集中的に住むことによって、雑居の不便を免れることを理解できないからです。集中的に住むからこそ、予定した保甲制度を実施できません。保甲制度は良い制度で、その細則に従えば、この組織的な生活から日僑も様々な便利と保障を獲得できるのです。」（上海日僑管理処宣伝科《導報》第一期、改造日報社、一九四五・十一、二十四頁）。

²⁵ 午後八時以降から翌朝午前六時まで、出入りが制限される。

まず、その姓名、年齢、性別、本籍、現住所、電話番号、出身地、専門技能、詳歴、どのような仕事に就きたいかなどの事項を、普通の中国十行紙に毛筆で記入し、一式二連の同証明書を直接日僑管理拠にある日本籍の技術者登記所に申請登録し、審査の結果を待つ。その後、日本籍技術者として審査を経て合格したら、申請書に就職範囲を付け加えることができる。最後に、日僑管理拠による仕事の派遣通知が来てから、服務証を受け取って着任する²⁶。手続きとしては複雑とは言えないが、仕事の種類や定員が限られているため、「留用」されるのは容易なことではない。

ほかの「日僑」と同様に、堀田も終戦後に「集中区」に住んだ。彼の日記によれば²⁷、一九四五年十一月一日、その日から「日僑北第一区第四十保第七甲第八戸」という白腕章をつけて歩くことになった。第一区は最も大きな区²⁸であり、さらに南と北の二区に分けられる。堀田はその北区の祥徳路に住んでいた。また、「腕章」とは日僑の身分を示す標識物で、全部で赤、緑、白と三色に分けられ、赤が技術人員、即ち「留用人員」、緑が独身者で、白が家族を持っているということを表す²⁹。堀田が白「腕章」をつけていたのは、彼が従兄の市川定興氏と一緒に住んでいて、まだ留用とはなっていなかったからである。

この時期の心情を、彼は日記に詳細に書き示している。「敗戦」を知った日から日記を中断した堀田は、十月十三日に再開した日記において、次のように記している。

終戦大詔—中山氏帰滬—愚園路から新上海—新上海—祥徳路。双十節などいろんなことがあったものだ。だが、もう少々僕は、すべてがいやになるといふ例の精神気候が来ているので、大して何をする気にもならない。(後略)

先日来、昭和の精神といった評論を一篇書きたいと思っているのだが、そのための漱石の「こころ」がほしいが手に入らぬ。(後略)³⁰

虚無や無力な精神状態に陥っている堀田の姿が見えてくる。このような状態にいる彼が「昭和の精神」を書きたいというのは、おそらく「敗戦」の衝撃から一つの時代の精神を書き

²⁶ 前掲、『導報』第二期（一九四五・十二、二十六頁）。

²⁷ 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、六十八頁）。

²⁸ 住民の人数は二万九千六百六十三人で、保数は四十一、甲数は三百七十二、戸数は三千五百十一である。

²⁹ 上海日僑管理処保存用書類に拠るものである。

³⁰ 前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、三十二頁）。

留めたいと考えたからではないか。国家の発展と共に培われた堀田のイデオロギーが、国家の崩壊によって崩れかけたと考えられる。

このような精神状況の中、十月十六日の日記では、中国で「留用」するかどうかという心の揺れを記し、現実の問題に悩んでいる様子が窺える。

頃日の動揺の一つは、中国側の機関へ入って働いてみようかといふことと、何もしないでこのままぼんやり市川さんの居候になっていようかといふ二つである。しかし思へば民主主義の宣伝屋などにはどうしてもなれないのである³¹

「敗戦」で生じた精神的な虚無と生存条件を確保する生活の圧力は、当時の堀田に付きまとい並行していた問題である。これがいわゆる「敗戦国民」の困惑であろう。後者の保持のために堀田の「留用」への興味が上記の日記部分にわずかながらも示されていると同時に、「民主主義の宣伝屋」にも抵抗感が強く、留用への躊躇いが読み取れる。しかし、一九四五年十一月十二日に開かれた「文化座談会」³²によって、彼の逡巡は解消された。

前述したように、国民党政府が日本人を集中的に管理する目的の一つとは、統一的に思想教育を行い、日本人の「軍国主義」の観念を排除するためである。この目的を抱える国民党政府は、文化、宗教、教育、政経という四つの面から、いわゆる思想教育に力を注いだ³³。堀田が参加した「文化座談会」もこの思想教育の一環である。この座談会において、日僑管理処の責任者である王光漢が「革新文化運動」と題して挨拶のスピーチをし、「日有其新」「保旧如新」「整旧為新」「除旧佈新」という四点から文化運動の目的を説いた。その結びに、彼は日本の文化にも触れ、日本の文化人に革新の必要性を強調した。

日本の文化はいまや革新の時機に臨んでいる。須く先づ格子に閉じこめられた生活か

³¹前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、三十八頁）。

³² この座談会に参加したことを、彼は十一月十二日の日記に記している。（前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』集英社、二〇〇八、八十二頁）。

³³ 日僑学校教育：小学校132ヶ所、中学校1ヶ所を設置する。そのほか、同文書院や厚生医専、基督教青年会などを復活させる。日僑社会教育：『導報』と『新生少年』の日本語版と中国語版を創刊する。日僑図書館を96ヶ所と博物館を81ヶ所設置する。ただし、博物館の陳列物は以前からあるものと日僑から寄贈するものである。日僑精神教育：日僑文化座談会を週に一、二回開き、社会名流や専門家を迎え市民講座を作るなど。日僑補助教育：脚本を創作して劇団によって各区で上演する。また、ラジオや映画館などを通じて、民主主義の思想を普及する。（日僑管理処保管用資料による）。

ら解放されて、自身の活力を増し、不断に新に「革命」、「創造」、「承継」および「総合」につとめ、古来よりの文化の基礎に、時代の色を塗り、調子諧和、絢爛奪目の新作品をつくるべきである。また近代科学の発達によって国際間の距離が短縮せられ、各民族文化の特点も次第にそれにつれて合理的発展をなし、渾然一体たる世界性を具有する文化の主流を形成するに至るであらう。これまた革新的文化運動に従事する者の理會すべき点である。³⁴

「時代性」と「世界性」のある文学を創作するのが文学者としての使命だと王氏は説いている。この「時代性」と「世界性」はまさに戦後の堀田文学が備えていた特徴とも言えるが、その啓示をこの座談会から受けたとまでは言い難い。が、政治論ではなく、文化論の面から国際間の連携を説き論ずる王の発言に対して、堀田は素直に受け入れたということが、翌日彼の「三民主義」³⁵を読み始めたという行動から窺える。十一月十三日の日記では、彼は文化座談会に参加した後の行動や気持を書き留めている。

今日より「三民主義」を読みはじめる。民族主義の第一、二講を読むに結論はすべて「亡国滅種」の危機を高唱するにある。三民主義とは救国主義であるといふ冒頭の心がよく分る。

ともあれ頃日「中国と日本」といふ、かういふことに関する気持ちがしきりに動くのを感じる。Iは未だ情熱がわからない、と云ったが、それは文士としてのIの気持として分らぬではないが、ぼくには未だIのやうに人間のうるささといふ気持ちがさして大きな影をはなっていない。³⁶

自ら「三民主義」に触れるに至った堀田は、明らかに国民党政府の宣伝に動かされていたと考えられる。また、「三民主義」を「救国主義」として読み取ることから、彼は触れたことのない中国の革命綱領である「三民主義」に触れてみたいという姿勢が見られる。この姿勢は、文中でのI、すなわち武田泰淳との会話の中にも反映している。「中国と日本」に関心が動き出したと武田氏に告げる堀田は、心の内にあった「民主主義の宣伝屋」への抵

³⁴ 前掲、『導報』第二期（改造評論社 八頁）。

³⁵ 三民主義とは、孫文が一九〇六年に発表して、後に中国国民党の基本綱領として採用された革命理論である。民族主義、民権主義、民生主義から成り立っている。

³⁶ 前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、八二～八三頁）。

抗感が少しずつ消え去り、中国や中国の思想に対して興味や期待が湧いてきたようである。

さらに、十一月十四日となると、堀田は川喜多長政³⁷にも留用について相談をし、彼の中で「日本連絡員」となることへの希望が強くなっていく。

十二時半から門番。二時半のかはりめは中華映画の川喜多社長。川喜多社長と十二日の文化座談会の結果について話し、中日文化の交流のよい機会はいろいろあるといふ見透しをいろいろと話す。

(略)

だんだんいろんな人が帰るであらうが、ぼくはあまり帰りたくない。出来れば、若し中国文化服務社なるものが相当有力確実なものとなれば、その中の日本連絡員くらいにはなってもよいとさへ考え、希望し出した。³⁸

先日の「日本と中国」について関心を持ち出した堀田は、川喜多と相談した時点で、既に文化交流に努める決意をしている。そして、中国と日本を文化交流の面から考えようとする堀田の意識はここに至って一層明晰になったと考察できる。「日本連絡員」とは日本と中国の間に立つ仲介役である。この役職を希望する堀田は、再び両国文化の交流に投身する意識があったのではないか。この時の堀田にとって国民党への「留用」は、単に生計を立てるための手段だけではなく、むしろ日中の文化交流に努める契機として見ていたと考えられる。

このように、「民主主義屋」への拒否から「日本連絡員」への希望という堀田の意識の変化は明らかである。日中文化交流活動に再び携わろうとする堀田の意欲を掻き立てたのは、国民党政府の思想教育であろう。だが、戦時下の国際文化振興会の交流活動と異なり、今回はその反対側である中国の宣伝機関に入ることになる。イデオロギー色の強い中国の宣伝機関に立ち入ることで、中国の中心部から中国を知って日中文化交流を図ろうという意識があったと推測できる。したがって、「留用」を通じて中国人や中国文化と接近した堀田の意識は、もはや国際文化振興会の文化役員時代と異なり、帝国文化の宣揚ではなく、一人の文学者として、人間の内心を重んじて文化や文化交流を行う方向に傾いている。この

³⁷ 川喜多長政（一九〇三～一九八一）映画事業家。映画は国際相互理解に役立つとの信念で一九二八年に東和商事（東宝東和の前身）を設立。ヨーロッパの名作を多数輸入した。

³⁸ 前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、八四～八五頁）。

ような意識を持ち、「三民主義」を「救国論」として読んだ堀田は、中国に微かな期待や希望を抱いたのかもしれない。だが、「留用」中に、彼は国民党政府に対する希望や期待をすべて投げ捨てている。

第五節 「留用」での認識の変化

堀田は日記において、自身の留用の経緯に関する記録を残した。一九四五年十二月十三日に、対日文化工作委員会の日文雑誌『新生』の編集員を務めている須田禎一に『新生』の編集協力をするよう誘われた。その誘いには快諾し、翌日から『新生』の編集に取り組むことになった。出勤証明書を手に入れたのが十二月二十一日³⁹だとも記している。この順番から見ると、おそらく須田禎一との話し合いで、『新生』を編集する意向が決められてから、技術者登記所に登録したと考えられる。留用時代の仕事について、彼は対談や回想の中で繰り返し以下のように語っている。

私がその宣伝部でまず最初にやったことは「中央日報」という国民党機関紙の論説を日本語に訳すことでした。(略)

そのうち、上海中央廣播電台という放送局の日本向けの放送をやるようになった。つまり、アナウンサーです。中国の主な新聞にあらわれる対日世論のレジュメや、引き揚げ船に関する情報などをアナウンスするわけです。はじめに、日本向けのコール・サインとして、「上海ブルース」などの日本の流行歌を流して、一時間ぐらいやる。それと同時に、自分で原稿をつくって英語放送もやりました。⁴⁰

この回想では、留用期間の仕事が主に日本語の翻訳と、対日世論や引揚船についてアナウンスすることにあったと堀田は述べている。彼が雑誌『新生』の編集という名目で中央宣伝部に入ったことについて全く触れていない。実際に、彼が『新生』の編集者となったのは一九四五年十二月十四日である。アナウンスの仕事は一九四六年五月十七日から始まり

³⁹前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、一〇三～一〇四頁）を参照した。

⁴⁰堀田善衛『めぐりあいし人々』（集英社、一九九三、四三～四四頁）。

41、中央広播事業管理処に属する上海広播電台（中波長）で、月曜日から土曜日、毎日十六時三十分から十六時四十五分までニュースを放送した⁴²。『中央日報』の翻訳をし始めたのは一九四六年六月十八日⁴³であった。

中央宣伝部の留用時期の堀田の仕事を見ると、『新生』の編集や対日対策の翻訳、及び対日世論のアナウンスとは、いずれも国民党の政策や政治方針を伝えることである。「留用」を通じて、堀田は、身分上から見ると、一転して国民党の対日政策の対外宣伝者となった。

堀田は宣伝部の対日委員会という組織の一員となり、国民党内部の事情を外側の人より一層詳しく知ることができた。紅野謙介は「国民政府の日本人からの略奪と横流し、給与の遅配、疑心暗鬼と相互不信のなかで、堀田は中国への関心と嫌悪のアンビヴァレントな感情に揺れ動いている。その振幅のなかで堀田の中国への認識、国家や政治についての省察はより深められていったと言えるだろう。」⁴⁴と、『上海日記』の「解題」で指摘している。この指摘は妥当だと思う。国民党内部の腐敗と混乱、民衆の苦痛を目にした堀田は、国民党の政府に失望し、中国の現状に絶望した。一九四六年七月十四日の日記において、彼は国家、政府などに対する失望と不信を記している。

今日民光から出る際に、ふと、「国家なんてものに如何なるものをも要求できない」といふことを考へた。これは中宣の無能さにつくづく呆れている今日この頃のことであるから、その辺から来たことだらうとは思ふが、矢張りこれは本当のことだ。もう僕は如何なる「公式機関」なるものをも信じまい。個人以外のものは信じまい。己れ一個の仕事を己一個がなしとげることのほかには、ほかに何かを強制し、何かを要求したりすることはしないことにしなければならぬ。⁴⁵

「中宣の無能さにつくづく呆れて」、「国家なんてもの」に疑いを示している堀田は、さらに「公式機関」なるものを全て否定したと考えられる。この認識に至ったのは、無論、国民党宣伝部或いは国民党政府機関に失望したことが、一つの重要な理由であるが、それだけに限らないであろう。本章の第二節で分析したが、国際文化振興会に籍を置いていた時

⁴¹前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、一七〇頁）。

⁴² 上海档案馆資料Q49-3-3による。

⁴³前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、一七七頁）。

⁴⁴前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、三四六頁）。

⁴⁵前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、二〇二頁）。

代に、文化役員の側に立った堀田自身、軍部への批判が甚だしかったということと結びつけて考えると、日本の軍部という統制機関に対する失望と、国民党政府に対する不信が重なったからこそ、彼はすべての公式機関に不信を感じるようになり、個人の立場にたって生きようという覚悟が出来上がったと結論づけることは可能である。このような外在の状況と内在の意識によって、堀田は国家、組織といった枠から抜け出し、一個の人間として物事を考えようという認識を形成した。これは彼が「留用」の後に獲得した新たな認識とも言えよう。

一九四六年六月、中国の『改造日報』に掲載された「反省と希望」で、彼は「中日問題」について次のように述べている。

（前略）外交官も軍人も、中日問題を己れ一個の人生運命の問題として厳粛に考へ詰めて苦しみ抜くこともなく、常に機械的な「解決」ばかりをはからうとしたのではなかったらうか。捉へ難きこの現世に於て、老子風に云へば所謂「解決」がもたらすものは常に決して解決ではなく、解決された諸問題よりもっと大きな未解決の問題が「解決」される毎にむしろ増えてゆくのである。中日両国の「心と心」の問題はここ何十年間一度も解決されなかったと極言することも許されるであらう。ましてや武力解決などは何物でもない。「国際問題の解決」と人性の問題は、林語堂氏も『啼笑皆非』に於て強調している如く、今世紀最大の問題であらう。⁴⁶

上記の文章は堀田の「留用」期間に書かれたものである。この時点で、彼は、「中日問題」を、ただ「機械的な解決」をしてきた従来の日中交渉を厳しく批判し、「心と心」の問題の解決こそが日中関係に求められていると提示している。すなわち、「武力解決」即ち戦争をも徹底的に否定して「国際問題の解決」と「人性の問題」に関心を持つことになったのである。

この「心の問題」と、一九四五年八月十一日の日記に記している「人の心の内面の問題」とは、両方とも「内面の問題」を重視する点が似ているが、この言葉を語った立場が根本的に異なることは注目に値する。「敗戦」の時点で、「中国人のうつりかわり」を「内面の問題」として「内地」に知らせるといった言説は、軍部の政策では民心を把握できないと、

⁴⁶前掲、「反省と希望」（上海『改造評論』一九四六・六、引用は前掲『上海日記 滬上天下一九四五』、集英社、二〇〇八、一二三頁に拠る）。

帝国側に立つ文化役員の立場にありながら発せられた批判だからである。しかし、ここでの「己れ一個の個人運命」や「中日両国の「心と心」」などは、明らかに国家や組織の反対側に立つ人間として言ったものである。

このように、堀田が国家など公的な束縛から抜け出し、日中関係に対して、もはや政治やイデオロギーの立場からではなく、個人の立場から、各国民の運命に着目して、「心と心」の触れ合いが最も大切な問題だと唱えるようになったのである。強調したいのは、この時点で、彼は日中問題の解決方法であった「武力」、すなわち戦争を強く批判し、「人性の問題」を提唱していることである。

第六節 国際問題と人性の関連——林語堂『啼笑皆非』⁴⁷を参照して

前節に触れたように、堀田は国際問題の解決と「人性問題」と結びつけて、それが二十世紀の最大の問題と強調する。この観点は、彼によれば、林語堂が『啼笑皆非』の中で強調したものである。林語堂が堀田の愛読する中国作家の一人ということは、彼の日記や随想⁴⁸などで確認できる事実であるが、本節は林語堂の『啼笑皆非』を参考して、堀田のテクストにおける国際問題の解決と人性との関係を解明する。

堀田は「反省と希望」において、中国で施行した日本政策の失敗について次のように述べている。

恐らく日本の政策、国策と言はれて来たものの最も本質的な誤謬はそれが人性を無視して行はれて来たこと（中国国民性の研究の深淺などの問題では決してない）、即ち政策遂行の名の下には人性を無視することも亦許されると観念したところにあった

⁴⁷ 林語堂 中国福建省出身の作家・言語学者（一八九五～一九七六）。アメリカ、ドイツに留学し、英語学博士の学位を取得して、一九二三年に帰国した。その後、北京大学などで教えたが、後に退職して『人間世』などの雑誌に身を置いた。一九三五年以降、アメリカで英文の『吾国と吾民』『風声鶴唳』を発表し、フランスで『京華煙雲』などの長編小説を書いた。『啼笑皆非』は彼が一九四三年に書かれた随想で、“Between Tears and Laughter”という題目でアメリカに出版されたが、一九四四年に中国語に訳されたものである。

⁴⁸ たとえば、一九四六年一月九日の日記においては、堀田が林語堂の『北京好日』を読むと記し、一九四六年七月十一日の日記においては、知り合いと林語堂の話をするとも書いている。そのほか、一九四七年六月に発表した随想「上海で考えたこと」では、中国文学における漢奸像に触れる時に、林語堂の『京華煙雲』の女漢奸素雲を例として挙げる。

のではなからうか。この人間にとって根元的な軌道を一度はづれたが最後、政治は自働的に破局に向ふ運命を持つ。⁴⁹

政策が失敗した根本的な理由は人性の無視だと、堀田は断言する。注目したいのは、「人性」という言葉である。『漢字源』によると、人性とは、人間がうまれつき持っている本来の性質のことを指す。堀田は人性を重視することが人間にとって根元的な軌道だと考え、ゆえにこの軌道から外れた政治は破局を迎えたという。なぜ人性を無視した政治がダメになるかということを理解するため、林語堂の観点を参照する必要がある。

『啼笑皆非』において、林語堂は「世界を治めようとするなら、外部の強さによってく治める」のではなく、結局的に人心を是正することである。天下大乱が人の心術に根源するという道理は、正に今日にも適当である⁵⁰と示す。その後、彼は中国の古典『楽記』を引用して上記の観点を説明する。

人間の本性は、常に平静である。外部の世界に刺激された時に、欲望を持ち始める。心が物質世界の衝撃を意識する時に、好き嫌いを持ち始める。好き嫌いが外部の物質世界によって混乱させられ、適当に統御されない時に、人間は真の自我を失い、本然の道理は破壊される。絶えず物質に左右され、好き嫌いの念を制御できない時に、人間は物質的現実に圧倒され、非人間的、或いは物質化になる。非人間的、或いは物質化されたものとは、本然の道理を破壊し、人間の欲望に溺れるものである。これから反乱や虚偽、淫乱や紛争が起り、ゆえに強者が弱者を威圧し、多数が少数を迫害し、智者が愚者を詐欺し、勇者が臆病者を苦しめるし、病者が養われず、老幼孤独者の居場所がなくなる。これが大乱となる道だ。⁵¹

⁴⁹前掲、「反省と希望」（上海『改造評論』一九四六・六）、引用は前掲『上海日記 滬上天下一九四五』（集英社、二〇〇八、一二三頁）に拠る。

⁵⁰原文は以下である“欲求世治，最后還是正人心，非外物所可強使之‘治’。这种天下大乱追源于人的心術的道理，犹适用于今日。”（林語堂：《啼笑皆非》，開明書店、一九四三、引用は群言出版社、二〇一〇・七に拠る）。

⁵¹原文は以下である。“人生而静，天之性也。感于物而动，性之欲也。物至知知，然后好恶形焉。好恶无節于内，知誘于外，不能反躬，天理滅矣。夫物之感人无穷，而人之好恶无節，則是物至而人化物也。人化物也者，滅天理，窮人欲者也。于是有悖逆詐偽之心，有淫佚作乱之事。是故強者脇弱，众者暴寡，知者詐愚，勇者苦怯，疾病不养，老幼孤独不得其

このように、林語堂は天下大乱を形成する道理を、人間の本性即ち人性に基づいて説明する。具体的に言うと、彼は人間の本性と外部の物質世界との相互関係から説いている。人間が物質世界にコントロールされ、自分の欲望に溺れる際に、人間は本性を失い、本然の道理が破壊される。これは乱世の元となるという。

注意しなければならないのは、林語堂が人間の本性の失う過程を「非人間的」或いは「物質化」と解釈している点である。彼は上記の引用の下に、次のように注釈をつけて強調する。「『人が物質化する』のが人道を失うことである、ゆえに“dehumanized”と訳する。或るものは物質化されるため、ゆえに“materialistic”と訳する。」⁵²この二つの言葉は彼の英語版の原文⁵³であるが、中国語に訳された際にその区別を具体的に説明する訳である。即ち、人間が物質と化する時には“dehumanized”といい、人間が物質に化される時には、“materialistic”と呼ぶ。この二つによって、人間が「人道」を失い、ゆえに世界が乱世となる。「人性本善」という儒教の核心的な思想に基づいて考えると、ここの「人道」は上記の「人間の本性」と対応して、人間らしさや人間性という意味をしている。

以上は政治（世治）と人性の関係についての林語堂のロジックである。林語堂の「人性」という言葉を借用した堀田の“人性の無視”は、単に日本軍の中国での暴政を指しているのではなく、政策を実行する際に、個々の人間が自分の人性を失い、他人の人性を尊重せず、自他の人間性を失うことを示唆しているだろう。したがって、彼は「この両国の関係について真に心を痛めそれを己れ自身の人生の課題とした人が果して何人いたであらうか、これを『仕事』にしたり、金儲けのためにしたりした人が実にあまりにも多かったのでは

所、此大乱之道也。”（林語堂：《啼笑皆非》，林語堂、徐誠斌訳，群言出版社，二〇一〇・七。日本訳は『涙と笑の間』彰考書院、一九四五を参照した）。

⁵² 原文は以下である。“人化物”即已失人道，故可訳為“dehumanized”；有是為物所化，故可訳為“materialistic”。（前掲、林語堂：《啼笑皆非》，林語堂、徐誠斌译，群言出版社，二〇一〇・七）

⁵³ 英語の原文では、次のように書いている。“When man is constantly exposed to the things of the material world which affect him and does not control his likes and dislikes, then he is overwhelmed by the material reality and becomes dehumanized or materialistic. When man becomes dehumanized or materialistic then the principle of Reason in nature is destroyed and man is submerged in his own desires.” (Lin YuTang: Between Tears And Laughter. The John Day Company. p. 71)

ないか」⁵⁴といい、日中の中にいる人々が、殆ど仕事や金儲けなど外部の物質のために動かされあるいは動いていると批判する。

このように、戦争や武力など機械的な手段を用いて国際問題を解決する公式機関を、堀田は批判し、個々の人間の人性から国際の問題を分析するようになり、日中関係を個人の人生の問題として考えるようになる。これは恐らく林語堂の『啼笑皆非』から啓示を受けて達成した新たな認識であろう。

本章は堀田が上海で体験した身分上の転換と、その「身分転換」につれて変化し続けた彼の認識について考察した。

国際文化振興会の文化役員である堀田は、帝国日本の宣伝者として上海の統治者の一員であったが、日本の「敗戦」で一転して中国人に統治される「敗戦国民」となる。日本の文化宣伝者として上海に赴いた堀田は、上海で日本の「敗戦」を見ながら、中国人の心の移り変わりをも体験した。たてまえとしては、日本人と中国人とのコミュニケーションを密にし、交流を作り出すはずの「日策」が、実際には、交流を生むものにはなっておらず、むしろ中国人にたてまえと本音の使い分けを促し、面従腹背の姿勢を植え付けただけに過ぎなかったことを、彼は痛感し、苦しい反省を余議なくされたと考えられる。

一方、日本の「敗戦」は彼に精神上の頹廃をもたらし、彼は精神の虚無に陥った。が、中国国民党の「思想教育」を受け、日中文化交流への期待を抱えて国民党宣伝部の「留用」者になる。このような国際文化振興会の文化役員から国民党の宣伝者へと至るという「身分転換」は一種の立場の転換とも言える。つまり、帝国日本側からその敵側であった国民党側への転換である。この立場の転換には、上海で経験した「軍部」の政策に「人間性」が欠けていたことに対する失望と、国民党の「三民主義」に対する希望という堀田の感情が窺える。

しかし、「留用」を通じて、中国国民党の公式機関も日本と同じように、「人間性」のないものであると認識し、再び失望した。国家、公式機関に対する失望から、彼は一個の人間として生きなければならないと新たに認識した。国家、公式機関と相反する側に立った彼は、林語堂の『啼笑皆非』から啓示を受け、日中問題を解決する方法が、従来の「武力」ではなく、「心と心」の問題、「人性の問題」だと考えるようになった。そこから「人の心」

⁵⁴前掲、堀田善衛「反省と希望」（上海『改造評論』一九四六・六、引用は前掲『上海日記 滬上天下一九四五』、集英社、二〇〇八、一二三頁に拠る）。

という問題の重大さが認識され、政策や政治的な立場に左右されないほどの相互理解や友好を築いていかなければならないという目的意識がうまれてきたと考えられる。

このように、国家・公式機関側に立たず、一個の人間として「人性の問題」から日中問題を考える堀田の姿勢は、「上海体験」の「身分転換」によって形成された。この姿勢は、戦後作家となった彼の基本姿勢である。まして、独立した個体として「人性の問題」から国際問題を思考する人物像は、堀田の小説にも登場する。例えば、第三章で論じる「広場の孤独」の木垣が絶えずいわゆる組織から独立しようとする意志は、まさに上記の堀田の認識の投影だと考えられる。また、国際問題を引き起こす原因が物質化される人間の人性の喪失に根源するという新たな認識は、後に「祖国喪失」や「広場の孤独」に書き込まれ、堀田文学を形成する根本的な思想だと考えられる。

第三章 歴史認識への意志（一）

—「広場の孤独」¹再読—

第一節 本章の問題意識と方法

一九四七年一月、堀田は上海から引き揚げ、長崎の佐世保に上陸した。翌二月から世界日報社に入り、九月の世界日報社の解散まで働いていた。新聞社に勤めた間に発表した作品（本章末 表二）を、退職してから一九五一年までの作品（本章末 表三、四、五）と比較すると、堀田の文学における動向が一目瞭然となる。

彼の作品を詩篇、随想、評論、翻訳、小説と五つのジャンルに分類すると、彼が世界日報社で勤務していた期間中には、外国作品の翻訳一冊と中国についての随想二篇を除いて、ほとんど同人誌『個性』や『歷程』に拠って詩を創作していたことが分かる。しかし、世界日報社を退職した後、彼は年毎に詩を書かなくなり、その一方で小説の創作へ力を注ぐようになる。一九四八年十二月、最初の小説である「波の下」を発表し、その後、「共犯者」（一九四九）や「国なき人々」（一九四九）など一連の小説が続いて世に出た。

武藤功氏は²、堀田にとって「戦中の諦念や沈黙への戦後的な自己反省」は、一種の「屈辱の意識であったといえる」と指摘している。さらに、武藤氏は、堀田がこのような自己意識との葛藤を持って戦後文学への出発点に立ち、同時に「その自己開示をもって戦争への対決の道へ通じさせることによって新しい小説的創造方法へ」という自覚を持ったと述べ、堀田が詩人から小説家へ転換した要因としている。武藤氏の指摘するように、堀田は小説によって「戦争への対決の道へ通じさせる」という意志を持っていたと考えられるが、自己反省などの「屈辱意識」より、むしろ上海体験によって変化した認識のほうが「新し

¹ 「広場の孤独」は最初の三節が『人間』（一九五一・八）に発表されたが、同誌の廃刊により『中央公論・文芸特集』（一九五一・九）に改めて全文が掲載された。だが、『中央公論』に載せた際に、『人間』に掲載された部分が大幅に修正された。今回の引用は堀田が自ら編集を担当した『堀田善衛全集』第一巻（筑摩書房、一九九三・五）に拠る。文中で頁数だけ記入する。

² 武藤功『「二重扼殺者」としての詩人』（『堀田善衛——その文学と思想』、同時代社、二〇〇一、三三七頁）。

い小説的創造方法」をもたらした要因なのではないだろうか。

第三章と第四章では、堀田が戦争へ対決する意志をどのように初期の小説において表現したかについて分析する。そのため、第三章では堀田が文壇に認められたデビュー作「広場の孤独」を取り上げ、主人公木垣とほかの人物との関係に焦点を当て、テキストの分析・読解を行う。主人公の内部心理と彼の外部に存在する人物との関係を考察することによって、いわゆる組織から独立しようとする人物像の形成過程を辿りながら、先行研究と異なる読みを呈示する。この新たな読解を通して、前述した戦争へ対決するという作家の意志がいかに小説に書き込まれたのかを解明する。

第二節 従来の読み方への疑問

一九五一年に「広場の孤独」と「漢奸」で第二六回芥川賞を受賞するまでに、堀田は同賞に二回落選している。一度目は第二三回の「祖国喪失」であるが、石川達三以外には選考委員の注意さえ引かなかったと言っても過言ではない。二度目は二五回の「歯車」である。この時は丹羽文雄、佐藤春夫、川端康成の三人が評価したが、「武田の作品があって損にする」³や、「題材の新奇のわりに、筆が弱いようで、筆致が平凡のようである」や⁴、「最近の翻訳小説を連想させる」⁵などの理由で、再び落選した。このように、芥川賞に二回落ちた堀田であるが、「広場の孤独」と「漢奸」によって受賞し、今度は「時代感覚を知性で捕捉しようと努力している点」⁶、「錯雑した国際間の軋轢に混迷した人々の描かれた題材」⁷、「新しい時代感覚、国際政治意識など」、「時代を感ずる皮膚の鋭敏さ」⁸など高い評価を

³ 丹羽文雄「第二十五回芥川賞選評」（『文藝春秋』一九五一・九、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四四一頁に拠る）。

⁴ 瀧井孝作「第二十五回芥川賞選評」（『文藝春秋』一九五一・九、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四四四頁に拠る）。

⁵ 川端康成「第二十五回芥川賞選評」（『文藝春秋』一九五一・九、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四四七頁に拠る）。

⁶ 佐藤春夫「第二十六回芥川賞選評」（『文藝春秋』一九五二・三、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四五二頁に拠る）。

⁷ 瀧井孝作「第二十六回芥川賞選評」（『文藝春秋』一九五二・三、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四五三頁に拠る）。

⁸ 石川達三「第二十六回芥川賞選評」（『文藝春秋』一九五二・三、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四五七頁に拠る）。

得たのである。

しかし、興味深いことに、第二六回の芥川賞の受賞作品には二作品が取り上げられているが、実際に注目を集めたのは「広場の孤独」のみであり、「漢奸」についてはほとんど言及されなかった⁹。また、評価される「広場の孤独」の特徴、すなわち「国際間の軋轢」や「新しい時代感覚、国際政治意識」は、落選した「祖国喪失」や「歯車」にも見出せるし、「祖国喪失」と「歯車」の落選理由として公示された欠陥、すなわち平凡な筆致や「翻訳小説を連想させる」点は、同様に「広場の孤独」にも見受けられる。例えば、「翻訳小説を連想させる」という点に関して、「広場の孤独」は C. V. ゲオルギユの「二十五時」の模作だと、山本健吉をはじめ、多くの評者に指摘されていた。このような状況を鑑みた場合、堀田が芥川賞を取った本当の理由とは何かと問いたくなる。

私見によると、「広場の孤独」が芥川賞を獲得した理由には、三つの面を考慮しなければならないだろう。一つは「広場の孤独」の社会的な人気である。当時、ベストセラーとなっていたこの作品は聖書のように人々に愛読されていたと中野好夫は証言¹⁰している。今一つは、同時期の候補作に良い作品が欠けていたからである。坂口安吾は「広場の孤独」を激烈に貶したが、「他の候補作品にも「賞」に価するものは見受けられません」¹¹と言い、受賞作が無いと断じている。最後に、最も重要な理由として考えられるのは、当時の知識人たちが共有していた、祖国日本がアメリカに「占領される」のではないかという意識である¹²。選考委員の岸田國士は「現在の東京の植民地風景は、却って作者の筆力にふさわしく」¹³といい、「広場の孤独」に描かれた朝鮮戦争に際してアメリカに協力する日本は明

⁹ 「広場の孤独」のみを評価することについて、花森重行は選考委員が「植民地・外地から眼をそむけようとしたとは言えないだろうか」⁹と厳しく批判した。(花森重行「歴史に抗する“歴史”へ——堀田善衛における上海体験と「第三世界」——」、『日本学報』、二〇〇三・三、七二頁)。

¹⁰ 「広場の孤独と共通の広場——堀田善衛芥川賞授賞記念祝賀会記録」(『近代文学』、一九五二・五、六頁)。

¹¹ 坂口安吾「第二十六回芥川賞選評」(『文藝春秋』一九五二・三、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四五七頁に拠る)。

¹² 花森重行はこの問題について詳しく分析した。彼によれば、当時、朝鮮戦争に対する「無力感や、底知れぬ不安や、日本人はこうしていいのかという焦燥感や、主体回復への切なる願い」という気持と、基地が残り続ける現状と「朝鮮特需によって潤っていく生活へのやりきれなさ」などの気持が、批判的知識人の間で共有されていた。筆者は花森氏の観点を否定しないが、日本人の焦燥感や主体回復への切なる願いという気持は、根本的に日本が占領されているという意識から来ていると言えるだろう。(前掲、「歴史に抗する“歴史”へ——堀田善衛における上海体験と「第三世界」——」、二〇〇三・三、七二頁)。

¹³ 岸田國士「第二十六回芥川賞選評」(『文藝春秋』一九五二・三、引用は『芥川賞全集』

らかに「植民地」であると捉えている。そして、この作品を「植民地」の日本を描くものとして位置付け、「上海物」と呼ばれる「祖国喪失」と「歯車」とは一線を引いた。¹⁴

しかし、このように読解するのは決して芥川賞の選考委員たちだけではなく、むしろ多数の評論がこの視点で「広場の孤独」を捉えていたと言っても良い。堀田と親交のある栗原幸夫も、次のように評する。

『広場の孤独』によって堀田善衛は戦後文学の最前線におどり出た。反響はすさまじいものであった。それは当然である。日本文学はこの作品によってはじめて、戦後、つまり占領という事態の文学的表現をもったのだから。占領は自由の理念や民主主義を日本にもたらしただけではない。それは日本を異民族支配のもとで国際政治の網の目のなかに、がっちりと組み込んでしまったのである。しかもそのなかで生きる日本人は、もはやたんなる戦争の犠牲者や被害者でだけありつづけることはできない。それは否応なくコミットメントを強制される存在である。この作品は日本人の視野を飛躍的に拡げた。それは自分たちの生活を支えている足もとに向って視野を開き、自分の自由がどのような状況に置かれているかという実存主義的な問題に目を向けさせただけではない、いま現在の問題として、また自分一箇の責任をともなう生き方の問題として、アジアへの目をあけさせたのであった。¹⁵（下線部は引用者による、以下も同様）

栗原の解説では、「広場の孤独」が「占領という事態」を表現した文学作品として位置付けられている。彼は作品の意義が日本人の視野を広げたところにあって、日本人に自分の置かれた状況を認識させたほか、「自分一箇の責任をともなう生き方」という問題を提示したと評価した。重要なのは、栗原氏が、日本人が「たんなる戦争の犠牲者や被害者」であり続けることは不可能となり、「否応なくコミットメントを強制される存在」となると指摘し

第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四五六頁に拠る）。

¹⁴ 「前作「歯車」から「漢奸」へと一歩進境をみせ、更に上海を舞台とするものから、今度の内地に材をとった「広場の孤独」に至って、作者の手腕は、もはや懸念の余地がなくなった」（前掲、四五六頁）という岸田國士の言葉から、彼が「広場の孤独」を「内地」を背景としたものとして読み、「歯車」と「漢奸」など上海を舞台するものと分けていたと考えられる。

¹⁵ 栗原幸夫「解説」（『広場の孤独・ゴヤ』（『黒い絵』について）の後解説、新潮社、一九七七・五、三九一頁）。

ている箇所である。彼の視線はこの作品において、日本人が「戦争の犠牲者や被害者」であると同時に「コミットメント」を伴う存在であるという二重性に注がれているが、「強制される存在」という受け身として「コミットメント」を捉える観点からは、「コミットメント」が日本人の自発的、あるいは自動的に発したことではなく、占領国に強制されてのやむを得ない行為だという彼の思惑が窺える。

「占領」という政治空間に嵌め込んで読むのは栗原氏だけではない。本多秋五は、堀田の芥川賞記念祝賀会において、「占領」という事態にいる知識人の心情を述べ、同時代の知識人の気持を代弁する作品として「広場の孤独」を位置付けた。

堀田君の文学は、現代の知識人が心ならずも強いられた状況、あるいは心ならずも強いられた姿勢に対する嫌悪乃至はその嫌悪によってはじめて鋭く感じられる生き心地、さういふものを紙上になすりつけたりあるいは結晶させたりするところに成り立つ文学といえないかと思います。(後略)

平和、国の独立、あるいはわれわれの自由と人権——かういふものが脅かされているという感じ、霜をふんで堅氷いたるという恐怖と不快感は今日誰の胸にもひそんでいると思われます。堀田君の作品はこのわれわれの気持に訴えるものをもっています。

16

本多はアメリカ軍の占領を明言していないが、「平和」、「国の独立」、「われわれの自由と人権」を強調している言説では、日本と日本人が他国に抑えられ、自由と人権が失われていることを暗示している。そして、このような状況に対して、多くの知識人が「恐怖と不快感」を持っていると本多は認識し、この認識が「広場の孤独」に対する彼の読解にも影響したのではないか。ゆえに、彼は「広場の孤独」が日本知識人の共有の気持を訴える作品として捉える。彼の観点は明らかに「占領」によって抑圧された知識人の気持を重視した上で形成されたものである。

この通り、栗原幸夫は「広場の孤独」が「占領」状態を表す作品だと評し、本多秋五はこの作品が「強られる」状況とその状況下にある知識人の「不快」と「恐怖」を表現するものだと認定する。両者とも日本の「占領」という政治空間に焦点を当てて「広場の孤

¹⁶ 前掲、「広場の孤独と共通の広場——堀田善衛芥川賞授賞記念祝賀会記録」(一九五二・五、三頁)。

独」を捉えている。

もう一つ代表的な論説として挙げられるのが、山本健吉の論である。堀田の作品が同時代人の好評を博したことに對して、彼は一九五二年『朝日新聞』の評論において、前年一九五一年に活躍した三人の作家、即ち石川利光、安部公房、堀田善衛を、「昨日」、「明日」、「今日」の作家と位置付けて、堀田の作品が人気を博した謎を次のように読み解く。

今日の日本の知識人の不安と苦悩を、国際的な視野のもとに敏感にえぐり出したことが、堀田の小説の多くの共鳴を得た原因である。複雑にからみあった今日の政治機構の中に、いやおうなしに巻き込まれてしまうのが知識人の運命であることを、堀田は繰り返し作品の中で強調する。このように政治のウズの中へ踏み込んでしまうことを、堀田はコミットメントと言っている。コミットとは「罪や過を犯す」ということである。¹⁷

山本健吉は日本の知識人の不安と苦悩を描いたことが、堀田の作品が愛読される要因であると分析している。その「不安」や「苦悩」とは、錯綜した政治機構に巻き込まれる知識人が運命に抗することが出来ず、コミットメントしていくことだと考えられる。彼が注目している点は、政治機構の力に流される知識人の運命と、その運命の下で「コミットメント」をせざるを得ない知識人の悩みにある。それゆえ、彼は「広場の孤独」が「コミットメントの文学であって、アンガジェの文学ではない。『参加させられる』文学である」¹⁸と位置付ける。

栗原と同様に、山本も「コミットメント」という言葉に注意を払う。だが、栗原の説く日本人のコミットメントは、「占領」する側、すなわちアメリカ軍から強制的にさせられたものであると訴えている。山本の言う「コミットメントの文学」とは、自分の意志で社会にアンガジェするサルトルの文学と異なり、複雑な政治機構に「参加させられる」という受け身の日本の知識人を描くものだと理解できる。両者とも人間を受け身的な存在として注目しているが、前者の焦点は「占領」側に強制されるという面にあり、後者の着目点は日本の知識人と国際政治、すなわち知識人と政治というメカニズムの関係にある。

以上の二つの読解は同時代の最も代表的なものであるだけでなく、以後の「広場の孤

¹⁷ 山本健吉「昨日・今日・明日の文学」（『朝日新聞』、一九五二・一・六）。

¹⁸ 前掲、「昨日・今日・明日の文学」。

独」に対する評論もこの枠を出るものではない。無論、この二つの観点は当時の社会背景や知識人の生きる状況に即して行った論評で、テキストにおける時代の感覚をアピールしたものに違いない。だが、「広場の孤独」は、単に「占領」を表し、あるいは知識人が政治機構に対抗しきれない苦悩を描いたものなのだろうか。次に小説の構造を概観した上で、人物関係の分析を通じて具体的に小説の全体構造を提示し、この疑問を解明したい。

第三節 小説の構造と木垣の人物像

本節では人物と人物関係から小説の全体構造を分析する。まず小説の冒頭と結末の対比を通し、小説の全体を俯瞰してみる。

3-1 小説の冒頭と結末の対比

「広場の孤独」は全部で六章から成り、一九五一年の七月二十六日から二十八日まで三日の間にある新聞社で働いた木垣の出来事を語る。作品の冒頭は新聞社に届いた電文を翻訳する場面から始まる。

電文は二分おきぐらいに長短いりまじってどしどし流れ込んで来た。

「え——と、〈戦車五台を含む共産軍タスク・フォースは〉と。土井君、タスク・フォースってのは何と訳すのだ？」

「前の戦争中はアメリカの海軍用語で、たしか機動部隊と訳したと思いますが……」

「そうか。それじゃ、戦車五台を含むタスク……いや敵機動部隊は、と」

副部長の原口と土井がそんな会話をかわしていた。木垣は『敵』と聞いてびくっとした。敵？敵とは何か、北鮮軍は日本の敵か？

東亜部兼渉外部長の曾根田は、何とかということと渉外関係を円滑にするため、という名目で外人記者その他を社用と称して待合へひっぱってゆくところから『お社用部長』という仇名で呼ばれていたが、(略) ちらりと木垣、原口、土井の三人を横目で見、

「前後の関係をよく見極めて適当に訳しておいてくれ」

(略)

「あれだ、お社用め、何だかびくびくしてやがる。前後の関係をよく見極めて、か、ハイ、シャヨウですかだよ、莫迦莫迦しい」

と云ったのは、平素口数の少い三十か三十一の御国の声であっただけに、木垣はふいとふりかえって御国の顔を見詰めた。(二九六頁)

「タスク・フォース」の日本語訳について、土井は戦争の経験で「機動部隊」と訳したが、原口は「敵」を付け加え、北朝鮮と対立する陣営に立つことを示す。木垣は原口の選択に対して疑問を感じるが、結局疑問は疑問のままで終わる。物事を円滑に運びたい曾根田が立場を曖昧にして選ばないことに對し、御国は怒り出す。この場面はこの五人が単に意見を異にしているだけではなく、政治的立場においても対立していることを表している。立場をはっきり取っている原口と御国は、日本における「右」の人間と「左」の人間を象徴している。曾根田が「前後の關係」によって訳すということから、部長である彼には各勢力關係に配慮して立場を取るという意図が見られる。一方、土井と木垣は以上の二人のように明確に立場を選んでいない。「敵」を付け加えることを聞いて「びくっとした」と反応した木垣には、北鮮軍に対して対立する側、あるいは味方の側にいるという認識がはっきりしていなく、また、このような選択に対してある違和感を感じていると窺える。

しかし、確立した立場を持たない木垣は、この議論を聞いて、自分の置かれている立場に気付くようになる。「彼は、いまこんな仕事をしていること自体、それは既に何かのCommitmentをしてしまったことになるのではないか、という、背筋に或る冷たいものの流れるような反省が湧き起こってきた。それはいまにはじまったことではなかった。」(二九七頁)という。新聞記事を報道する時に明確な立場を持たなければならないことが、一種の“Commitment”だと意識し始め、木垣は新聞社の仕事を認識しなおしている。このことから、彼は二年前のことを思い出す。

思えばあの頃から、この国の社会は底の方で揺れ出したのだ……(略) 木垣は大会では殆ど何一つ発言せず、新資本が入り、S新聞が一般紙たることをやめて経済記事専門の新聞になったので、当時文化部系だった彼はすることもなくなった、としてやめたのであった。何も旗幟鮮明に追放資本導入に反対だったからではない。はっきり云えば、京子との同棲生活のため、家の問題、いや部屋の問題で困っていた際なので、退職した人々は二十数名あったが、恐らくははっきりと追放資本の導入に反対する、と

してやめたのはあの質問をした独身で親がかりのカトリック青年だけだったとい
ていい。(三〇〇頁)

引用箇所直前部分では、「やっぱり」(二九九頁)という言葉を繰り返し用いること
によって、木垣の「今」の状況と二年前にS新聞社を辞めた時とを結びつけている。二年前、
S新聞社が戦争に関わる追放資本を導入する際に、彼は「日本という社会が底の方で揺れ
出した」(三〇〇頁)と気付いたものの、何の発言もしなかった。言うまでもなく、木垣の
内心では、社会や国の揺れるところをはっきり認識できており、“Commitment”の自覚者だ
と言える。しかし、二年前でも「今」でも、木垣の態度は同じく、主張を明確にせず、立
場をはっきりとしておらず、ただ「ぐいと唾液を飲み込んで再び先を訳しはじめた」(二九
七頁)。このことから、立場を明確に取らず、状況に流されていく彼の姿が浮かび上がって
くる。

これが小説の冒頭である。堀田は一つの軍事用語の翻訳をめぐって登場人物の胸に去来
する思いを通して、朝鮮戦争が勃発して冷戦が始まってから、日本人々が様々な政治的
立場を取るようになっていくというドラマを描きながら小説を進めていく。だが、以上の
引用からは、他の登場人物達と異なり、木垣は最初からどちらか片方の立場を取るとい
うことをしない人間だということがうかがえる。

しかし注目すべき点は、小説の結末を見た場合、この人物の変化が甚だしいことである。

なにもかもが揺れ動き、なにひとつ解決していない——そういう感じであった。そ
の動揺が眼に見えた。眼に見えたものは表現しなければならぬ。それがこのおれの解
決の糸口なのだ。彼にはかれがこれから書こうとしているものの全体が見えていた。
(三六四頁)

この「揺れ動き」や「動揺」は、冒頭の「揺れ出し」(三〇〇頁)と呼応して、社会の状況
自体は同じであることを暗示している。しかし、同じ状況にいる木垣には一つの変化があ
った。積極的に発言しなかった彼は、結末になると、「解決の糸口」を見つけたという。即
ち、「眼に見えたもの」を表現することである。

木垣はぶるっと頭を振って再び空を仰いだ。星々はいつの間にか消えてしまって、空

はいつものように暗かった。光は、クレムリンの広場とかワシントンの広場とか、そういうところにだけ、虚しいほどに煌々と輝いているように思われた。そして彼はそこにむき出しになっている自分を感じた。生まれてはじめて、彼は祈った。レンズの焦点をひきしぼるような気持で先ず書いた。

広場の孤独

と。(三六五頁)

後に詳しく説明するが、木垣にとって、小説の創作は一つの行動であり、特定の立場から抜け出す道である。「広場の孤独」という作品は彼が動き出すことで作られたものだと考えられる。この意味から言うと、この小説のメインストーリーは、立場を選ばない人間から、行動をして自分なりの立場を取る者へという、木垣の変化を記録したものではないだろうか。冒頭部分の木垣は、消極的で発言しない人間であり、様々な立場の間で曖昧な位置にいたが、結末になると、「クレムリン広場」と「ワシントン広場」のどちらにも寄らず、「そこにむき出しになっている自分を感じた」と言えるようになり、明確な立場を取ることができ、新たな道に行くことにする。

このように、冒頭と結末部分が対応するこの作品の構成を鑑みると、「広場の孤独」は木垣の変化を描き出すことに焦点を絞っていると考えられる。冒頭での積極的に発言しない木垣を受動的な人間と言うならば、後に行動を取る彼は能動的な人間に変化したと言える。すなわち、この小説は木垣が受動から能動へ転換するものとして読めるのである。

木垣が辿ったこのような過程を具体的に分析する先行研究は、管見の限り見当たらない。しかし、受動的な人間が能動的に行動を取りだすのは、大きな変化と言える。次に、木垣が如何に小説の創作を一つの立場として取るようになるのか、その具体的な過程はどのようなものであるのかという問題を分析する前に、木垣の性格、及び彼が最初はどのような状況にいたのかという点について見る必要があるだろう。

3-2 冒頭における木垣の人物像

簡単に木垣の経歴を述べる。戦争初期に慌てて結婚した木垣は、一ヵ月後に召集されたが、入隊してからすぐ胸が悪くなり、ついに除隊することになった。その後、彼は東京や香港を転々と移動して、上海にとどまることになる。そこで京子との同棲を始め、この関

係が日本に引揚げてからも続いて、二人の間に子供が一人出来た。引揚げの後、最初は S 新聞社に勤めたが、担当した文化欄がなくなったため、退職して二年間家で翻訳に従事し生計を立てていた。「現在」は朝鮮戦争の勃発によって人手不足となっている新聞社の臨時職員として働いている。

この経歴から、木垣の結婚、入隊等の経験は、全て戦争あるいは政局の変化と関わっているのが明らかである。高史明が指摘しているように、木垣は「日本の敗戦を中国で迎えた人間」であり、「日清・日露戦争以来、度重なる戦争を積み重ね、中国への全面侵略に突入してからは、後戻りができなくなってしまった日本のあり様を、外ならぬ中国において見た者の痛みと苦悩が脈打っているのである」¹⁹。戦争の真実を目撃したからこそ、「反省」の気持を持つことができ、この中国経験が彼に“Commitment”を自覚させる要因の一つとも考えられる。だが、木垣はその社会の「動揺」に気付いたものの、立場を選ぶことを恐れるあまり、その結果を究明しないままで終わってしまう。前述したように、この時点の木垣は積極的な発言を行わず、明確な立場を選択しない人間である。

しかし、立場を不鮮明にしたままの人間が存在することは、新聞社では許されない。明確な立場を選ぶことはなくとも、新聞社という場に置かれたならば、その空気に同化していく。この点について、木垣は既に意識していた。

——この新聞の手伝いをしているという事実は、個人的な考えの如何に拘らず、一切の他者に対して、明らかにこの自分自身がモオリヤック氏の立場に立つカテゴリーの中に入り、これを支持する、つまりそういう風に一步踏み出したことを意味する。
(三〇二頁)

つまり、「右」の新聞社で働くことで、他者から「モオリヤック氏の立場に立つ」人間として扱われる。「モオリヤック氏の立場」とサルトルの立場とは、木垣が文中で説明したように、当時文壇で対立していた二つの観点を代表するものである。サルトルは主にフランス政府に中共の承認、中共の国連加入反対の停止、国際関係の緩和や印度平和運動の支援、平和と独立のアピールなどを提唱して(三〇一頁 参照)、国の独立と精神の独立を主張した。それに対してモオリヤックは、中共を支持する言説のなかで、アメリカの誤解を招か

¹⁹ 高史明「『広場の孤独』を巡って思う」(『堀田善衛全集』第一巻月報、筑摩書房、一九九三・五)。

ないほうがいと弁論して、独立などを捨てて自己保全の方針を取る。(三〇一頁 参照)

サルトルの独立、モオリヤックの保全のどちらを採るかについて、木垣の答えは分裂している。「国の独立と精神の独立とは不可分の関係にあるという、偏執概念のようなものが」(三〇二頁)ある彼は、心の内でサルトルの観点に賛成する。が、前述したように、新聞社を手伝うこと自体がモオリヤックの立場に立っている。もしサルトルとモオリヤックを対立する両側に喩えるなら、木垣の内心と居場所はその両側に分かれていて、一致していないと言える。この意味では、木垣は「個人的な考えの如何に拘らず」、「一步踏み出した」と言って、コミットメントを行いたくない自分がこの仕事によって既にコミットした場所に置かれているという自分の現状に対して、十分に認識していると考えられる。

また、それと同時に、「コミットメント」の状況から脱却するのが如何に難しいことであるかを彼は意識している。

だが、限界とは何か。新聞社などに出ず、つまり社会組織の中へ現実に入らず、これまで二年間のように、家にこもって探偵小説、通俗小説、冒険物語から大戦記録など、手あたり次第、金になり次第翻訳することが、限界を越さず手を清くしてすごすことか。そんなことはありえない。」(三〇三頁)

木垣はコミットメントの限界を問う。その答えは「限界を越さず手を清くしてすごすことか。そんなことはありえない」である。つまり、たとえ社会組織の中に入らずとも、コミットすることは避けられない。生活の汚れが空気のように世間に充満している。このような状況に居て、如何にコミットしないように生きるべきかという木垣の混迷が見えてくる。

木垣について、瀧井孝作は「頭デッカチで足のほうは細りして、ひよろひよろしている人だ」²⁰と評し、一人の行動力不足の知識人として捉えている。一方、塩谷郁夫はこのような“Stranger in Town”の人を「歴史と人間の観察者」²¹と名付けている。確かに瀧井氏の指摘したように、木垣は行動力が弱い。だが、小説の冒頭と結末の対比で分かるように、最後に木垣は小説を書くという行動を取るようになった。また、塩谷氏の言うように、木垣は周りの情勢をしっかりと観察していることから、彼は「観察者」だと言える。しかし、

²⁰ 瀧井孝作「第二十六回芥川賞選評」(『文藝春秋』一九五二・三、引用は『芥川賞全集』第四巻、文藝春秋、一九八二・五、四五三頁に拠る)。

²¹ 塩谷郁夫「堀田善衛における歴史と人間の観察」(『文学・社会へ地球へ』、一九九六・九、五〇一頁)。

最後に「広場の孤独」という小説を書くことによって、彼は単に「観察者」としてだけではなく、記録者、参与者になったとも言えるのではないか。次に、木垣が如何に行動者へと変わったかという過程を、人物関係を通して見ていきたい。

第四節 「広場の孤独」の人物関係と木垣の変化の過程

前述したように、木垣は積極的に発言しないが、政治に強い関心を持つコミットメントの自覚者として登場する。その後、彼はそれぞれの立場に立つ人物と接触して、次第に変化していく。勿論、ストーリーの展開は一直線ではなく、各人物との接触が交錯して進む。例えば、ハントとの接触は主に第一章と第三章で行われ、第二章には御国と立川との接触が割込んでくる。だが、その順番はともかくして、全体から見ると、木垣とほかの人物の接触には必ず発端と結末がある。次は木垣と他の人物との付き合い、そして、その後に木垣がどのように変化していくかを辿ってみたい。

4-1 木垣とハント—紛争に参加する新人

最初に国際情勢について木垣と話し合った人は、朝鮮戦争やインドシナ戦争に積極的に参加する「フレッシュな血」²²と呼ばれるハントである。ハントが新聞社を訪れた際に、木垣は「戦争の当事者たる米国人がこの戦争を、ぎりぎりのところどううけとっているのか」(三〇〇～三〇一頁) 知りたいという「欲望」に駆られ、この若いアメリカ人ジャーナリストと新聞社で話を交わした。

この会話はサルトルとモオリヤックとの論争をめぐって始まる。ハントの観点は「フランス人があわてている」(三〇三頁) というもので、彼はモオリヤックの側に立つ。それに反して木垣は「フランス人は考えている」と反発する。この論争からは二人の立場が完全に対立していることが分かる。

無論、立場の差異は物事を見る視点に影響を与える。木垣とハントは歴史と社会を見つ

²² 旧オーストリー貴族のティルピッツは「君がさっき一緒にいた OA 通信のハワード・ハント、あれなどもフレッシュな血だな」と語って、ハントを国際紛争に参加する新興勢力として見なしていると考えられる。(前掲、「広場の孤独」、三三三頁)。

める視線の角度が全く一致しない。これは重工業地帯を見る視線から窺える。

車はとっくに六郷橋を越えて川崎の重工業地帯へ入っていた。この前の戦争の跡はまだ生々しくのこっていた。焼跡の骨のような鉄骨が夜の底で天に突き刺さっていた。両手をさしあげて何かを祈っていた。そのすぐ横の工場は、焼けた工場の骨や頭蓋などと何の関係もないかのように、徹夜で、生きていた。めらめらと朱色の焰を吐きながら。(略)木垣はこの激しい対照を眺めながら、自分の気持の基調が生きた工場にはなくて、死んだ工場の荒れ果てた風景にへばりついているように思った。

「ハワード、君は生きた工場を基調にして考え、僕は戦争による廃墟を基調にして考えているようだ」(三二五頁)

川崎の重工業地帯では、二つの工場が並んでいる。一つは戦争の廃墟で、もう一つは新しい戦争のために徹夜で生産している。冷戦の下で、米軍の戦略物資の補給基地を務めるこの日本の工場を見て、ハントは動いている工場をダイナミックな光景として捉える。それに反して、木垣の視線は廃墟となったほうに向けられる。木垣の言うように、二人の見詰める場所が異なることは、考える基調が異なっていること表している。これは字面通り工場についての考えではなく、歴史を考える基調が全く異なっていると理解しなければならない。若いジャーナリストのハントは積極的に朝鮮戦争に投身して、その目は「現在」と「未来」しか見ていない。一方、第二次大戦の実状を知る木垣は生き生きとした工場を見て衝撃を受けた。彼の視線は「荒れ果てた」工場に投げられ、戦争の惨状に焦点を当てている。

サルトルとモオリヤックのように、木垣とハントは完全に対立する両側にいる。最後に木垣は「ハントと一緒に来たことを後悔し出した。気持が完全にはなれてしまっているのだ」(三二五)と分かり、二人の間に共感し合う関係の成立は不可能であるという結末になる。

4-2 木垣と御國—「左」の人間

ハントの後に、木垣と話し合ったのが同じ新聞社に勤める御国である。もしハントと新聞社が全部モオリヤック氏側に立つものであり、木垣はその反対側にあるとこれまでの分

析から分かるなら、常に新聞社の人間に疎外される、党员らしき（後に証明された）御国は、立場的に木垣と近いと言える。つまり、二人とも国家の独立を提唱するサルトル側に立つ人間である。また、二人の経歴も相似している。御国は外信部から追ひ払われた後、戦争の発生で人手不足になったため、再び呼び戻されたという。木垣は新聞社をリストラに近いやり方で辞職して、同じ理由で今の新聞社に臨時手伝いとして働くことになる。似ている経歴から、木垣は御国に親しみを感じた。が、最終的に「人間連帯」や「同志感」など組織の強力さを推奨する御国から離れていく。両者の隔たりが次の会話から窺える。

「なるほど。そうすると、如何に悪質な環境の中にいようとも、党员は、少なくとも精神的には救われている訳だな。しかし、党员以外の個人はどうなるのかね、君の所謂生活のために手を汚さざるをえぬことを苦痛とし、君たちのように組織的な……実践的な夢で以て始末できない人たちは？」

「それですよ、そんな人たちを救い出し解放するために、僕たちは死ぬ覚悟をしているのですよ」（三一―一頁）

「左」の御国が「右」の新聞社に勤められるのは、組織の強固さがあるからだということに対して、木垣は組織のない人間はこの立場の不一致に対してどうするべきかと問う場面である。木垣の問いは恐らく個人の選択という面から発せられたものだが、御国は彼の本意に全く気付くことなく、逆に「そんな人たちを救いだし解放する」と答える。両者の問答では、個人を個体として見るか、あるいは組織の一部として見るかという点においてすれ違っている。御国にとって、個人の選択は一つしかなく、それは彼らの組織に付属することである。つまり、彼は個人選択の自由を否定したと考えられる。個人と党员の関係は次第に「解放」される側と「解放する」側という強弱関係になっていく。

御国の「論理にはあまりにも曖昧なもの影」がなく、「日常人の論理」ではない、むしろ「永久に闘い争う者の論理」（三四三頁）だと木垣は考えている。戦争中に保護されて感じた「屈辱感」と「うしろめたさ」（三一―二頁）を持っている木垣は、昔のようになることを避けるため、組織の「保護」から離れ、個人の責任や選択へ歩いていくと考えているからである。第五章になると、御国からの入党勧誘を拒絶し、立場上の別れを明確に告げた。このように、組織に入らず個人として生きたい木垣は、「左」の人間である御国とも立場が一致しない。これは御国が代表する「左」の立場から離れることを意味する。

4-3 木垣の認識（一）

ハントと会う前に、木垣は既に周りの状況に迷い、「コミットメント」や立場についての選択に悩まされていた。ハントや御国と出会ってから、この問題をさらに深く考えるようになる。特に選択しないという自分の位置を次のように認識する。

木垣には、一九五〇年の七月某日、喫茶店の椅子にぐったり腰を落しているのは、木垣幸二という特定の人物ではなくて、どこの誰でもいい任意の人物のように思いなされた。人は選ぶことによって数学の単位のような任意の存在から、意味をもった特定の存在になるのである。彼の周囲では、選択を畳み込み追い込むように行われていた。新聞も経済も戦争の方に張り込み、輿論調査と称するものによれば、国民の大部分も決定をしたことになっている、たとえそれがかりそめの恐怖にもとづくものであろうとも。木垣は自分の手を凝っと見詰めた。彼の手も汚れているのだ。そしてその汚れこそが真に彼自身にほかならぬのだ。しかしその汚れを正当化し、口実をみつげるために選ぶこともまた、己れを裏切ることにほかならない。（略）絶対に手を清くする純粋の道徳——そんなものは存在しない。だとすれば、あの労働者の緒ら顔こそは健康なものであって、椅子の上に<死んでいる>木垣こそは、実に本当に死んでいるのではないか。（三一二～三一三頁）

選ぶことによって人間が特定の存在になるなら、確定した立場のない木垣は「任意の人物」であり、「意味」を持たない人間である。だが、純粋な道徳は存在せず、彼の手も汚れているのだ。これは前述したコミットメントの限界についての考えの延長線上にあるものだと判断できる。さらに、汚れのない人間はないが、「その汚れを正当化し、口実をみつげるために選ぶこともまた、己れを裏切ることにほかならない」という木垣は、前の問題を強調して深化していると同時に、彼自身が特定の人間になれない理由を示す。つまり、口実をみつげるために己れを裏切ることをしたくないということである。己れを裏切ることは、自分の選択が心の内面と一致しないことを指しているだろう。このことが出来ない自分を、木垣は「本当に死んでいる」と認定する。

木垣が「本当に死んでいる」と言うのは、自分が選択せず、自分の生活の主体になって

いないため、生命力のない、あるいは任意な「もの」となっていることを意味しているだろう。これは〈実存的〉に生きていないことを意味するだろう。矢内原伊作によれば、「実存的に生きるとは、この世界から超越者へと逃れることではなく、逆に、超越者にかかわることによって現実にかかわり、現実を単なる対象的客体としてではなく、主体的な責任において担うべき課題として受取ることを意味するのである」²³。この定義によって、木垣の言う「死んでいる」人は社会の「主体的な責任」を受け取らず、実存的に生きてない、すなわち「死んでいる」と理解できる。つまり、木垣は選択することから逃れたく、主体的な責任を持たないため、生きていないものと同様である。

このように、「生きる」人間のように立場を選ぶか、永遠に「死んでいる」人間になるか、という逡巡の中で、木垣は相変わらずぼんやりとしている。しかし、任意的な人間は世間に居られないと木垣自身も分かっている。従って、残った課題は依然前者である。この問題を背負って、木垣はティルピッツと出会った。次に木垣とティルピッツの葛藤へ進んでいく。

4-4 木垣と無国籍者ティルピッツ

ティルピッツは六〇代の男で、オーストリーの旧貴族である。彼の社会地位と祖国がすでに第一次大戦や、ヒトラー、そして第二次大戦で滅亡したため、ハントや御国のような公式組織における人間と違って、ティルピッツ男爵は、木垣の言うように、〈われわれ〉という複数の相手にならない無国籍、無階級の人物（三三〇頁）であり、ある意味で、国家、組織の束縛から離脱した存在である。

木垣が男爵と知りあったのは「敗戦」頃の上海であったが、偶然日本の横浜で再会した。その晩、ティルピッツはヨーロッパ文明からイスラエル文明へ、さらに戦争と革命などについて、幅広く自分なりの意見を述べた。彼はヨーロッパの現代文明は滅亡に辿り着くが、ユダヤ人の国イスラエルにおいて「新しい文明」が生まれると予言する。ティルピッツの語る「新しい文明」とは、ユダヤ人とアラビア人、シリア人と手をとりあって荒地をその手で開拓していたことである（三三二頁 参照）。この予言は、階級、国家というカテゴリーを超越して、階級や人種などの差別を廃除した共同体こそが真の文明を生み出すと理解され、傍に歩いている木垣の共鳴を得られたようである。

²³ 矢内原伊作『実存主義の文学』（河出書房、一九五五・二、十五頁）。

深夜の舗装道路にひびく足音は、あたりのビルに反響した。皮膚の色はもとより、生活の歴史も、何もかもまるで違うのに、足音だけは何の区別もない、人間らしい音をたてていた。そしてその同じだということが、ふいに木垣の胸に異様な感動を呼び起した。(三三二頁)

木垣とティルピッツは元々違う人種、違う国の人間であるが、深夜に一緒に歩いている足音は毫も違いなく、「人間らしい音をたてていた」。この同じ人間らしい音を立てる足音は、まさにティルピッツの語った新しい文明論と同様、種族・民族・国家を超えるものであるため、木垣を感動させたのである。

しかし、「人間的なもの」を作ろうとティルピッツは語るが、この抱負を実現するためにとる行動とは、息子たちをコミュニストに加入させ、冷戦の陣営を突破して戦略物資を売ることである(三三三頁 参照)。このことは、階級や民族、人種、国家などによって人間を区分けしないという木垣の認める「人間らしさ」と明らかにすれ違っている。したがって、ティルピッツのこの話を聞いた木垣は、「深い淵に沈められたように思った」(三三三頁)とショックを受けるような反応を示し、ティルピッツについていくかどうか躊躇う。この点はティルピッツにこっそり入れられた金に対する木垣の態度から窺える。

もしこのお金がそういう金であるとしたら、そして彼が何かの目的に使用したとしたら、彼は自らの意図及び用途の如何にかかわらず、向う側、国際情勢という化物^{モンスター}に、消化され統一されてしまうことになる、若し、彼、木垣自身の存在が稀薄で虚構^{フィクション}に近いとすれば……。ここに一つの分水嶺がある。(三三七頁)

木垣は戦略物資の販売で稼いだティルピッツの金が、自分を国際情勢へと消化し統一するもので、「虚構」に近い自分を虚無から実在へと変化させる作用を持っていると考える。言い換えれば、この金は、木垣が無国籍、無階級のティルピッツについていて、国際政治に参与することの象徴となっている。この金に対する木垣の躊躇から、ティルピッツに追隨するか否かという彼の迷いが見えてくる。

以上の通り、紛争の「フレッシュな血」ハントや、左側の御国などの人びとから離れる木垣にとっては、一見無国籍、無階級で、「人間的なもの」を作りたいティルピッツに追隨

することは好都合であるが、あいにく「現在」ではティルピッツでさえ組織に入って「戦争を唯一のリアリティとした」論理で動く国際政治に身を投じている。このことにショックを受けた木垣は、ティルピッツの後について歩むことに躊躇を感じた。

4-5 小説に対する木垣の構想

このように、立場上の選択には、「そろそろ消極的な、生きることを考えることさえも、他人に手伝ってもらわねばならぬ自分の位置に飽いて来ていた」(三四五頁)と木垣は引き続き煩悶する。彼はまだ立場の選択が出来ず、相変わらず「何一つ御存知ではない」(三四五頁)と自己批判をする。

だが、ここで注目したいのは、「——任意の stranger を主人公にして〈小説〉を書いてみたらどうか。」(三四四頁)という木垣の考えである。容易に分かるように、これは小説を創作することについての発想でもある。本論の第二節で述べたように、もし小説を創作することを一つの行動として捉えるなら、小説に関する発想の変化は、木垣の行動の進展として理解できる。つまり、木垣の行動には、立場の選択における行動だけではなく、もう一つの行動が存在する。すなわち、小説の創作という行動である。この路線は最初から立場の選択と別に、しかし同時に進行してきた。

小説を書くという話は、御国と会った時に一つの仮説として始まった。その時、木垣は「若し僕が書くとしたら、君たちのような、この現代にはっきりした確信と希望をもって生きている人を主題にした、現代世界そのものがファクターになったものが書きたい。しかしそうすると、もう個人がドラマの主人公ではなくて、事件とか事実とか事故とかが主人公になってしまうかもしれない」(三一頁)といい、単に大まかに小説の主題を決めただけであった。だが、ティルピッツと会って、お金の使い方や仕事など選択が迫ってくる時点になると、小説についての構想が具体的に形成されていく。

世に任意の人物、臨時にちょっと雇ったといった人物というものには存在しない。みんな特定の人物なのだ。だから任意の人物とは、全くの虚構である。これは普通の、生きた人間のあり方とは逆であるが、逆算することによって未知数のX、すなわち各人を特定の各人として他から別様に成立させている、予見不能の地域をはっきりさせる。そこを照射することに力を集中する。云いかえれば、台風を台風として成立させてい

る。台風を中心にある眼の虚無を、外側の現実の風を描くことによってはっきりさせる——こうしておれの存在の中心にあるらしい虚点を現実のなかにひき出してみれば、おれは生身の存在たるおれを一層正確に見極めうるのではないか。予見不能の地域、台風の眼、それは人間にあつては魂と呼ばれるものではないか。もしそれが死んでいるならば、呼びかえさねばならぬ。この〈小説〉の題名は、そうだ、ひとまず Stranger in Town これを意識して、広場の孤独、とする。(三四四頁)

小説の題名と小説の手法を語る木垣である。木垣の説では、世間の人間はみな特定の人物である。このような人物を描く方法として、「外側の現実の風を描くことによって」、「おれの存在の中心にあるらしい虚点を現実のなかにひきだし」、「生身の存在たるおれを一層正確に見極め」という。また、小説の題名を「広場の孤独」と決める。この時点では、「広場の孤独」についての構想はもう既に完成していると考えられる。言い換えれば、最後の木垣の創作という行動のペースが、この時点で作り上げられたわけである。

このように、木垣は、もう一つの行動と見られる創作についての考えが次第に明晰になってくる。それに反して、立場の選択における停滞は依然続いている。

4-6 木垣と原口—「右」の人間

渉外部の副部長を務めている原口は好戦的で、右側に立つ人間である。この点は小説の冒頭で「機動部隊」に「敵」を付け加える姿勢から読み取れる。この原口と木垣の直接的な交渉は第四章にある。すなわち、木垣がティルピッツと会ってから新聞社に戻って、御国と原口の喧嘩を見かけた翌朝である。この面会において、原口は木垣に二つの要件を伝えた。一つは外国語に堪能な木垣に、自分と一緒に警察保安隊に入することを勧誘したことである。もう一つは、「社用部長」の伝言で、木垣に新聞社の社員になる意志の有無を尋ねることである。この二件についてのやり取りで、二人の差異が浮かび上がってくる。

木垣は原口の、それでだ、それでだという粗笨な言葉遣いに親しみを感じた。しかしこういう親近感こそ最も危険なものであろう。

(略)

「読み書きはできても、ペラペラはだめですよ。それに僕は警察や軍隊は大嫌いで

す、折角ですがお断りします」(三四六頁)

原口の正直な告白に対して、木垣は「親しみを感じた」という。その理由とは、「それでだ」という言葉に人間の正直さを認めたからである。しかし、同時に木垣はこの親近感の裏に隠されている、警察隊への誘いという本当の目的に警戒心を持ち、原口に断りを入れたのである。拒絶した理由であるが、「僕は警察や軍隊は大嫌い」と言いながらも、「彼の申出を拒絶したのは、確然と説明可能な理由によるよりも、むしろ、ひょっとするとこの醜い吹出物のせいであったかもしれぬ」(三四六頁)とも述べている。つまり、木垣が原口を拒絶した理由は、立場の問題であるか好き嫌いの問題であるか、木垣自身でもはっきり分からないと考えられる。

しかし、自分の立場を確定できない木垣は、原口に対立する側にいる存在と見なされるようになる。「それに警察ちゅうもんは、君たち……同調者から見たら、いつでもファッショ見たいに見えるんだろ」(三四七頁)と言われ、「左」の人間というレッテルを貼り付けられた。

結局、木垣は「右」からの誘いを断ったが、その理由は確固とした立場を持っている故にはではない。しかし、にもかかわらず原口には「左」の人間として扱われた。原口から「同調者」と言われた時、木垣は「何か上下震のようなものに、分水嶺のあっち側へ放り出されたり、こっち側へ投げ出されたりする、揺れ動くものを足下を感じた」。(三四七頁)この木垣の反応には、未確定の自分が他人にレッテルを貼りつけられることに対するショックが見られる。この時点の木垣は依然として立場の選択ができていないが、この衝撃から彼の動揺が次第に激しくなっていたと察知できる。

4-7 木垣の認識 (二)

今まで出会った人間を顧みると、紛争に参加する新人であるハント、左側の御国、無国籍のティルピッツ、及び右側の原口である。これらの人々と訣別することを決めるのは、戦争や紛争に巻き込まれたくないからである。しかし、原口に左側の人間というレッテルを貼られた木垣は、この時点になると、自分の心の中で一つの問題を自らに投げかける。それが「ハントの言葉によれば『近代史にかつてないほどの人間惨劇』をひきおこしてもよいのかということにはならない。だがしかし、とそこにまた政治は厳しい楔を一本打込

む、果たしてこれは武器をとらずして解決できるていの問題であろうか」(三四九頁)ということである。戦争や動乱及び暴力革命を人間性のないものとして見ている木垣は、同時に平和を望んでいる自分や、人間性を追求している自分があり得るのかと疑っている。このような矛盾を抱えた自分を、彼は「不在者」と呼ぶ。

日に数十回も判断停止をして生きているということは、結局、何を考えるにしても結末はすべて判断停止で終わっているということである。これでは、たとえ胸中にどのような動揺動乱があろうとも、不在者も同然である。小説中の人物よりももっと虚構に近い。彼は何者か、胸中の動揺動乱である、彼は何をしているか、一九五〇年夏、二十世紀正午の分水嶺で判断の針を停止している。金属のような夏の光りの輝く丸の内の朝を、東京駅に向って歩いている木垣は、生きているのではない、しかも死んでもいない。(三四九頁)

「判断停止」、すなわち結論のないままに終わる。立場上の選択はこの時点においても、依然として完成していない。「たとえ胸中にどのような動揺動乱があろうとも、不在者も同然である」という言葉から、内面の動揺はあくまでも内面の世界の事柄であり、人間の行動に等しくないことを示している。したがって、木垣に現れているのは「胸中の動揺動乱」に過ぎず、現実世界では、木垣は「生きているのではない、しかも死んでもいない」。つまり、虚構であり続け、実在の人間あるいは特定の人間とならない。

しかし、その後、御国や張国寿と一緒に喫茶店にいる間に、この「判断停止」の状態は静かに変化していく。

4-8 木垣と張国寿—政治的浮浪者

中国国民党政府のジャーナリストである張国寿は中国内戦時に国民党に仕えたため、共産党の勝利によって成立した中華人民共和国から亡命する運命となり、妻や子供と別離せざるをえなくなる。この人物は既に第一章、第三章において、常に自分が監視されているという思いを抱き、妻と子供の写真を見つめる孤独な人間として登場していた。このように、政治活動によって家族と別れ、故国から亡命する張は、一種の政治的浮浪者だと考えられる。この張について、木垣は次のように考える。

(前略) ニュー・ヨークの国連へ行くことは、仕事としては張りのあることかもしれないが、それはしかし、彼の肉体にまで深く食い込んだ愛情から遠く離れてゆくことであった。距離ばかりではない、仕事と愛情のあいだに、はっきりと政治が割込んで来てこの二つを断ち切ってしまったのだ。彼が仕事の面で動けば動くほどこの距離は遠くなり、共産主義中国からも妻子からも、彼はついに失われた孤独の人になるかもしれない。(三五二～三五三頁)

ニュー・ヨークへ行って国連の記者を務めるのは、ジャーナリストとしての晴れ舞台へと通じる道で喜ぶべきことであるが、張国寿には嬉しそうな表情は見えず、木垣の考えにおいても、これはむしろ惨めなことである。台米の接近によって張は国際的中心機構に派遣されることになるが、中華人民共和国からは遠くなり、その土地で暮らす妻や子供とも離れることを意味する。このような国際政治は、仕事と愛情の間に割り込み、彼に家族と別離させ、「孤独の人」になる道へと導いていく。この観点から見る木垣は、張の赴任を喜んでいる御国と違って、張を政治に翻弄される「孤独の人間」に過ぎないと考える。そして、この人物に木垣は深く同情して、張の将来を次のように憂える。

張が国連でこの悪気流に酔わされているあいだに、台湾は、また上海にいるという彼の妻子はどうかなりはしないか。妻子と台湾と——この体格のいい中国人張国寿が、中国から失われた人になるとは考えられない……しかし中国本土の政治は、彼を反動反革命分子として——いや、いや、彼は——。(三五三頁)

国際情勢の中心地である国連に入ることによって、張は常に「そういう非生活的で、まったく非生産的な悪気流」(三五三頁)に包まれることになる。このような張に対して、木垣は張が「中国から失われた人」になってほしくないと言いながら、「中国本土の政治」がもう既に彼を「反動反革命分子」という立場に追いやったがために、「失われ」ていくしかないのではないかと憂慮している。木垣の心配から、張が必然的に辿るであろう結末が見えてくる。それは、中国、妻子、子供から離れていく「孤独の人間」になることである。このような惨めな結果に、木垣は「いや、いや、彼は——」と発して、中国人のイデオロギーを持つ張のために弁解しようとしているが、言葉は続かない。この終わらない嘆きには、

政治の残酷さが感じられる。

張国寿という、止むを得ず国際政治の波に流されていく「孤独の人間」に触発されたからこそ、木垣は人間性の必要性を深く感じたと考えられる。これは木垣の転換を促進する契機とも言えるだろう。

4-9 木垣の変化——「人間的」な小説の創作

張国寿の惨めな結末を推測して慨嘆する木垣は、自分の変化にも気付くことになる。

判断停止というよりも何よりも、木垣は、自分の思考乃至動揺の中心部に、ぽっかりと暗い穴、台風の眼のようなものがあって、さまざまな相反する判断が敵ちあって生まれる筈の思考の魚が、生まれかけるや否や途端にその穴、その眼の中へ吸い込まれてゆくように思われた。もしその穴、その台風の眼をそこだけ切りとって博物館に陳列するとしたら、それには、人間的、という符牒のような札がかけられるかもしれない。御国は立ち上がって張と握手をかわしていた。木垣はそれを眺めながら、自分をも含めたこの三人がつくっている三角形の中に、何か涼しいもの、時間のように流れ去ってゆくもの、変革され交替するなものか、を感じた。そこにもう一人、新しい第四の人が来ているような気がした。そして外へ出たとき、扉がひとつ、ぎい、とひらいたように思った。まばゆい夏の光りがさっと襲いかかり、彼の胸の暗室の、汚濁し停滞した空気を追いはらうようだった。そして彼は再び〈小説〉のことを考えた。筋や話をあてにせず、胸中の動揺動乱が導く筈のものをあとづけてみる。そういう小説を書いてみよう。彼にとって小説は、既に括弧の中から外に出ていた。(三五三頁)

前述したように、これまでの木垣にあったものは「胸中の動揺動乱」に過ぎなかった。しかし、この時点で、木垣の「思考乃至動揺の中心部に、ぽっかりと暗い穴、台風の眼のようなもの」があることを認識している。つまり、この「台風の眼」が彼の考えの中心である。「台風の眼」という言葉は、繰り返し現れているが、木垣は「それは人間にあっては魂と呼ばれるものではないか」(三四四頁)と意味付けている。ここでも、「台風の眼」に「人間的、という符牒のような札がかけられるかもしれない」と言い、「台風の眼」は「人間の魂」や「人間的」に等しいものであると示している。これは新たに現れたものである。こ

の「人間的」というものの存在が、木垣の胸に溜まっている「空気」を全て追い払うことが出来たという。また、「台風之眼」、すなわち「人間的」なものが木垣の思考の中心部に置かれることによって、木垣は「判断停止」の状態ではなくなる。

この時点で、木垣は再び〈小説〉を思い出す。〈小説〉が「動揺動乱」を導くものとして、一つの行動へと転化している。先述したが、木垣は立場についての考えと小説についての考えがあった。これまで、前者への躊躇に対して、後者についての思考は少しずつ進行していった。この場面では、〈小説〉は「既に括弧の中から外に出て」、行動不能だった木垣が踏み出した第一歩であると考えられる。さらに前の場面と重ね合わせて考察すれば、「台風を中心にある眼の虚無」を焦点にして描く〈小説〉とは、ある意味で「人間的」なものを求める行動として捉えることが可能であろう。

小説の創作を今後の行動の中心に据えようと決めた木垣は、第六章になると、以前ティルピッツから渡されたお金を焼却するという行動に出る。

マッチの棒は次第に短くなり、指先が熱くなって来た。そのまま二秒、三秒、脳の芯がじいんと熱くなり、木垣は眼を睜いたまま熱に耐えた、そうすることが何かの信をうるために必要である、とでもいうように。火が消えて指先がかすかに白くなり、焼けた部分の指紋が白く浮き出してみえた。(三五八頁)

日本から脱出するお金とコミットメントを償うお金であると同時に、国際情勢と緊密な関係を持った不潔なお金である。これを焼却することによって、木垣がティルピッツから離れることが示される。それと同時に、彼はこの行動によって国際政治に巻き込まれないようにするという意志を表明する。「コミットメント」の自覚者の木垣は積極的な発言をしない人間から、行動する人間へと転換した。

以上、木垣がハント、御国、ティルピッツ、原口、張国寿と出会う、あるいは別れる過程を述べた。様々な立場と姿勢を代表しているこの登場人物らは、木垣が立場の選択を迷う時期に考慮された四つの選択肢と見做すことができる。一つ目はハントの代表する朝鮮戦争に参加する人間になることである。二つ目は御国の代表する「左」の人間になることである。三つ目はティルピッツの代表する無国籍・無階級者、国際放浪者になること、そして四つ目は原口の代表する「右」の人間になることである。この四つの選択肢と出会う過程で、木垣の中で立場を選べない自己存在に対する認識も少しずつ見直されていく。こ

うした中で、第五の選択肢である小説の創作が生まれる。物語の終盤では、この「人間的」なものを求める小説を創作することが、一つの行動と化して、コミットメントの世界に生きる木垣の自己確立を達成させることとなった。

「人間的」なものというのが、木垣が探し続けたものだと考えられる。ハントとの分岐は戦争を見る視点で、木垣は歴史上の戦争の悲惨に注目し、戦争の再発を防止したいという気持ちが窺える。御国とは人間関係について異なる意見を持っており、組織の強固さに与する御国に反して、木垣は組織に入らないという意志が強いと考えられる。これは後に警察や自衛隊に誘う原口を断る理由と同様である。前述したティルピッツとの出会いから分かったように、木垣は、種族・民族・国家・階級などを超える人間の中の繋がりに共鳴するが、「動乱や革命の、非人間的な結果」を作り出すことには反対する。以上に挙げたことから、組織、戦争、歴史に対する木垣の態度が明確になる。すなわち、歴史上の戦争に基づき、「現在」の戦争を促進する組織への加入を拒絶する態度であり、人種・民族・国家・階級を越える人間社会を作るという意志である。これが木垣にとっての「人間的」なものではないか。それゆえ、彼は最後に人間の魂を表す小説の創作を自分の立場にすることを決めたのである。

こうして、小説の冒頭で世間のコミットメントに茫然としている木垣は、最後に「動乱や革命」に参加しない意志を表明しながら、小説の創作を一種の行動として自己確立を達成する。

本章は立場を持たない人間であった木垣が様々な立場にいる登場人物との接触と離別、及びその過程において自身に起こった変化を考察することによって、「広場の孤独」の全体構造を明らかにした。埴谷雄高は、「主人公はすべての他の事件や人物から知的な等距離にあり、それらの事件も登場人物も過不足なく整合的にまとまりかっちりと均齊的な構造をもっている点で、この作品は作者の出世作たるに適わしい」²⁴と述べ、「広場の孤独」の均齊的な構造を高く評価した。埴谷は「広場の孤独」の全体構造に触れた唯一の評者であるが、彼の言う「均齊的な構造」には、木垣が除外されているのではないか。もし木垣の道を選択していくという過程を見れば、この小説の重心は木垣に置きながら、それ以外の人物を均齊的に描いていると言う方が妥当であろう。木垣の変化は人間の内面心理に焦点を当てて描かれ、各登場人物の観察方法及び木垣の周りの状況は、「現実」という外部世界に即

²⁴ 埴谷雄高「解説」（『堀田善衛集』、筑摩書房、一九七四・九、四二〇頁）。

して描かれたものである。

もし「広場の孤独」を、外部状況と内面心理という両面の統合として考えるならば、先行研究において、この作品が「占領文学」あるいは知識人の苦悶を表す作品として位置づけられたことは理解できないわけではない。「占領文学」や「国際政治小説」²⁵として捉えるのは、現実に即して描かれた外部状況の描写に注目しているためであろう。また、逆に、「知識人の苦悶」や「人間の無力感」²⁶として読まれるのは、主に木垣の内面世界を中心にしているからではないか。したがって、この両方の読みとも時代という制約から離れられておらず、どちらか片方に傾いて、外在と内在が融合している小説の全体構造を見落としていると言える。

したがって、本章は木垣と主な登場人物との関係を全体的に示した上で、木垣の内面に起こる認識の変化をめぐってテキストの分析をした。この観点から物語を読むと、「広場の孤独」はまさに一人の人間が複雑な社会状況の下で様々な試行錯誤を体験した後、「戦乱や革命」に参加しない意志を表明して「人間的」な小説の創作に身を投ずる物語である。すべての組織に参加せず、小説の創作によって生きる、このような木垣の人物像には、上海で形成された、国家・組織を抜け出して一個の人間として生きるという堀田の認識が投影しているのではないか。また、木垣の求める「人間的」なものが人種・民族・国家を超える人間の繋がりであるということは、「反省と希望」において武力を否定して「人性の問題」を提唱した堀田が、この観点を小説化した証拠ではないか。このように、組織に参加しない木垣と戦争・革命に参加しない木垣の決意を通して、堀田は自身の戦争へ抗する意志を「広場の孤独」に書き込んだと考えられる。

²⁵ 本多秋五『本多秋五全集』第七巻（葎柿堂、一九九五・八、五三九頁）を参照した。

²⁶ 佐々木基一『戦後の作家と作品』（未来社、一九六七・六、一三〇頁）を参照した。

表二 (一九四七・二～一九四八・九)

年代	題目	掲載誌名
詩 篇		
一九四七年五月	瀉の風景	『個性』
一九四七年九月	朝	『歷程』
一九四七年十二月	断章	『日本未来派』
一九四八年三月	しづかに雪か 暗い夜道で 戦争 野辺 風(「戦中詩抄」に収められ) 夕照から 無題 哀歌(「哀歌」 は「戦後詩抄」に収められ) 今 日 白鳥、初出は「詩十篇」とし て	『批評』
一九四八年五月	序の歌	『晩夏』
一九四八年七月	ジェスフィールド公園にて	『歷程』
一九四八年十二月	天の誘ひ	『歷程』
随 想		
一九四七年六月	上海で考えたこと	『中国文化』
一九四七年九月	暗い暗い地下工作	『随筆中国』
評 論		
一九四八年七月	ボオドレエル覚書	『歷程』
翻 訳		
一九四八年八月	『追憶の哲理』	大地書房

表三 (一九四八・一〇～一九四九・一二)

年代	題目	初出誌名
詩 篇		
一九四九年一〇月	暗黒の詠唱と合唱	『個性』
一九四九年一二月	沈黙	『三田文学』
小 説		

一九四八年一二月	「波の下」	『個性』
一九四九年五、六月	共犯者	『個性』
一九四九年五月	国なき人々	『世界の動き』
評 論		
一九四九年一〇月号	音楽について—ハイドン	『批評』

表四 (一九五〇)

年代	題目	初出誌名
詩 篇		
一九五〇年二月	Nel mezzo della nostra vita	『近代文学』
一九五〇年四月	海景	『三田文学』
一九五〇年八月	現代史	『近代文学』
一九五〇年十一月	庭	『歷程』
小 説		
一九五〇年五月	彷徨える猶太人	『人間』
一九五〇年五月	祖国喪失	『群像』
一九五〇年一月	被革命者	『改造文芸』
一九五〇年十二月	十二月八日	『婦人画報』
一九五〇年十二月	搜索	『新潮』
一九五〇年六月二〇— 二一日	共犯者	『東京日日新聞』
評 論		
一九五〇年九月号	グレアム・グリーンの恐怖者	『雄鶏通信』
翻 訳		
一九五〇	『モーパッサン詩集』	酣燈社

表五（一九五一）

年代	題目	初出誌名
詩 篇		
一九五一年四月	冷いなぎさ	『歷程』
小 説		
一九五一年二月	夜来香	『文学界』
一九五一年五月	齒車	『文学 51』
一九五一年九月	漢奸	『文学界』
一九五一年八月	物いわぬ人	『近代文学』
翻 訳		
一九五一年	『白昼の悪魔』	草川書房
文芸評論		
一九五一年一月	アンドレ・マルロオ『人間の条件』	『近代文学』
一九五一年十月	グレアム・グリーン『密使』	早川書房版『密使』
一九五一年十月三 〇日	現代の帰結	『三田新聞』
時事評論		
一九五一年九月	国際情勢	『文学 51』

第四章 歴史認識への意志（二）

—「祖国喪失」の「共犯」と「広場の孤独」の「コミットメント」を通して—

第一節 本章の問題意識と方法

第三章は「広場の孤独」の人物関係に注目して、いわゆる組織に参加しない木垣という人物像に、一個の独立した人間として生きるという堀田の認識が投影されていると論じた。本章では引き続き、堀田が戦後になって自分の認識や意志を、如何に小説を通じて表現したか、という問題を追究したい。ゆえに、堀田が日本に引き揚げた後に書かれた代表作¹「祖国喪失」²と「広場の孤独」³を取り上げ、その二作のキーワードである「共犯」と「コミットメント」に焦点を当てて分析することによって、創作の出発点に立つ作家が、戦争や歴史に対する認識と、その認識を如何に文学によって表現するのか、また自分の文学に託した作家の意志を具体的に解明しようと考えている。

「祖国喪失」と「広場の孤独」の共通するテーマについては、様々な論考がある。日沼倫太郎は、「政治と人間の相創を描こうとしている」⁴と述べ、具体的に「政治」を堀田文

¹ 「祖国喪失」と「広場の孤独」を取り上げる。「敗戦」前後の上海を舞台にした長編連作「祖国喪失」は、堀田善衛が一九四七年に引揚げてから書いた最初の小説である。一方、冷戦勃発下の日本を背景にした「広場の孤独」は、一九五一年第二十六回芥川文学賞の受賞作である。この二作は堀田善衛初期の代表作として考えられる。

² 単行本「祖国喪失」は六つの短編、すなわち「波の下」（一九四八・一二）、「共犯者」（一九四九・五、六）、「暗峽」（一九五〇・五）、「彷徨える猶太人」（一九五〇・五）、「祖国喪失」（一九五〇・五）、「被革命者」（一九五〇・一）からなる。

³ 「広場の孤独」は最初の三節が『人間』（一九五一・八）に発表されたが、同誌の廃刊により『中央公論・文芸特集』（一九五一・九）に改めて全文が掲載された。だが、『中央公論』に載せられた際に、『人間』に掲載された部分が大幅に修正された。

⁴ 日沼倫太郎は次のように述べている。「この作品（「広場の孤独」——筆者注）にかぎらず、彼の文学の主要なテーマとなっているものは、きわめて抽象的であると同時に、きわめて現実的であるところの政治そのものだ。たとえば、『波の下』から『被革命者』までも

学のテーマとして打ち出している。「広場の孤独」の新潮文庫版が出た際に、佐々木基一はその解説において、堀田の文学を形成するものが上海で得られたものであり、それを「現代政治の生み出す非人間的メカニズムと、そこにおいて人間が主体的に生き得る方法の探求というテーマ」⁵に要約した。村杉昭は「堀田の作品群の系列を一応正しておく必要がある」⁶とし、堀田作品を三つに分類⁷する。さらに、この三つに分類された作品群の相互の関連について、「『祖国喪失』『歯車』という第一の系列の作品において、政治というメカニズム対人間の存在を、一九五〇年の、朝鮮動乱の影響下に据え直したのが『広場の孤独』である」⁸と付け加えている。

以上の定説⁹となっている論評を見る限り、三氏とも、堀田文学のテーマに関して、「政治」と「人間」の関係、すなわち政治というメカニズムに人間の主体性が奪われるという関係に重点を置いているのが明らかであろう。これを踏まえて、本章では、堀田の作品は

一連の作品では戦後の上海を舞台に、杉という日本人の主人公に照明をあてることによって政治と人間の相創を描こうとしているし、また、『歯車』では、人間を、否応なく、巨大な歯車にまきこんでゆく政治の暗い圧力が描きだされている。」（『乱世の文学——堀田善衛』、『文藝首都』、一九五三・五、五頁）。

⁵ 前掲、羽山英作「堀田善衛論——体験について——」（『新日本文学』、一九六一・七、一一七～一一八頁）を参照した。

⁶ 村杉昭「位置選択への決意——堀田善衛ノート」（『文藝首都』、一九五六・四、七五頁）。

⁷ 村杉氏が唱える三分類とは、以下である。第一は、「被革命者」「祖国喪失」など上海体験を主軸として出来上っている作品群である。第二は、「広場の孤独」のような、現代日本の、それぞれの社会的位相における日常的現実を主軸としたものである。第三は、「時間」「夜の森」「記念碑」「奇妙な青春」の系列が示す日本の、歴史的現代への探求である。（前掲、村杉昭「位置選択への決意——堀田善衛ノート」、七五—七六頁）。

⁸ 前掲、村杉昭「位置選択への決意——堀田善衛ノート」（七六頁）。

⁹ 『新版日本文学史7 近代Ⅱ』（久松潜一編、至文堂、一九七三）では、堀田について以下のように述べている。「敗戦を上海で迎え、おくれて、『広場の孤独』で芥川賞を受け、戦後文学の一角に座を占めた。朝鮮戦争前後の緊迫した国際関係を背景に、左右勢力の激突する現代政治の非常なメカニズムにまきこまれて、自己主体性を喪失する知識人の孤独と苦悩を描いた小説である。」（一〇五七頁）。

政治が人間の主体性を奪ったことに焦点を当てているか否かという問題について、「祖国喪失」と「広場の孤独」の読解を通して再検討してみたい。

本章ではまず、「祖国喪失」と「広場の孤独」の人物造型の構造を分析し、「共犯」や「コミットメント」を通して、登場人物の特徴を確認する。次に、両作品の共通点から、新たに政治や人間及び戦争責任などに対する堀田の認識を見出す。最後に、人物の設定に託された堀田の文学手法及び意図を明らかにしたい。このように堀田の歴史認識と文学手法を検討することによって、戦争を追究する主題と伝統的な小説を変革する堀田の試みを、一側面から提示したい。

第二節 「祖国喪失」の再解釈

単行本「祖国喪失」（一九五二年）が発行された際に、那須国男は「堀田善衛は上海と云ふ地域そのもののメカニズムから、次々に歯車の因子を掴み出してゆく」¹⁰といい、登場人物を全部「歯車の因子」に喩えながら、作品の構造がその因子を掴みだす過程として見なおす。主人公杉はその因子を抉りだす媒介でありながら、最後に「自己の音調を求めてやたらにキィを乱打する孤独な魂に映る無定形の人間の動きから、歯車にはめ込まれることに依って意味らしいものをもつ人物の配置に変わってゆくやうである」¹¹と那須国男は指摘する。那須の指摘は杉を含める登場人物を、錯雑な政治空間である上海という歯車の因子にしていることが明らかである。彼の着目点は前述した政治というメカニズムに対する主体性を喪失した人間という対峙関係にあることは言うまでもない。しかし、登場人物の設定に注目してみれば、この対立の構造は解体する。本章の第二、三節は人物の設定から「祖国喪失」の構造を明瞭にする。本節では主人公杉を中心にしてこの小説のテーマを再検討してみる。

「祖国喪失」は「敗戦」前後の上海を舞台にして、主人公杉が無国籍者の中に潜り込む以前と無国籍者の中に潜り込んだ後の二部構成になっていると言える。以下、杉の自己存在に焦点を当て、無国籍者の中に潜る以前と以後を比較してみよう。

¹⁰那須国男「堀田善衛著『祖国喪失』」（『近代文学』、一九五二・九、六七頁）。

¹¹ 前掲、「堀田善衛著『祖国喪失』」。

今、戦争中、世間には目的だらけの時に、さしたる目的もなく、上海という無定型の町に突然降り立ち、そして公子も心の支柱たる赤ん坊を海に残して来て中国人と露西亜難民のなかにひとり住み、と杉は考える。しかも一見生命の起源を限られたような戦争の末期にあつて――これはひょっとすると、二人ともこの世の計算外のことだと思つてしめしあわせているのではないか。戦争という万能の口実、或はこのエキゾチックな絵にも似た見事な詐術に自分からひっかかることによって、何か重いものから逃避しているのではないか。その重いものとは一体何であろう。(中略)それは、はっきり云えば、上海に着陸した瞬間に、閃光に撃たれるような風を感じたもの、即ちこの戦争は内地で云々されているような性質のものではない、という一事であつた。そして他人事ではなく、己れの負い目としてのこの問題だけは、戦争という生命期限とは別に生き、時間とともに成長してゆくであろうことを感得した。そしてこうした問題とも云うべきものが、自分の行為自体から生じて来、それがはっきり見え出すことについて、住み慣れた場所や習慣、よく知り合つた人々から離れるということが如何に大きいことであるかが痛切に感じられるのである。¹² (傍線部は筆者による)

文中の公子は上海の「土着派」¹³で、高級軍属である。「上海の子」として育つた日本人公子は、日本人の冷たさを認識し、日本人の集団と関係を切り、仏租界に住んでいる。彼女は「敗戦」で負傷した夫が戻るまで、杉と一緒に行動する。注目したいのは、杉が日本人の集団から離れる動機である。杉は戦争中に「目的もない」人間であり、心の底にある一つの「重いもの」から逃避したいという驕りがある。彼はおそらく上海に来て、この戦争の実質を見破つたからこそ、前に意識しなかつた重さを感じたのであろう。したがつて、「戦争という生命期限とは別に生き、時間とともに成長してゆくであろうことを感得した」と考えるに至つたのである。ここから、「犯罪・戦争・重圧の主体としての国家の意識から

¹² 堀田善衛「波の下」(『祖国喪失』、文芸春秋社、一九五二・五、引用は『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九七四、六六頁に拠る)。

¹³ 「土着派」とは一九二三年に長崎―上海間の定期通航が開通してから上海へ赴いた日本人とその家族であり、虹口の南部に長年住んでいる。(NHK取材『魔都上海十万人の日本人』、角川書店、一九九五・五を参照した)。

自由になることによって、孤独のうちに純粋な生の在り方を試してみたい¹⁴という杉の姿勢が浮かび上がってくる。

杉は無国籍者の中に二回潜伏した。一回目は公子との「恋愛を完成するために」、「日本の手から逃げ出さなければならぬ」¹⁵ことで、ユダヤ人のゲルハルトの商売を手伝った時である。二回目は、戦争が終結してから、「人間になるために」¹⁶、杉が国民党の「留用」バッジを捨て、一人で白系ロシア人モロゾフの店でピアニストとして働いた時である。

しかし、無国籍者の生活の実態は杉の期待したものとは異なるものであった。ゲルハルトにしてもモロゾフにしても、「暴虐世にみつればなり」と言いながらその暴虐の手伝いをしているのである¹⁷。最後に、杉は自分の潜伏生活を回顧して慨嘆する。

こういう動乱の時には、波の下に潜り或は落ち込んでしまって自分の悩みが何であるかを見詰め出すと、行為というものがまるで全部犯罪的なものに見え出し、実際犯罪的な行為しか自分でも出来なくなってくる。よく知っていた筈のものが一番疑わしくなって、その結果、家庭生活どころか、自分自身にも他人にも本当にはめぐり合えなくなり、生きていることが一つの与えられた謎みたいに思え、しかもこの謎、秘密を自分が支えて立っているのか社会が支えていてくれるのか、これも境界がわからなくなる。¹⁸

日本人から離れて自分の行為を見出そうと考えていた杉は、無国籍者との生活を体験した

¹⁴山本健吉「創作月評」（『東京日日新聞』、一九五〇・五・一）。

¹⁵堀田善衛「暗峽」（『祖国喪失』、文芸春秋社、一九五二・五、引用は『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九七四、一一九頁に拠る）。

¹⁶堀田善衛「被革命者」（『祖国喪失』、文芸春秋社、一九五二・五、引用は『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九七四、一七一頁に拠る）。

¹⁷堀田善衛「彷徨える猶太人」（『祖国喪失』、文芸春秋社、一九五二・五、引用は『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九七四、一三六頁に拠る）。

¹⁸堀田善衛「被革命者」（『祖国喪失』、文芸春秋社、一九五二・五、引用は『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九七四、一九二頁に拠る）。

後に、「行為というものがまるで全部犯罪的なものに見え出し」てきていることを認識した。この一文は、「純粋な生の在り方」を求めるが出来なかったことを示唆する。後述するが、無国籍者の中に入る前に自分が「共犯者」だと意識した杉は、最終的にもその「犯罪的な」ものから脱出できない。この点に基づいて言うと、「祖国喪失」の杉は、那須国男の指摘した歯車の因子となるより、むしろ戦時中の「犯罪的な」生活から脱出しようと思っても出来ない人間だと捉えられる。ゆえに、「祖国喪失」という作品では、政治と人間の対抗関係に重心が置かれていることより、戦時中に人間の生き方を求めようと思っても叶わないことを強調されていると考えられる。

第三節 「祖国喪失」——「共犯者」対その自覚者という構造とその特徴

本節では「祖国喪失」における人物造形の構造と特徴について示してみよう。「共犯者」において、杉は自分がその状況で既に罪を犯したことを意識し、「杉とは何者か、共犯者にすぎぬ」¹⁹と自覚する。

己に血仇を以て酬いるものは実にいくつあるか知れぬと思うのだ。公子の夫の辰野もそうであろう。そして「学生周刊」をやっていることが暗々に重慶や延安に情報を提供しているにひとしかったら日本憲兵隊は……また日本降伏の時に重慶政府がこの雑誌を学生毒化作用を果たしたものと認定したならば……また彼は近頃よく見る夢、野原に転っていた戦死者がむくむくと起上って来て彼をとりまく夢まで思い出した。罪悪——生きていて何をすにしてもそこに漠然とした罪悪感がつきまるとして離れないのだ。²⁰

杉は自分の罪を整理している。「公」的には、雑誌の編集相談役として、日本憲兵隊からも重慶政府にからも罪を問われる可能性がある。また、彼は日本の戦争に役割のない人間と

¹⁹堀田善衛「共犯者」、(『祖国喪失』、文芸春秋社、一九五二・五、引用は『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九七四、八八頁に拠る)。

²⁰前掲、「共犯者」。

して、「戦死者」に対して罪悪感を持っている。そのほか、「私」的には、公子との不倫があるため、彼女の夫である辰野に「恨み」を抱かれかねない。種々の「罪」を既に犯してしまっていると考える杉は、「生きていて何をするにしてもそこに漠然とした罪悪感がつきまどって離れないのだ」と認識した。それと同時に、杉は周りの人々を全て「共犯者」と呼ぶ。

(略)しかしここ上海ではどうだろう。朱、倪、立花、ゲルハルト、酒場アンフェル・アンテルナショナルのポルトガル、ロシア、ギリシャ、イタリーなどの連中、混血の加藤、みな本当には何を考えているものか得態も知れず、それにすべては戦争という歴史の真犯人を軸として触れ合っている共犯者の群れである、と云えよう。²¹

杉は、上海にいる自分の周辺の人々をも「共犯者」というカテゴリーに入れる。中国人の朱、倪などの革命運動に従事する人ばかりではなく、立花など戦争の協力者として行動する日本人、直接参戦しない白系ロシア人、ユダヤ人、第三国の人々も含め、すべての人々が「戦争という歴史の真犯人」に依存している「共犯者」だという。すなわち、「祖国喪失」における人物は、全く「罪」の意識を持たない人物と、「罪」を自覚した杉に分けることができる。ここにあるのは、自覚なき「共犯者」と自覚ある「共犯者」である。

次に、「共犯者」の全体的な特徴について分析してみる。表六は各登場人物が如何に「共犯」するかを説明するため、その人物の所属、従事する活動、「共犯」する態度、迎える結末という四つの側面から呈している。

表六 「祖国喪失」における「共犯者」

人物名	所属	共犯活動	態度	結末
杉 共犯の自覚者	日本軍→脱出→国 民党→逃走	『学生周刊』の相談役、闇商売の手伝い、国民党に「留用」、公子との不倫	消極的	日本に送還される
公子	高級軍属	杉との不倫	消極的	夫の元に戻る
朱剣英	『学生周刊』 共産党	抗日活動、反国民党活動	積極的	国民党に逮捕される

²¹前掲、「共犯者」(九五頁)。

王効中	『学生周刊』 国民党	抗日活動、反共活動	積極的	仲間と反目する
張光宇	『学生周刊』 国民党	抗日活動、反共活動	積極的	仲間と反目する
立花	日本軍大尉	日本の戦争行為に加担	消極的	戦犯とされる
宮下	日本新聞社顧問	日本の戦争行為に加担	消極的	仲間を裏切る
ゲルハルト	ユダヤ人	情報売り、ブローカー業務など	積極的	銃撃され、モロゾフと 対立、放浪生活を続け る
モロゾフ	白系ロシア人	バーの経営、情報売り、密告	積極的	ゲルハルトと対立、放 浪生活を続ける
ポルトガル人 等第三国の人	日本特務機関	イワーノヴナのバーの剥奪、闇商売	積極的	不明
イワーノヴナ	白系ロシア人	淫売、情報交換の場所である「国際地 獄」の経営	消極的	自殺する
ズレイカ アリョーシャ	白系ロシア人	イワーノヴナの子供、淫売、スリ	消極的	放浪する

表六から分かるように、全ての人間が何らかの意味で罪を犯している。また、登場人物の「共犯」について、三好淳史は次のように分析している。「彼らは、『お上』と『日本国民』その他一切を含めた総体としての『日本』が罪を犯し、滅亡したのだ、と考えたのであり、また、彼らの経験は、『日本』の罪悪と決して無縁ではないのだ、と判断したのである」²²という。三好氏は「犯罪」の主体を、「日本国民」と「お上」を含める共同体と想定して、その中にいる個人は共犯者だとする。

全体的な犯罪に対し、その共同体に属する個人は共犯者であることは否めない。これは杉が反省する箇所と重なるとも言える。しかし、国家のためという大義的な立場に立つ共犯ばかりに拘るのではなく、戦時下の人間は日常生活の行動でも一種の「共犯」となりえることが、登場人物の共犯活動から見られる。中国人が重慶と延安に属して抗日活動をす

²² 三好淳史「堀田善衛の戦後」（『日本文学』、一九九三・六、四七―四八頁）。

ることと、後に国共内戦でお互いに拮抗することは「共犯」である。無国籍者が情報売りなど闇の商売に手を染めること、淫売となることなども、同じく「共犯」である。日本人の立花や宮下が戦争を嫌いながら協力することになるのも、「共犯」である。この「共犯」は罪を犯している「日本」に協力していることを指しているだけではなく、戦争に直接あるいは間接的に依存していることを暗示していると考えられる。つまり、戦争が存在する限り、人間はその「共犯者」であることを意味する。最後に「現にこうして生きていることが、それだけでも罪だか罰だかになってしまって……それじゃ、何が何だか」²³という呪の問いも、同様に人間の生がすべて「罪」だと訴えている。戦争の乱世における人間の「生」自体が罪悪であると、「共犯」の普遍性を強調している。

このように、「共犯」の普遍性が、「祖国喪失」の登場人物の際立った特徴だと言える。もう一つの特徴とは、受動的に戦争の被害者となった彼らが、もう一方で能動的に戦争を助長する役割を果していることである。ユダヤ人のゲルハルトは、その典型として挙げられる。ゲルハルトは、戦争中にドイツのユダヤ人収容所に囚われていたが、逃げ出した後、無国籍、無階級の間人として浮浪する。大橋毅彦の言葉を借りれば、彼は「自分が帰属するところを持たず、その生の根が徹底的に断たれている」²⁴人間である。一方、戦争の被害で浮浪者となったゲルハルトは、「 коммуニストのゼネストの手伝い」²⁵をしたり、「ナチのテロリストと一緒に米国の石油タンクと領事館に爆弾を投げ」²⁶たりして、逆に戦争の火つけ役を演じる。これゆえ、ゲルハルトをはじめとする「祖国喪失」の登場人物には、堀田が意識的に戦争の被害性と加害性を反映させていると言えよう。

以上の通り、戦時下に人間らしい生活を求める杉の失敗を描く「祖国喪失」では、自覚なき「共犯者」対その「自覚者」という構造を通して、戦争中に生きる人間のそれぞれの形態が再現されている。その時代の人間は、戦争の被害者でありながら加害者であり、「罪」から脱け出せない存在である。興味深いのは、堀田が「祖国喪失」に設定した構造と特徴は、直後に発表した「広場の孤独」にも応用されていることである。

²³ 前掲、「被革命者」(一九二頁)。

²⁴ 大橋毅彦「〈マラーネ〉ゲルハルトの赤い舌——堀田善衛「祖国喪失」からの問いかけ——」(「国文学研究」第一五一集、五三頁)。

²⁵ 前掲、「彷徨える猶太人」(一二五頁)。

²⁶ 前掲、「彷徨える猶太人」(一二五頁)。

第四節 「広場の孤独」の「コミット」の意味の再構成

「広場の孤独」は既に第三章で詳細に論じた。「コミットメント」の溢れる世間で迷う木垣が、「左」や「右」及び無国籍者など様々な立場に立つ人々と接触し、また離れていき、最終的に第五の道、すなわち「人間的」なものを求める小説の創作を選ぶという道筋から判断すれば、この作品は、明らかに「祖国喪失」のテーマを継承し、如何に一個の人間として生きるかを描写していると言える。本節は、堀田が如何にキーワードである「コミット」の意味を作り直しているかという問題に注目する。

「広場の孤独」のキーワードが「コミット」であるということは、小説の冒頭から明瞭にあらわれている。まず読者の目を引くのは、エピグラフの“Commit”（以下、引用符と括弧を省略、全て特定の意味を指す）の注釈であろう。

Commit [A] (罪・過) などを行う、犯す……[B]託する、委す、言質を与える、危うくする、危殆に陥らしめる……[C]累を及ぼす……That will commit us.それでは我々が危うくなる……

(研究社・新英和大辞典・第十版より)

作品の文章上で“Commit”の意味を解釈しているだけでなく、その典拠まで公開している。一見、この定義は辞書からの引用だと思われるが、『新英和大辞典』の“Commit”の定義と比較すると、実際は堀田が意識的に省略していることが明らかになる。これと対照するため、『新英和大辞典』²⁷に載っている“Commit”の意味を示す。

Commit [A]【全角なので上と異なる】(罪・過などを)行ふ、為す、遂げる、犯す。罪を犯す。自殺を遂げる。

²⁷ 研究社より出版された『新英和大辞典』とは昭和十一年三月一日に岡倉由三郎が主幹として編集した・出版されたものを指す。この版は後に改訂増補されたが、“Commit”についての解釈は、増補版と初版には差異はない。

- [B] 1) 託する, 委託する ; (議案などを) 委員に附託にする ;
 2) (記録・記憶・忘却・火・地などに) 委する, 附する ;
 3) (法) (a) 審問に附する ; (b) (拘留に) 附する, (獄に送る), 投ずる ;
 4) 言質を与へる ;
 5) (名声などを) 危うくする, 危殆に陥らしめる, (…に) 累を及ぼす. 官吏 (裁判官等) 侮辱の廉で収監する。
- [C] 1) …に身を委ねる (任す) ; 2) 言質を取られる. 記憶に留める, 暗記する. 忘却を附する, 忘れて了ふ. 書き留める. 埋葬する. 焼却する. …に委託する, 引渡す. それでは我々が危くなる.²⁸

傍線部は堀田が引用した部分である。これにより、彼は意識的に語意を選択・調整して、“Commit”の意味を再構成していることがわかる。典拠と同様に作品にもまたAとBとCと三項目を立てているが、その意味は大幅に縮小されている。Aでは、主に「罪・過」を犯すという方面に集中して、「自殺を遂げる」などの意味を省略している。Bの方は、第3項目は全部捨象し、1、2、4、5を取り入れているが、括弧中で加えられているような単語が使用される際の場面等についての具体的な説明事項、例えば「(記録・記憶・忘却・火・地などに)」が全部削除されているため、「託する」、「委す」の多様性が無くなると同時に、読者の想像にゆだねられる部分が大きくなっている。小説中のCの方は、辞書中におけるB項目の「累を及ぼす」とC項目の例文「That will commit us.それでは我々が危くなる」とを組み合わせている。「累を及ぼす」のみなら、自己から他者へ、他者から自己へという二つの方向の行為を示し得るが、例文との組み合わせによって他者から自己へという一方的な行為を指す部分が大きく突出した印象を持つ言葉に変換されてしまう。

山根献は「その語彙のもつ本来の語義が、そこに表意される意味以外の、つまり表意されていない非表意の部分を多く含んでいるということの表れでもある」²⁹と考えているが、筆者は、むしろ堀田がこの操作によって、Commitが元来持つ意味を縮小したのと同時に、

²⁸ 読みやすくするため、原文の形式を変動した。(岡倉祐三郎『新英和大辞典』、研究社、一九三六・四・二十日、第八版、三三三頁)。

²⁹ 山根献「『国家と革命』の世紀と堀田善衛」(『堀田善衛——その文学と思想』、同時代社、二〇〇一年、一五七頁)。

目的語に「罪」と「過」のみが残るように、その意味に大きな変更をもたらしたと、山根 献と逆の方向から捉える。再構成したこの言葉は主に三つの面に焦点を絞って強調している。第一、「罪・過」を犯すことである。第二、頼る、任すこと、また危なくなることである。第三、他者から累が及ぶこと、危ない境地に陥ることである。堀田が改めて組み合わせた Commit の意味を見ると、第一は能動的に罪・過を犯すことを指す。第二は、無意識的か、判断基準のなさかによるもので危ない境地に陥ることを暗示している。第三は他者からの被害を受けるという、受動的に危険に陥る点を強調している。つまり、Commit という言葉に、能動性と受動性、及び判断力の欠乏性を内包させたと考えられる。

このように、堀田は「コミット」や「コミットメント」に独自の意味を与え、三方面から「コミット」を解釈する。すなわち、第一、「罪・過」を犯すことである。第二、頼る、任すことである。第三、他者から累が及ぶことである。さらにこの言葉を小説に取り入れることによって、この言葉は作品全体を貫き、その意味も広がっていく。この中では、まさに山根氏の指摘しているように、「言語を媒介に、意識が行動化する」という意欲的な方法意識が横たわっていると判断できる。次は堀田がこの言葉を用いて、如何に人物造型の構造を作り出すか考察してみる。

第五節 「広場の孤独」——「コミット」する人対その自覚者という構造

小説の冒頭では、“Commit”が主人公木垣を通して、小説の本文に導かれていく。木垣が勤める新聞社では、北鮮軍の前に「敵」を付け加えるか否かについて小さな論争が起こり、その論争を契機として木垣は自分と周囲の状況を認識していく。

訳しながら、ふと彼は電文中の Commitment という言葉にぶつかって鉛筆を置いた。

(中略) Commit——罪・過ナドヲ行ウ、為ス、犯ス、・・・ニ身ヲ任セル、危クスル、言質ヲラレル、引き渡ス——翻訳機械のようになった頭は、この言葉にあてはまるべき訳語を次から次へと自動的に引きだしていったが、その自動作用が漸時弱まってくると、彼は、いまこんな仕事をしていること自体、それは既に何かの Commitment をしてしまったことになるのではないか、という、背筋に或る冷たいものの流れるよ

うな反省が湧き起こってきた。³⁰

北朝鮮共産軍の前に「敵」を加えるか否かという議論があつてから、もう一度 Commitment の意味を吟味すると、彼は今従事している仕事自体が一種のコミットメントとなっていると認識し始める。ここで、木垣が commit の自覚者として登場することは注目に値する。その後、埴谷の指摘したように、この主人公の観察を通し周りのコミットメントについて考察していく。³¹

たとえば、共産党弾圧の報道が発表された際に、新聞社の渉外部副部長の原口が時局解説を書いている場面をみて、「何も雑誌ばかりではない、木垣自身が朝からつづけさまに訳しつづけて来た新聞記事すらが、無署名なるが故になお一層動かし難い真実として人々の眼にうつるのではないか」³²と考へ、これは一種のコミットメントであることを認定する。また、この新聞社に勤める名も知らぬ人々が戦争や紛争のニュースに興奮しているのを強く感じた木垣は、「既にこの人たちは一步踏み出し、不吉なメロディに乗ってしまっているのではないか」³³と、この人々が「コミット」していると述懐する。このように、新聞社や原口、また名前も知らない人々の群れが戦争や紛争のために動き、「コミット」しているのではないかと木垣は判断する。さらに、「既に日本は<コミット>している」と木垣は断言する。³⁴

このように、木垣はコミットメントの自覚者として、周囲の人間や新聞社及び日本を見回して、人間の個体から人間の集合体、国家全体に至って「コミット」していると考えている。このような「コミット」する人対その「自覚者」という構造は、「祖国喪失」の「共犯者」対その「自覚者」を継承していると言えよう。

³⁰堀田善衛「広場の孤独」（中央公論社、一九五一・一一、引用は『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九九三、二九七頁に拠る）。

³¹前掲、埴谷雄高「解説」（『堀田善衛集』、筑摩書房、一九七七・九・二〇、四二〇頁）。

³²前掲、「広場の孤独」（二九八～二九九頁）。

³³前掲、「広場の孤独」（三〇七頁）。

³⁴前掲、「広場の孤独」（三二四頁）。

第六節 「コミット」する人間の特徴

前述したが、「祖国喪失」の各登場人物は戦争の被害者であると同時に加害者であり、戦争の「共犯」から逃れられない存在である。本節はそれぞれの人物の「コミットメント」、及び人物が直接的に参与する戦争や事件を示しながら、「広場の孤独」の登場人物の特徴を明らかにし、「祖国喪失」の登場人物の特徴と対比してみたい。

表七は登場人物、人物が参与する戦争や件、人物の行動、迎えた結末を設け、登場人物が如何なる事件や戦争に参与し、その行動によってもたらした結末を提示している。

表七 「広場の孤独」の登場人物と事件との関わり

登場人物	第二次大戦	朝鮮戦争	The Red purge	インドシナ戦争	commitment	登場人物の結末
木垣	○	×	×	×	戦争への協力、妻子の遺棄	罪意識、私生児
京子	○	×	×	×	無意識に情報を漏らしてしまい、三重スパイとなってしまう	無職、私生児
土井	○	×	×	×	日本憲兵隊の通訳	アメリカ国籍の喪失
曾根田	○	×	○	×	二次大戦とレッドパージへの協力	△
原口	△	×	○	×	クーデターに対する鎮圧	△
御国	△	×	○	×	クーデターの発動	追放
立川	△	×	○	×	クーデターをの発動	追放
ハント	×	○	×	○	朝鮮戦争とインドシナ戦争の擁護	家族離散
張国寿	○	△	×	○	国共内戦への参与、戦争報道	追放、家族離散

(○肯定；×否定；△不明)

表七にまとめられている各人物のコミットメントから、彼らの「コミットメント」とは、仕事や日常生活の中で意識的／無意識的に立場を選び、戦争や紛争へと参与する／参与さ

せられるという意味であることが分かる。この中に能動的に投身するハントや御国などもいれば、受動的な木垣もいる。まして立場を意識せずコミットしてしまう京子もいる。そして、この人たちは全てコミットを回避できない存在である。したがって、「広場の孤独」における「コミットメント」が「祖国喪失」と同様に、すべての登場人物に当てはまるという普遍性を持っていながら、それぞれの人物によって多種多様という特徴をも帯びている。

また、表七は朝鮮戦争、太平洋戦争、レッドバージ、インドシナ戦争という区分を敷いているが、「広場の孤独」における登場人物の大多数が第二次世界大戦の経験を持っていることに注目したい。主な登場人物である木垣や張国寿、土井などはみな第二次世界大戦の経験者である。そのほか、脇役である曾根田部長でさえ、「戦争中サイゴンで仕入れたというしゃれた防暑服に派手な模様入りのストッキングをはいた足を机の上に投げ出したまま」³⁵という格好で小説に登場し、第二次大戦の参加者であることが示唆されている。さらに、「しきりに戦争中マニラで買った女が如何によかったか」³⁶などの話題で盛り上がり、小説の主要人物ではないアロハシャツの青年や、「戦争中はシナやら南方やらの飛行場をブンまわされて」³⁷いた酒屋の労働者らも、第二次世界大戦の参加者であった。このような人物の設定は、小説の空間を第二次世界大戦という歴史空間から断ち切ることができないことを十分に示している。つまり、この小説を冷戦³⁸という具体的な時代背景より、戦争や紛争というより大きな歴史の背景に置いて解読するほうが妥当だと言えよう。この意味で、「広場の孤独」は「祖国喪失」と同様、戦時中の人間の生き方を描く作品である。だが、「共犯者」あるいは「コミット」する人間たちの歴史背景が、日中戦争と国共内戦に焦点

³⁵前掲、「広場の孤独」(二九七頁)。

³⁶前掲、「広場の孤独」(二九八頁)。

³⁷前掲、「広場の孤独」(三二一頁)。

³⁸ 小原壮助によると、『群像』二月号の匿名批評では、「広場の孤独」を中心とした堀田の文学が、「左にも行けず、右へも行けず、きりとて真中にもすわっていらぬキリキリ舞い」であると位置づけられている。(小原壮助「まず穏当な芥川賞」、『東京新聞』)。要するに、日本国内で激化した世界を二極に分けた対立に直面して、そのいずれの側へも無条件にはついてゆけぬインテリゲンチヤの苦悶として読むのが、一般的であった。(諸田政一「堀田善衛論」、『海辺』第二巻三号)。

を当てる「祖国喪失」から、さらに冷戦やインドシナ戦争及びレッドパーズまで延伸されていることに本作の特徴がある。

最後に、表七の「コミットメント」と「人物の結末」から分かるように、「広場の孤独」の登場人物はみな加害者であると同時に被害者である。この中で、被害者の側面と加害者の側面が混在していることを鮮明にあらわしている人物が、無国籍・無階級のティルピッツだと考えられる。この旧オーストリア帝国の元貴族で、第一次世界大戦で階級と国家を失ったティルピッツは、「時と場合によって、貿易商、美術品蒐集家、ギャング、ゆすり、貴金属宝石商、密輸出入業者、小国の外交機関顧問、金融業者、賭場の焦点的人物」³⁹などに変身する。彼は没落していく場所を駆け回り、苦境に陥った人々あるいは戦争で破滅していく人間を最後まで搾り取る。また、パナマの法律を利用して船のエージェント会社をつくり、米ソ冷戦の下に、共産圏の国家と中国に戦略物資や禁制品を売り込み、莫大な利益を得る⁴⁰。ティルピッツの商売はある意味で冷戦の悪化を促進したと考えられ、いわば彼は冷戦の火付け役を演じている。

以上の通り、「広場の孤独」は「祖国喪失」の構造を承継するほか、生活のコミットメントから脱出できず、被害者であると同時に加害者であるという登場人物の設定でも、「祖国喪失」における「共犯者」の設定を受け継いでいる。登場人物に与えた被害性と加害性の混在という特徴に注目すると、先行研究においてなされている、人間を単に政治というメカニズムの被害者として捉えるという角度は、不十分だと考えられる。加害者でもあるため、主体性の回復に拘っただけではなく、乱世の中に如何に自己の加害性を認識し、被害性と加害性のせめぎ合いの中で自己を樹立していかなければ、本当の主体が成り立たないということにも、堀田は注目している。そのため、彼は「共犯」や「コミット」を通して戦争に依存する人間を均齊的に描く一方、「共犯者」とは対照の位置にある自覚者を登場させ、この「共犯」あるいは「コミット」する人間とその「自覚者」という構造を通して、戦争や紛争に参加する人間の各形態を表現する。この意味から言うと、堀田は「祖国喪失」と「広場の孤独」において、「政治というメカニズム」対「人間」という対立構造を描くより、各人の手が汚れるしかない世間に生きる人間たちが「共犯」や「コミットメント」に対する自覚の有無を問われて、むしろ無自覚者と自覚者という対立構造が彼の描く焦点と

³⁹前掲、「広場の孤独」(三三一頁)。

⁴⁰前掲、「広場の孤独」(三五七頁)を参照した。

なっていると考えられる。

第七節 人間・社会・歴史を描く堀田善衛の意志

以上論じてきたように、堀田は「祖国喪失」と「広場の孤独」において、「共犯」・「コミット」する人対その「自覚者」という構造を築いて、戦争や紛争の下に生きる人間の各形態を描いていたのである。本節では「共犯者」や「コミットメント」及び上記の構造に含まれている社会・歴史に対する堀田の認識を究明してみたい。

「共犯者」という言葉について、堀田は、一九五〇年に「東京日日新聞」に発表した「共犯者」という評論の冒頭に、次のように書いている。

私には人間の歴史というものが、ときに膨大な犯罪史と思われることがある。たとえば戦争犯罪——如何なる戦争も犯罪であるという考えを中心に考えてみよ。政治史の大部分は明らかに犯罪史である。

(前略) 歴史のみならず、その結果としての現代風景もまた、私には犯罪という観点から見ることによって、ときに最も具体的につかめるように思うことがある。犯罪ないしは犯罪的なものは最も現代的である。そのとき私とは何か、共犯者である。

しかし、何に対する犯罪であり共犯であるか。これまで生きて来て私にはっきりわかったことは数多くないが、それが「人間」に対する犯罪であることだけは、私は自覚している。人間が人間に対して加害者なのである。そのとき、ヒューマニティとは、自分が自分に対して加害者であること、共犯者であることを自覚することから発する。

41

上記の引用から、「共犯者」とその「自覚者」という構造を設定する堀田の理由が分かってくる。堀田によれば、戦争犯罪を中心にして歴史と現代世界を考えれば、人間の歴史や政治史及び「現代風景」における際立った特徴とは、「犯罪的」ということである。その中の

⁴¹ 堀田善衛「共犯者」(『東京日日新聞』、一九五〇・六・二〇、二一。引用は『堀田善衛全集』第十六巻、筑摩書房、一九七五、三頁に拠る)。

人間は「共犯者」と、「共犯」を自覚するヒューマニストにほかならない。このように、歴史や社会を見つめる堀田の視点は「戦争犯罪」に立っており、換言すれば、「戦争犯罪」ということは、彼が作家として歴史や社会を捕捉する折のキーポイントと言える。したがって、「共犯者」とその「自覚者」という構造は、堀田が戦争犯罪の溢れている歴史や現代社会を生きる人間を括るパターンである。

「母なる思想」において、堀田は「この現代史なる〈全体〉の場に、諸事象、あるひは複数の人物を設定して全体を描き出そうとする」⁴²ことが、あらゆる作家の野望であると述べた。この発言には、彼が鴨長明を評価した言葉を借りれば、「全的に把握しがたい人間の生な全体が、いまだ表現されていない、表現かつかつのところまで行っている思想の萌芽というものがある」⁴³。上記の戦争犯罪に立って歴史を見つめる視点設定と、様々な「共犯者」とその「自覚者」という人物の構造は、現代史の〈全体〉を捉えようと試みた堀田にとって歴史や現代社会を捕捉する一つの手法として使われたのではないか。彼はこの手法を用いて、戦争や紛争に満ちる世界に生きる人間、即ち「共犯者」の全体を描き出している。

同時に、「共犯者」を描く創作活動には、戦後作家としての堀田の責任感が含まれている。

犯罪史にほかならぬ人間の歴史に、共犯者のあらゆる形態をさぐり、武器としての自覚力をもっと強めること。内から外からひしひしと迫って来るアンチやラヂやらのおかげで自覚力がますます弱っていったら、ああそれは必ずまたまた戦争が来る。⁴⁴

堀田のロジックを遡って見れば、彼が共犯者の様々な形態を描いたのは、戦争に対する危機感を持つからである。共犯者を取り入れることによって、人間の自覚力を強め、戦争を誘発するものへ対抗する。この点から見ると、「広場の孤独」や長編連作「祖国喪失」において「共犯者」の多様な形態を描くことを通じて、読者に戦争への対抗意識を伝える堀

⁴²堀田善衛「母なる思想」(『文学界』、一九五二・六、一一六頁)。

⁴³大江健三郎「典型的人間、典型的文学者」(『堀田善衛全集』第一巻の解説、筑摩書房、一九七四、四八四頁)。

⁴⁴前掲、「共犯者」(一九五〇・六、引用は前掲『堀田善衛全集』第十六巻、筑摩書房、一九七五、三頁に拠る)。

田の意図が明確になってくる。

このように、「戦争犯罪」という土台に立って、歴史や人間社会を見据える作家の視点と、その中の人間を「共犯者」として捉える作家の認識が明らかになる。これが、上記の「祖国喪失」と「広場の孤独」の構造を可能にする要因であろう。逆に言えば、この構造を通して、社会・歴史における人間の全体を描く作家の意志が見える。

しかし、なぜ戦争に対する堀田の危機意識は「アンチ」や「デ」にあるのか、また、この二つの言葉が「共犯者」とどのような関係を持つのか。この問題を解き明かすため、次に「アンチ」と「デ」をそれぞれ代表している「アンチヒューマニズム」と「デヒューマニズム」に対する堀田の認識を追究する必要がある。

第八節 「共犯者」に対する認識と「上海体験」との関連

前節において、堀田が「共犯」や「コミット」する人対その「自覚者」という構造を通して現代社会に生きる人間の全体を描こうとする意欲と、その意欲に裏付けられた戦争への対抗意志について説明した。本節は「共犯者」に対する堀田の認識を明らかにした上で、それと彼の「上海体験」を結び付けて、戦後作家としての堀田の創作の源泉を追究する。

評論「共犯者」において、堀田は「アンチヒューマニズム」と「デヒューマニズム」を通して、「共犯者」の形成について語る。

敗戦後ひところ文学界にアンチヒューマニズムというどうやら戸籍のあやしい術語がささやかれた。人間をもっと意地悪い眼で見ろ、といったことであると思う。アンチとは「反基督」の如くに敵とか競争者とか反対とかという接頭語で、いずれにしろその対象にもたれかかった存在形式である。ところが、デヒューマニズムの方のデとは引き離すとか剥ぐとかという意で、物騒さではアンチなどの敵ではないようである。(略)

物質や社会機構によるデは結局は新たな物質や機構にたとえば原子力によって同質療法を施されるより他ないであろうが、しかしそうした同質療法にのみ専念することは、人間の、人間による、人間のための、奴隷化を、デヒューマナイゼーションを来しはしないだろうか。共犯者の道は歴史とともにどこどこまでも伸びているのだ。

しかもこの共犯の罰は共犯者であることそれ自体が罰なのだから、自覚がない限り、列に加わり共犯者になることにしか自由がないと思われがちである。

私は中国で見たのだが、乱暴な将兵や特務たちは自由自在にふるまったものだ。それはつまり、いまから考えれば全体が共犯者なのだから、なにをしてもかまわん、という考えから来たものだ。⁴⁵

引用によると、アンチとは敵として扱うように反対しながら、反対側に靠れかかっている存在であり、その発端は人間の内部から発したものである。一方、デとは「物質や社会機構」という外部のものによってヒューマニティを引き離すことである。この二つの言葉を通して、堀田は二十世紀において戦争や紛争が起こる根本的な理由を説明している。注目したいのは、「デヒューマニズム」という言葉である。

第二章第六節に論じたが、林語堂は『啼笑皆非』において国際関係と人性の関連を論じる際に、“dehumanized”と“materialistic”という表現を使って人間の物質化を説明したことがある。もちろん、人間の物質化とヒューマニズムと関連して論じるのは特別ではないが、その物質化する理由を機械や機械文明⁴⁶にする一般的言い方と違って、林語堂は中国の古典『楽記』を引用して、人間は外部の物質によって物質化する／されるというユニークな言い方をする。ここで強調したいのは、堀田がデヒューマニズムの理由を、林語堂と似て「物質と機構」という表現で表していることである。この表現方法から、上海で林語堂の『啼笑皆非』を読んで国際関係と人性について新たな認識を獲得した堀田が、人間の全体に対する思考において、林語堂の観点を踏襲して、自分の独自の思考を形成したと考えられる。

また、前述したように、歴史や社会を一つの「犯罪史」として考える堀田は、その中に生きる人間をすべて「共犯者」と呼ぶ。ここでも彼は、「共犯者」と「犯罪史」の形成と離れられない存在関係をはっきり認識している。また、「共犯者」であること自体がその「共犯」行為の罰だとみなし、「共犯者」であることが加害性と被害性を同時に含んでいることを堀田は示唆しながら、自覚の欠ける人間は「共犯者」に加わる以外に道がないと強調し

⁴⁵ 前掲、「共犯者」（一九五〇・六、引用は『堀田善衛全集』第十六巻、筑摩書房、一九七五、四頁に拠る）。

⁴⁶ 原一郎『ヒューマニズムの史的展開』（宝文館、一九六九）を参照した。

ている。この点から言うと、加害と被害の一体性、及びその普遍性に付き纏われている「共犯者」の特徴について、堀田は「祖国喪失」を書く時、或いはそれ以前に、既に意識していたと考えられる。

注意しなければならないのが、堀田が後に「共犯者」の理論を用い、以前中国という「現場」で目撃した「乱暴な」人間を追究していることである。彼は「共犯者」の普遍性という特徴から、中国で見た自由に振る舞っている「乱暴な将兵や特務たち」を解釈している。このことから考えると、堀田には、「犯罪史」という視点から上海で目撃した「現場」の風景を解釈してみようという意図があったからこそ、「共犯者」を「祖国喪失」に導入したのではないか。さらに、「共犯者のあらゆる形態をさぐり」、「アンチやらデやらを描くこと」を通し、逆に「ヒューマニズムという新思想に近づきつつある」⁴⁷という作家の志向を達成するのではないか。

このように、堀田は、人間が物質化によって人性を喪失するからこそ紛争が起こるといふ、上海時代に獲得した認識を踏襲して、「犯罪的」な歴史・社会に生きる人間が「アンチ」や「デ」によってすべて共犯的な存在だと認識し、この認識を「共犯者」や「コミットメント」という言葉に凝縮する。さらに、この二つの言葉を用いて上海で目撃した人間と事件を解釈する。このプロセスでは、戦争時代に生きる人間を認識し、戦争時代に生きる人間を描こうという作家の意志が容易に発見できる。

第三章と並び、本章では「祖国喪失」の「共犯」と「広場の孤独」の「コミット」に焦点を当て、堀田が如何に小説において上海時代に獲得した認識を表したのかという問題を追究した。両作品における「共犯」や「コミット」する人対その「自覚者」という構造と登場人物の特徴が極めて相似していることから、「広場の孤独」のテーマは「祖国喪失」から継承して、乱世に生きる人間の各形態を描くことであるとして。殊に、「共犯」や「コミット」する人間に与えられた被害性と加害性の混在という特徴に注目すると、先行研究に指摘された政治というメカニズム対主体性を喪失する人間という構造が解体する。堀田は人間と政治の関係を描くより、様々な「物質や社会機構」によって人間性を喪失する人間の全体を描いている。これは多田裕計の言う「一つの客観的な人間運命の単なる『解釈』

⁴⁷前掲、「共犯者」（一九五〇・六、四頁）。

である」⁴⁸。

逆に言えば、堀田が人間運命を表現するため、「祖国喪失」において人間を「共犯者」というカテゴリーに収め、「共犯者」対その「自覚者」という構造を用いた。「広場の孤独」における「コミット」する人対その「自覚者」も同様に捉えられる。この構造は、評論「共犯者」を分析して分かるように、歴史・社会を一つの犯罪史として見つめる堀田の視点に基づき、犯罪的な世間に生きる人間の全体を括るパターンである。

また、第八節で分析したように、「共犯者」が「アンチヒューマニズム」と「デヒューマニズム」によって形成されたという堀田の認識には、彼の上海時代での人間の物質化についての思考が合わさっている。彼がこの「上海体験」で獲得した認識に基づいて発展した「共犯者」理論を使い、かつて上海で目撃した人間と事件を解釈する。この文学的プロセスには、実体験したあの戦争を描こうとする作家の意図が見える。さらに、「共犯者」の理論が「広場の孤独」の「コミットメント」へ発展することから、あの戦争だけではなく、すべての戦争や紛争に生きる人間の各形態を描こうとする作家の意欲が窺える。評論「共犯者」に明言したように、このような「共犯者」の各形態の描写という創作活動を通して、人間の自覚力を高めることで、戦争に抵抗することを堀田は目指している。

このように、本章は「共犯」と「コミット」という二つの言葉を媒介にして、戦争に生きる人間の各形態を描く堀田の文学におけるプロセスを解き明かした。前述したように、「戦争犯罪」という着眼点に立って、人間を共犯者とその自覚者に二分する堀田の認識は、この二つの言葉を通して表されている。堀田のこの認識はそれ以降も変わってないが、「祖国喪失」と「広場の孤独」のようにこの二つの言葉をキーワードとして使う構造そのものは消失していると言えよう。

⁴⁸多田裕計「堀田善衛の人と作品」(『東京タイムズ』、一九五二・一・二四)。

第五章 新たな小説方法への追求

—「歴史」と『子夜』の比較を通して—

第一節 本章の問題意識と方法

序章で述べたが、吉開那津子は、堀田が上海の体験を通じて「国と国との関係、民族と民族の関係」¹という文学的課題を感じ、また、この新たな課題に促され、日本の伝統的な方法である私小説を棄却して新しい創作方法を求めたと指摘した。竹内泰広は「国際的なテーマ、あるいは外からながめ、反省させられた日本人、アジアの中での日本という観点」²を日本の私小説に具象し難いという面から、堀田が新たな小説方法を追求する理由について説明した。上記の両氏はともに堀田の小説方法が「私小説」から脱出した新たなものと断定し、それを生み出したのは、堀田が上海で獲得した国際関係や民族関係などの文学的課題によると推定している。

堀田の小説方法が彼の上海時代で得た文学的課題と密接な関係を持つということには賛同するが、その文学的課題の発端を国際関係や民族関係などに求めすぎるのは、少し短絡的ではないだろうか。上海で獲得した人間や歴史に対する認識こそが、彼の創作方法を変える大きな理由ではないだろうか。第四章に論じたが、堀田は戦争や紛争の溢れる歴史や社会に生きる人間の全体に注目しているのである。人間から歴史を見出すということは、彼の上海時代による発想である。一九四五年の日記には、次の記録を残している。

現在僕が上海に(残留して)(略)生きていることは、なかなか大へんなことなのだ。
しかし、これは、なかなか大へんなことなのだ、とだけしか云へないところに、このことのむづかしさ、つまり人生そのものの複雑さがあり、現実の人間存在そのものを、存在の各瞬間毎に全的にとらへることの不可能な所以があるのであらう。そこに時間

¹前掲、吉開那津子「堀田善衛——「海鳴りの底から」など」(『民主文学』、一九七〇・六、九七頁)。

²前掲、竹内泰広「堀田善衛とアジア」(『戦後文学とアジア』、毎日新聞社、一九七八・十二、一五七頁)。

に関するものとして、広い意味での（個人歴史も加へた意味で）歴史の可能性があり、加塑的なものとしての芸術文学の可能性がある。³

上海滞在の時、己の生活に触発され、人生の複雑さと人間存在を「全的」に描くことの難しさに思い至るが、その中にこそ「歴史の可能性」があると堀田は考えていたのではなかろうか。「政治の動きや、或る時代の通念などによって書かれた歴史は歴史では断じてない」⁴と主張する堀田は、歴史と政治の動きを区別して、歴史は人間の運命や人間の存在から読み取れるという。この視点が彼の上海に行ってから「各々の運命」⁵に関心を持つようになったことから来ていると考えられる。上海で目撃した戦乱下のそれぞれ人生の実態と己の実体験は、堀田にこの時代における人間の存在を考えさせたに違いない。戦乱下の人間存在は、国家関係や民族関係など政治の動きと分ち難いものであるが、堀田の強調したように、政治の動きではない。むしろ、人間を「全的」に描くことで、文学において歴史の成立を可能にする。

一九四六年九月の日記には、「歴史を描くのであること」⁶と書いて、文学創作の志向性を表している。上海で形成したこの小説方法を適用し、彼は戦後小説に実践した。「祖国喪失」と「広場の孤独」において人間の生の各形態を描いたことが、まさにその証拠である。言い換えれば、「祖国喪失」や「広場の孤独」で歴史・社会・人間の全体を描写しようとする堀田の意志は、彼が上海にいた時に培った歴史と人間存在に対する思考に根ざしていると言える。この意味において、堀田の創作方法も、彼の認識と同様に、一種の「上海体験」の産物である。第四章では、「共犯」や「コミット」する人対その「自覚者」という構造を

³ 一九四五年五月五日の日記に拠る。（堀田善衛『上海日記 滬上天下一九四五』、集英社、二〇〇八、一五五頁）。

⁴ 一九四六年八月九日の日記に拠る。（前掲、堀田善衛『上海日記 滬上天下一九四五』、二四五頁）。

⁵ 一九四五年一二月二四日の日記において、堀田は「中国、支那に来て各々が最も心深く感得すべきことは、各々の運命といふことである。運命こそは支那の絶対律なのであるから」と書いている。（前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』、一一四頁）。

⁶ 一九四六年九月十五日に堀田の日記に拠る。（前掲、『上海日記 滬上天下一九四五』、二七四頁）。

分析することによって、側面から堀田が人間の全体像を表現する方法を提示した。本章では、続いて堀田の創作方法に注目し、彼が歴史・社会・人間の全体を描くという創作方法に挑戦する過程での中国作家茅盾⁷との関わりを考察する。

茅盾は中国文学史上で、魯迅と異なる文学の「範式」——社会全体を「真実」に描写する小説を作り出した作家として位置づけられている⁸。殊に彼の『子夜』は、瞿秋白に「中国第一部リアリズム小説として成功したもの」⁹で、時代を反映した文学作品¹⁰だと評された。後述するが、茅盾の存在について、堀田は一九三〇年代には既に知っていた。また、堀田が一九五一年に「歴史」を創作する直前には、日本語に訳された茅盾の『子夜』をすでに購読し、創作ノートに記録を残していた。この経緯から、堀田の「歴史」を茅盾の『子夜』と比較する必要がある。

堀田の「歯車」と茅盾の『腐蝕』を比較・分析する研究¹¹があるが、本章は「歴史」と『子

⁷茅盾（一八九六～一九八一）、本名は沈雁冰、中国近代文学において魯迅に並ぶ重要な文学者と見なされる。浙江省桐郷県烏鎮出身。一九一三年に北京大学予科に入り、一九一六年七月に、家の経済事情で退学して、上海にある大手出版社である商務印書館で勤めていた。一九二〇年に、彼は『小説月報』という文学雑誌の編集に加え、それを五四新文化運動で創立した新文学団体——「文学研究会」の機関誌にした。この時期の茅盾は、主に外国文学理論を紹介したり、文学作品を評論したりしていたため、文学評論家と名を得て文壇に活躍していた。同時に、初創の共産党に参加し、政治活動にも積極的であった。小説を書き始めたのは一九二七年八月末頃である。茅盾というペンネームで『幻滅』や『動搖』及び『追求』を相次ぐ発表して、文学評論家から小説家に転身した。さらに、一九三二年の長篇小説『子夜』の完成によって、文壇の不動の地位を占めるようになった。

⁸錢理群、温儒敏、吳福輝《中国現代文学三十年》（北京大学出版社、一九九八・七、引用は二〇〇五・八の第二二回刷り、一七二頁に拠る）。

⁹瞿秋白《瞿秋白文集》第一卷（人民文学出版社、一九五三、第四三八頁）。

¹⁰原文は“从‘文学是时代的反映’上看来，《子夜》的确是中國文壇上的新的收获”である。（瞿秋白《讀子夜》《中華日報》副刊《小貢獻》、一九三三・八・一三）。

¹¹この説は小野忍が提示したもので、三好淳史は「堀田善衛の戦後」という論文に触れたほか、王中忱氏が「堀田善衛の文学と戦後の中国——『歯車』を中心にして」（東京工業大学と中国清華大学が共同に開いたシンポジウム、二〇〇九・八・六）という発表では、叙

夜』を対象にするため、特に取り挙げない。本章は堀田が「歴史」を書く際に『子夜』を参考とする理由を分析した上で、小説の構成を両作品の全体構造や冒頭部の導入及び時間の操作という三つの面から考察する。両作品の比較を通して、「歴史」における矛盾の影響を論証する一方、堀田が如何に「歴史」を構成したかを明らかにし、歴史・社会・人間の全体を描く方法に挑戦した、その一側面を示したい。

第二節 「現代史を文学に収斂」させる堀田の文学理念

前述したが、堀田は上海時代から〈歴史〉を描くという創作の志向を表していた。その後、「広場の孤独」の後記（一九五一・一一・三）、「現代の終結」（一九五一・一〇）、「母なる思想」（一九五二・六）及び「物質化」（一九五二・一〇）などの一連の文章には、この文学理念を一層具体的に語っている。

現代に於けるあらゆる事象は、他の如何なる時代にもまして、一事象をそれなりのものとして限定して考へることを極めて困難なものとする。一事象は無限に核分裂して縦にも横にも連作反応を起し終局的には歴史、乃至は現代史と称される〈全体〉の場に収斂される。この現代史なる〈全体〉の場に、諸事象、あるひは複数の人物を設定して全体を描き出そうとする。といふことは、文学の中に現代史を収斂しようといふことなのだが、これはおそらくはあらゆる作家の野望であらうし、実験小説といふ概念もそれが余裕の産物であらう筈がないから、目的としては右のやうなことを必ず含んでいるであらう。¹²

現代史における諸事象と複数の人物を「全体的」に描きだすと主張する堀田善衛である。無論、この主張は同時に彼が「現代」を見据える視点に基づいている。「現代」という時代の特徴を、一つの事象は独自として存在するものではなく、他の様々な関係が交錯しながら

事手法と主題という面から詳細な分析を行い、『歯車』が『腐蝕』を模作して書かれたものだと結論を付けた。この両作品の影響関係について詳細に考察した。

¹²堀田善衛「母なる思想」（『文学界』、一九五二・六、一一六頁）。

ら存在するものだと彼は考えているため、現代文学としてそのすべての事象を収納している「全体の場」を描くべきだと唱えるわけである。この創作理念は上海時代の発想より一層明確になっているが、社会・人間を全体的に捉える基本方針は変わらないと考えられる。繰り返し言うが、日本に引き揚げてから創作した作品は、すべて上記の理念に基づく実験作だと言えよう。

だが、この実験作は多くの批判を浴びた。一九五二年二月、山本健吉は堀田の「灯台へ」を「規格」化された作品として挙げ、「政治的感想をとりとめなく語る場所として、小説があり、登場人物があるもののようだ」¹³といい、堀田の小説における小説技法の欠如を指摘した。同年の八月、中村真一郎は「広場の孤独」が堀田の提唱した「現代史を文学に収斂」という方法論の実践となれず、作家としての一種の失敗作であると辛辣に評した。¹⁴両者の批評から、堀田が模索した小説の方法論に対する批評界の非難が厳しかったことが垣間見られる。

歴史・社会・人間の「全体」を文学に収斂するのがいかに困難であるかは、彼は「覚書」(一九五二年)や「私の創作体験」(一九五三年春)などで繰り返し言及している。

現代の文学は、全体として直接的な指標としては、完結完成といふ場をはなれ、次第に未定型の現代史を形成する、或は悪くいってその中に解消する、といふ方向にゆきつつあるやうに思われます。しかもなほ、どこに完結完成をではなくて、作品としての独立性を確立すべき、決定的な一点或は一線を、或は発動力を求めるか。¹⁵

堀田によれば、現代文学は従来 of 文学と異なり、「全体として」「完結完成といふ場をはなれ」て、完結完成しにくい現代史を形成するあるいは解消するかという方向に走りつつある。それゆえ、堀田は、現代の文学では完結完成を求めるのではなく、「作品としての独立性」を確立するため、むしろどこかに「決定的な一点或は一線を」求めるべきと説いている。

このエッセイは一九五二から一九五三年の間に書かれたもので、当時現代文学を如何に

¹³ 『朝日新聞』(一九五二・二・二四)。

¹⁴ 中村真一郎「堀田善衛著『祖国喪失』」(『文学界』、一九五二・八、一七六頁)。

¹⁵ 堀田善衛「覚書」(『文学』、一九五二・六、五三七頁)。

書くか、あるいは、どのようにして現代史を文学に収斂するかという問題に悩まされている堀田の状態がわかる。長編小説「歴史」（一九五二～五三）はまさに彼がその方法を模索するさなかに出来上がった作品である。社会全体を如何に「歴史」に書き込むかという作家の苦悩は、彼が茅盾の作品を参考にした動機なのではないかと推測できる。そして、神奈川近代文学館に収蔵されている堀田の「歴史」の手稿の中にある「茅盾の“子夜”など参考にすること或いは“大過渡期”¹⁶というメモからも、彼が「歴史」を創作する際に、意識的に茅盾の作品を参考したことは明らかである。

第三節 堀田善衛と茅盾の接触

堀田は「誘惑者としての批評家」という文章で、初めて茅盾の小説を読んだ時の様子を紹介している。この文章は篠田一士が著した『二十世紀の十大小説』という長編評論に対して書かれた書評である。茅盾の作品をこの本に収録したことに触発され、堀田は自分が茅盾文学に触れた時のことについて以下のように語っている。

三〇年代のいつ頃であったか、第一書房という書肆がその当時としての、ほとんどいずれもが出たての作品による現代文学叢書を出したことがあった。アンドレ・マルロオ、モンテルラン、ジャック・シャルドンヌ、ジュリアン・グリーンなどの作品に伍して、茅盾氏の「大過渡期」なるものは、実のところ、茅盾氏の『蝕』と題された三部作中の「幻滅」と「動揺」の抄訳であったのであり、題名の「大過渡期」は、訳者である小田嶽夫氏の勝手な(?)命名なのであった。それらのことはさて置いて、抄訳であれ何であれ、マルロオ、モンテルラン、グリーンなどの西欧の作家たちと立ち並んで、茅盾氏のこの作品が、いささかの引けもとらずに、堂々たる社会小説——その頃に全体小説という呼び方はなかった——として、一九三〇年代の二十世紀文学に座を占めていることに、当時私もが、竹内好氏などとともに一驚をしたものであった。¹⁷

¹⁶堀田善衛「創作ノート 3」、神奈川近代文学館所蔵。

¹⁷堀田善衛「誘惑者としての批評家」（『新潮』、一九八九・四、二三七頁）。

『大過渡期』は小田嶽夫が茅盾の三部作『蝕』（「動揺」「追求」「幻滅」）の前二部を訳して、一九三六年に第一書房によって発行されたものである。堀田は「『幻滅』と『動揺』の抄訳」と間違っているが、年代や出版社及びその関連資料から見れば、現代叢書の一部となっていた小田嶽夫の訳作を確実に読んだと考えられる。つまり、彼は一九三〇年代に小田嶽夫の訳した『大過渡期』を通して茅盾の作品と接触したのが明瞭である。注目に値するのが、当時堀田が茅盾の作品に対して、「堂々たる社会小説」という印象が強かったということである。この箇所から、茅盾の作品と接触した時から、堀田が茅盾の作品を「全体小説」として受け取ったと窺える。

堀田は茅盾を作品だけで知っているわけではなく、本人と会ったこともある。堀田善衛の回想によれば、彼は一九四六年に上海である雑誌の傍聴会で茅盾を見たことがあったが、二人が知り合ったのは、一九五六年ニューデリーで開かれたアジア作家会議である。当時の様子を、次のように記している。

この第一回目のときに、私は一つの失敗をした。私は小田嶽夫訳の『大過渡期』を読んだことがある、そして、それを英訳して“Great Transition”と言った、そういうものを読んだことがある、それは私に中国現代文学についての思索を読んだことがある、と話した。

ところが、茅盾氏は、眼をしばたたく例の癖をしてみせてしばらく考え込んでしまい、そのはてに、申し訳ないが、どの作品をさして言うておられるのか自分にはわからない、とまことに申し訳なさそうに上目づかいで氏が言った。それで私は、では、というつもりで、その作品の内容を述べたて、特にはじめの、上海での老家父老の葬式に、主な登場人物の全体を集めて読者に紹介をするところは、社会小説、あるいは大河小説の書き出しとしては、技術的にもまことに巧みなものだ、と、軽薄なところのある私は、実はいささか得意気味でまくしたてたものであった。¹⁸

¹⁸ 堀田善衛「回想・作家茅盾」（「解説」、『現代中国文学・2・矛盾』、河出書房版、一九七〇・一〇。引用は『堀田善衛全集』第十四巻、筑摩書房、一九七五、三一三～三一四頁に拠る）。

堀田は、この茅盾氏との会話の中で、“Great Transition”を『子夜』と混淆したようである。前者は先述した『大過渡期』であるが、述べた内容は明らかに『子夜』の冒頭である。勿論、この過ちは堀田も後に気付いたが、『子夜』の冒頭に対して印象深く捉えていたことがこの出来事からも分かる。『子夜』の日本語訳は一九五六年当時に二種類出版されていた。一つは増田渉が抄訳した「上海深夜中」（一九三八）であり、もう一つは尾坂徳司の完訳本『真夜中』（一九五一）である。堀田の読んだ版本は、後の彼の述懐によると、尾坂徳司が翻訳したものだ¹⁹。

次は、『子夜』を発行した出版社と翻訳者尾坂徳司の視点と、堀田の視点を比較して、堀田が『子夜』の如何なる点を意識したのかと考えてみたい。

第四節 『子夜』を読む視点の比較

『子夜』は、茅盾の代表的長編小説で、一九三三年一月に上海開明書店によって出版された。この物語は中国南京国民政府と地方軍閥との間の武力抗争や国共対立及び共産党内部の左右路線の対立などを背景にし、上海という舞台に抛り、一九三〇年五月から七月までの出来事を描いたものである。主人公の呉荪甫は双橋鎮の地主の息子で、農村の土地や産業を継承し、上海で大製糸工場を興した民族資本家である。民族資本家呉荪甫と金融資本家趙伯韜との抗争が作品全体を貫いている。そして、この民族資本家と金融資本家の軋り合い、労働者と民族資本家との間にある抗争と鎮圧など様々な関係の中に、世界経済恐慌と外国資本の攻勢、労働争議の場面、農村の疲弊、都市の青年男女の挿話などを織り交ぜ、一九三〇年代の中国社会が鳥瞰図的に描き出されている。

4-1 日本の出版社と訳者の視点

尾坂徳司の訳本——『真夜中』は第一部と第二部に分けられ、日本国内での宣伝のために第一部の新書に付いている帯では、次のように書かれている。

¹⁹前掲、「回想・作家茅盾」（三一四頁）。

戦前戦後を通じての中国のベストセラー！

待望の完訳なる！

国際都市「上海」の大資本家と彼を取りまくインテリ、労働者を中心として描かれた、現中国社会の解剖図。

うちつづく内戦と共産軍の猖獗

農村の崩潰と都市の経済恐慌光りなき「真夜中」を、彼等はいかに生きぬいたか？

深刻に「現代」を批判し「夜明け」を暗示する今秋最大の問題作。²⁰

この広告文の惹句を順番に見ていくと、最初に出る「戦前戦後を通じての中国のベストセラー！」という言葉では、読者の購買意欲を煽る出版社の意図が窺える。また、「現中国社会の解剖図」といい、一九五一年当時、中華人民共和国が既に成立していたことにも関わらず、国際都市の「上海」にいる資本家、インテリ、労働者を描いたと強調するのは、出版社が意識的に『子夜』などに書かれた諸問題を、一九五一年の日本の諸問題と対応させているのではないか。少なくとも「うちつづく内戦と共産軍の猖獗」という文には、朝鮮戦争が勃発してから、アメリカ側に立っている日本の立場が鮮明に反映され、出版社の時代意識が充分に入っていると分かる。最後に、人間が混沌とした恐慌に陥った社会に「いかに生きぬいたか」という問題を提示しており、この作品が「現代」を批判するものだと出版社は認定している。

以上、出版社の広告文は主に第二次戦争の敗戦や GHQ の支配、さらに冷戦時代への突入などの動乱を耐えてきた読者の共感を呼び起こすと考えられる。また、翌月に出版された第二部の帯書きにも、第一部と同様の傾向を示している。

産業支配の野望にもえる国際都市上海の大資本家の凄惨苛酷な経済闘争と悲劇的生涯を描いて国家と民族、政治と経済、民主主義と共産主義、資本と労働、土地と農民等現代の根本問題を解明し、その缺陷と矛盾を剔出して、夜明けを暗示する中国文学の最高峯！²¹

²⁰茅盾『真夜中』（第一部）帯び書き（尾坂徳司訳、千代田書房、一九五一・十・一）。

²¹茅盾『真夜中』（第二部）帯び書き（尾坂徳司訳、千代田書房、一九五一・十一・十五）。

第一部と同じく、混沌とした社会に存在する諸問題を列挙し、『子夜』を「現代の根本問題」を解明する本としてアピールしている。しかし、第二部になると、第一部に書きこまれた「内戦」や「共産軍の猖獗」など混乱を齎す理由には言及せず、それに代えて、「国家と民族」、「資本と労働」など「現代の根本問題」に焦点を当てることになる。

いわば、出版社は一九三〇年代の中国を描いた『子夜』に出てくる具体的な社会状況を無視し、抽象的な各種の關係に帰納することで、この作品を産業が発展し始めた一九五〇年代の日本社会にも当てはまりうる問題作として強調しているのだ。この曖昧な言い方で、中国と日本、一九三〇年代と一九五〇年代などの地理的、時代的な差異を消失させ、経済闘争の激しい「現代」社会に存在する問題に読者の注目を集める狙いがあると考えられる。

出版社だけではなく、翻訳者尾坂徳司にも同様の意識が窺える。尾坂は『真夜中』第一部の最後に載せている「訳者のことば」において、まずパール・バックの『大地』が単に外国人の眼に映じた、オリエンタリズムとしての中国の略図にすぎないと対照させて、『子夜』は「中国人が自己の肉体にメスをあて、ほとぼしる鮮血をインクとして、呻き声をあげながら描きあげた、中国実社会の解剖図」として日本に紹介した意図として、日本人と同様に、「窒息しそうな時代の暗さに、逃げ場を求めよう」とする中国人の有様を見せることがあったと説明した。彼は当時「空前の生活苦にあえぎながら、なおも第三次世界大戦の幻影におびえおのゝいている」日本人が、この作品に自分の姿を見つけられると、同一的な社会状況に置かれた人間という地平にまで読者を誘導する。続けて彼はこのように述べる。

『真夜中』が一九三二年の中国人の作品でありながら、一九五一年の日本人の心を揺り動かすのは、つまり国際都市上海を舞台にして、全世界が直面しつつある政治経済その他一切の社会機構を含めた「現代」の諸矛盾と真正面から取組み、その根本原因を執拗に追求しているからにほかならない。²²

訳者の強調している「現代」の諸矛盾とは何か明確に説明をしていないが、帯書きに列挙された「国家と民族」「政治経済」「民主主義と共産主義」「資本と労働」「土地と農民」などの問題に他ならない。彼はこの様々な「現代」の「全世界」の矛盾を真正面から描写し、

²²前掲、茅盾『真夜中』（第一部、二九六頁）。

その原因を根本的に追究していることが、まさに『子夜』の魅力だと認定する。この『子夜』への視線は、言うまでも無く、GHQによる一連の政策の実施によって引き起こされた各種の矛盾と結びつけられて、文化界で活発となっていた「近代の超克」を反省する議論に触発され、発したものと考えられる。

以上の資料から、尾坂のこの解説は、出版社側と驚くほどに一致していることが分かる。両者とも『子夜』を中国社会の「解剖図」として捉え、この作品に描かれた一九三〇年代の中国の問題を日本の「現代」の問題として取り扱っていると考えられる。

4-2 堀田善衛の視点

堀田の読んだ『子夜』は、一九五一年に尾坂徳司によって翻訳されたものである。「歴史」(一九五二)の創作ノートに『子夜』という書名が出ていることから、『子夜』の翻訳が出来た直後に、堀田はこの作品を読んだと証明できる。この作品において堀田に強い印象を残した箇所がその冒頭であることは、一九五六年に茅盾と会った時に『子夜』の冒頭をしっかりと記憶して高い評価を与えていることから分かるだろう。それだけではなく、一九六七年に出た竹内好翻訳の『子夜』の解説においても、堀田は再びこの作品の冒頭を挙げ、さらに詳しく次のように説明を加える。

私はこの作品の導入部である、はじめの呉老人の住む双橋鎮という村がおびやかされ、そこから無理矢理にこの老人を船で上海へつれ出すところ、それからその船が上海へつき、ついでこの老人がショック死をしてその大きな葬儀が行われる、この葬儀を通じて、重要な登場人物のみならず、古い中国と、半植民地化された上海の現実、農村と都市という時代背景までがまず全体的に、かつ的確に描出されている、その巧みは、長編小説を書こうとするものが学んでよいものであると思う。²³

彼はこの作品の導入部で行われる葬儀に注目している。彼によると、この箇所は、葬儀を通じて、重要な登場人物を集めただけでなく、古い中国と半植民地の上海の現実と、当時の農村や都市の時代背景の全体像を表している部分なのである。これが「長編小説」を

²³ 前掲、「回想・作家茅盾」(三一五頁)。

書く人が学ぶべきものだとは彼は賞賛している。ここから分かるように、彼は小説の内容より、むしろ作家の用いた手法を称賛している。

周知の通り、トルストイの『戦争と平和』においても、序章の第二節で、お茶会を通じて、主要な人物を集めている。『子夜』の導入部のこの手法は、トルストイの影響によるものであるという点は、既に多くの評論家に指摘されてきている。だが、堀田は『戦争と平和』には触れず、ひたすらに『子夜』のこの手法を称賛する。後に論じるが、この手法に対する彼の反応から、「歴史」の導入部に同じ手法を用いているのは、トルストイ『戦争と平和』ではなく、茅盾『子夜』から受けた感銘によるものであると考えられる。

導入部の手法だけではなく、同じ文章に、彼は『子夜』中に「ユーモア」と「アイロニー」とが多く使われていることと、時に場面に「エロティシズムというもの」が入っていることに対しても評価している。最後に、彼は茅盾と鲁迅を比べながら、次のように書く。

近代中国文学のなかでの鲁迅について、ほんの少しのことを言うとすれば、私は鲁迅という存在の、中国にとっての革命的意義は十分に、畏怖をおぼえるほどに感得するものであり、かつはその批判精神の、ここでも怖ろしいほどな鋭さ深さについて、それを無視するつもりはまったくくない。だが、しかし、たとえば小説世界を構築するといった作業は、実はそういうこととは少々別なところに在るのであって、茅盾自身がその作業を中絶させ、誰がいったい現代中国文学において、たとえば茅盾の仕事の後継者なのか、と問うてみても、あまりはかばかしい答えが、ここでもないらしいことを残念に思う。²⁴

この時点では、堀田は「革命的意義」や「批判精神」というよりも、むしろ小説世界を構築する技を重視している。茅盾が「小説世界を構築する」という作業において、中国現代文学で唯一の存在だと彼は高く評価する。前述したが、茅盾の作品は堀田から見ると全体小説であり、『子夜』の冒頭部を賞賛したのも、その技法で人物を全部登場させながら、中国の社会情勢を全体的に紹介できたからである。堀田から見た茅盾は、全体小説を描くことに優れた技を持ち、特に小説世界を構築する能力が抜群の作家なのである。

堀田の視点は、『子夜』に描かれている社会状況と日本の類似を強調する尾坂徳司とは異

²⁴前掲、「回想・作家茅盾」（三一六頁）。

なることが分かる。作品の具体的な内容より、彼はむしろ茅盾が如何に文学世界を構築するか、具体的にどのような手法を使って社会の全体を表現するかということに興味を持っていた。前述したが、当時の堀田は文学に歴史や社会の全体を描くことに悩んでいた。このことが彼の『子夜』を捉える視点に影響したというもの当然であろう。さらに言えば、この堀田の内面に存在した苦悩が、彼が「歴史」を創作する際に『子夜』を参照させた決定的な要因である。

次は、具体的に全体構造、冒頭部の配置、時間の按配から両テキストの比較を行いたい。

第五節 『子夜』と「歴史」の全体構造

本節は「全体小説」の『子夜』を参照することによって、「歴史」が、心境の披瀝を重視する私小説と異なって、主人公の生活や経験を、虚構を排して描き、リアリズム社会小説に近づけようとした堀田の意図を側面から表したい。

5-1 『子夜』の構造

『子夜』の全体構造については、先行研究において許志安と李岫が緻密な分析を行っている。以下は両氏の論を参照しつつ、『子夜』の人物関係の構造を示していきたい。

あらすじで述べたように、『子夜』は民族資本家の呉荪甫と買弁資本家趙伯韜の競争衝突を主線とし、起承転結を辿って進んでいく。第一章から第三章は、上海に来た途端に、呉老人が亡くなることとその葬式の様子が描かれる。後に詳しく述べるが、葬式を通じて、呉荪甫が三つの衝突に囲まれていることを示された。すなわち、趙伯韜をはじめとする買弁資本家と労働者運動及び農民暴動である。第四章から第十六章は、展開と高潮部分で、冒頭で表された呉荪甫とこれらの人々や事件との関係が展開されていく。呉荪甫の奮闘が最高潮まで押し上げられていたが、第十二章になると、杜竹斎が益中公司から退出することによって、呉荪甫は人生の低潮を迎える。第十七章から十九章は小説の結末になる。呉荪甫が家屋を全部抵当物件にして、妻と廬山へ避暑に赴く。²⁵

²⁵ 李岫：《結構的芸術与芸術的結構——談《子夜》》（《茅盾研究論文選集 下》、湖南人民出

以上は縦の方向、すなわち時間軸に沿ってその関係の進め方を簡略的に説明したが、許志安は、横の方向から『子夜』における複雑な関係を分類してみた。彼の分析によると、呉荪甫と趙伯韜の競争という主線は、さらに以下の五つの支線を生じる。①工業において、呉荪甫をはじめ、民族資産階級の経営する益中公司を中心にして、買弁資本家と民族資本家の衝突や、呉荪甫と朱吟秋の民族資産階級内部の衝突がある。②公債市場において、呉荪甫と趙伯韜がしのぎを削る状況下で、地主馮雲卿の公債投資など地主経済と農民経済が民族資本や買弁資本との畸形的な関係を築いている。③農村において、曾滄海との親戚関係を通して農民暴動を描くが、創作計画の変動でそれ以上展開していない。④労資において、呉荪甫の圧搾で民族資産階級と労働者の衝突が生まれる。⑤呉荪甫の家庭関係において、いくつかのラブストーリーがある。²⁶

許志安と李岫の論文は、横と縦の方向で『子夜』の人物関係構造を整理し、結果として異なるものの、呉荪甫と趙伯韜の競争を通して表れた民族資本家と買弁資本家の矛盾が全作品の主線であると主張している点においては一致している。すなわち、様々な関係が総合的に交錯しているが、全作品の主線は不変である。『子夜』における各関係や各人物をつなげる中心的な関係は、民族資本家呉荪甫と買弁資本家趙伯韜の間のものであるからこそ、最後に呉荪甫の失敗がこの関係の終結に大きな役割を果たしたと考えられる。茅盾自身が『子夜』の創作動機を「当時の社会性質論争においてトロツキー派に対し、中国における資本主義の運命を提示した」ということから、呉荪甫の失敗は中国の資本主義の失敗を象徴している。

5-2 「歴史」の全体構造

「歴史」の単行本は一九五三年十一月に新潮社によって発行されたもので、小説は四部から成り立つ。その中の第一部と第二部の大部分が一九五二年の二月から一九五三年三月まで各雑誌で発表された。

版社、四八四～四八八）を参照した。

²⁶ 許志安：《取精用宏 推陳出新——試論茅盾長篇小説對中外結構藝術的繼承和革新》（湖南人民出版社、三九六～三九七頁）を参照した。

第一部は「序章」²⁷、「石を愛する男」²⁸、「無人地帯」²⁹、「不幸への意志」³⁰から成り立っている。前半の二章では、一九四六年の「十一月半ば」に上海の資源調査委員会の留用要員である日本人の竜田が学生グループと知り合うことが語られている。小説内の時間に基づいて考えれば、これが小説の導入部であると言える。

第一部「無人地帯」からは、竜田が二週間後、すなわち十一月末に日本人の左林を中心に行っている亞美経済会議のグループと接触したことが描かれる。これは第二部での時間と同じである。第二部は「一九四六年中国」を副題とし、「零点運動」³¹、「重慶の墓」³²、「遡行的」³³、「その前夜」という四部に分けられている。「零点運動」では竜田が学生グループのメンバーの一人劉福昌を手伝って、銃弾が入っている「米袋」を運ぶことが語られる。「重慶の墓」は元T歌劇団で、中国へ赴いて慰問演出をした際に捕虜となって重慶で三年を過ごした萩原亮子の個人的物語が語られる。「遡行的」は再び「零点運動」の時間、すなわち「十一月の末日」に戻り、電車に乗っている竜田が「米袋」を手伝うことを考える。「その前夜」になると、時間が「一九四六年十一月末日午後七時」から「十二月一日 午前零時」までの両グループの人物の経歴と活動が描かれる。第三部は民衆の暴動の前に、竜田が学生グループを手伝ってピラを配るという動きを含め、両グループの各人物の動きと亮子の動きを詳述する。第四部になると、竜田とホテルの「小二」が暴動の行列に参加して目撃した情景で、最後に亮子が左林を銃撃する場面で結末となる。

『子夜』と同じく、「歴史」には、日中の「宿命的」な関係が小説の全体を貫いている。冒頭部「石を愛する男」において、工場労働者である陶一亭は日清戦争や日露戦争及び日独戦争を挙げて、この「ひとつひとつが日本が発展する時に必然的に起る一つの型、原型じゃないか、中国侵略は近代日本の政治と経済の宿命じゃないか」³⁴という問題を提起し、

²⁷原題は「歴史」（『別冊文芸春秋』、一九五二・二）。

²⁸初出は『文学界』（一九五二・五）。

²⁹初出は『新潮』（一九五二・四）。

³⁰初出は『群像』（一九五二・七）。

³¹初出は『別冊文芸春秋』（一九五二・十）。

³²初出は『文芸』（一九五二・十二）。

³³原題は「危険な物質」（『文学界』、一九五三・三）。

³⁴堀田善衛「歴史」（新潮社、一九五三・一一。引用は『堀田善衛全集』第二巻、筑摩書房、

「もし万一第三次大戦がはじまったら、外国の軍隊といっしょになって、きっともう一度も二度も中国を侵略しに来るような気がします」(三二頁)と危機感を示している。陶の不安に対して、知識人の洪希生は「中国侵略が日本の宿命的な型ならば、中国は中国の宿命的な型で建設を行ってゆきます」(三四頁)と、この宿命から離脱する革命の道を提示する。この日中の「宿命」関係をめぐって、以下の二つのグループの対立が現れる。一つはこの宿命関係に抵抗するレジスタンスグループである。このグループは電車の車掌である劉福昌、紡績労働者の陶一亭、国連機関のア NRA に勤めているインテリの洪希生、左翼学生でテロリストの史量才、買辦資本家康正の息子である康沢、仁々薬房の店主の娘周雪章という、様々な階級から出身の若者によって構成される。このグループと対峙するのが、軍、政、商界の大人物からなる「亜美経済会議」というグループである。国民政府軍の将軍・羅紹良、政府機関の主任委員・李安耀、李のフランス人妻・リュシェンヌ夫人、買辦で金福公司社長の康正、アメリカ資本の代弁者ともいうべき経済調査員のラムステッド、そして特務機関にいた日本人で、旧陸軍の隠匿財産を運営し、亜美経済会議なる密輸団体を経営して敗戦祖国の再建をはかっている左林。その中で、左林が各人物と繋がる中心的な存在である。

若者たちのレジスタンス活動は、左林と康正など日本の再建活動に対してのものである。序章においては、買辦資本家である康正の息子・康沢が、左林と康正たちの計画を曝した。それは、救済物資の名目で、化粧品や粉ミルクの密輸で膨大な利益を貪り、それにより得たお金でリュシェンヌ夫人名義での航空会社を通じて日本にサッカリンを送って経済復興に力を入れることと、日本の政治機関へ献金して日本の再建方針を導いていくことである。序章で提起したこのような左林の仕事は、第一部「無人地帯」で李夫妻とともに航空会社を作ることと、第三節「不幸への意志」で「東京へ日本に関する判断情報を逆輸出していた」(六八頁)という事態へ発展していく。さらに、第二部「その前夜」では、当時の軍事動態や経済情勢に応じながら、日本へ「マッチ、ガラス、魔法瓶、ゴム、電球、セルロイド、石鹼、薬品の工場をうつす」(一五〇～一五一頁)という大きな計画ができた。この計画を中止に追い込むため、レジスタントグループの各人が属する階級において抵抗活動が行なわれる。例えば、労働者・陶一亭の工場を守る運動は、康正や左林の工場の移転活動と対立している。洪希生が竜田に頼んだ潜水夫の退去は左林の密輸活動と対抗している。

一九七四・七月、三二頁に拠る。以下は頁数のみ)。

こうして、二つのグループがこの宿命的な関係によって対立的な活動を行なう構造が明瞭になってくる。

この二つのグループから遊離しているもう一つの軸として、竜田と亮子の活動がある。この二人は日本の戦死者側から、左林の日本再建を阻止する存在である。第一部の「不幸への意志」において、「亜美経済会議」の成立を見て、機関の名前の変化は単に外面的なもので、その実質は戦争中の特務機関と変わらないと、竜田は気付いた。その認識に基づいて、彼は「敵見方、何十万、何百万という、積みば巨大な山をなすにちがいない生まれましい屍体とその怨みは、全体歴史のどこへ捨てられたのか」（六七頁）と問う。さらに、「彼はどうやったら殺せるか、ここから射殺するのが最も適当であろうか」（七九頁）という、左林を殺すという想像がふと念頭をよぎる。だが、「テロリズムという非道な手段と人間の恢復をねがうこととのあいだの、深いかかわりを思い知らされていた」（七九頁）ため、その考えを停止した。戦死者と左林との対立関係を軸に展開していく人物は、萩原亮子である。第二部の「重慶の墓」では、亮子が重慶に埋められている戦死者と捕虜の代弁者として登場する。「俘虜はみな、生きながらに埋葬されたような気持を、心のどこかにもっている」（一〇八頁）という亮子は、戦死者の代弁者となる。彼女は最後に左林を銃撃した。この行動は無意味な戦争で戦死した死者の代わりに、日中の中で繰り返される歴史を止めたいという象徴的な意味が含まれている。この点は「孤独な彼女はああすることによってしか、重慶の墓から脱出し、日本人としての実在に達するすべを見出しえなかったのだ」（二六五頁）という竜田の言葉から窺うことができる。

小説の結末は左林の死あるいは負傷で終わり、日本の再建など仕事の中止を象徴し、学生グループと「亜美経済会議」の闘争や竜田や亮子と左林との対立など、関係の解体を告げる。

このように、「歴史」は日本と中国の「宿命的」な関係をめぐって、上海にいる労働者階級、学生階級、インテリ階級、買弁商人、一般商人、日本人、アメリカ人、「流氓」など各階層の人々の活動を全般的に示すことによって、中国の資本家と労働者の矛盾、学生と政府の矛盾、日本インテリと資本家の矛盾、戦死者と資本家の矛盾などが提起される。「それは断じて過去のパターンを繰り返すことによるものであってはならない」³⁵という堀田の発言

³⁵ 堀田善衛「私の創作体験」（新日本文学会、一九五三。引用は『堀田善衛全集』第十四巻、筑摩書房、一九七五、六五頁に拠る）。

から、あの「宿命的」な関係があらゆる関係を連結する中心的な存在だと確認できるだろう。

以上、「歴史」と『子夜』の全体構造を分析することで、両作品とも一つの間関係を主線にしていることが分かる。「歴史」は日中の「宿命的」関係であり、『子夜』は民族資本家と買弁資本家の関係である。このような一対の主たる相反関係から、さらに様々な関係が生まれてくるという構造を、許志安は「一樹千枝」³⁶と呼ぶ。言うまでもなく、この全体構造は、茅盾と堀田が「社会の全体像をロマネスク化」³⁷する重要なテクニクである。次にこの全体像を微細に描き出すにあたって、冒頭部の配置が大きな役割を果たしたことを論証していきたい。

第六節 『子夜』と「歴史」の冒頭の導入方法

『子夜』と「歴史」はサルトルの大河小説『自由への道』と違って、主に断面図の形式で社会の全体像を追求した。本節は堀田の称賛した『子夜』の導入部に着目して、茅盾が人物と社会情勢を集中的に呈するプロセスを明らかにしてから、「歴史」の導入部を分析し、堀田が如何に茅盾の小説手法を模倣したかを明らかにしたい。

6-1 『子夜』の冒頭の導入

『子夜』の登場人物は主要な者だけで六十人程存在し、その主要人物は堀田の指摘しているように、大部分が作品の冒頭から呉老人の葬式までに登場している。だが、『子夜』の冒頭部は人物の登場よりもまず、上海を描写するシーンから始まる。

太陽が地平線に落ちたばかりである。柔かい風が思出したように顔に吹きあると、

³⁶前掲、許志安：《取精用宏 推陳出新——試論茅盾長篇小説對中外結構藝術的繼承和革新》（三九六頁）。

³⁷ 篠田一士『二十世紀の十大小説』（新潮社、一九八八、二二四頁）。

変にむず痒い。蘇州河の濁った水は緑がかった金色にぼやけ、軽く、静かに、西に向ってながれ流れて行く。黄浦江の夕汐は、いつの間にかもう上げて来て、今では、この蘇州河兩岸のさまざまな船も、みんなたかだかと浮きあがり、デッキが埠頭から五寸ほども突出している。風はパブリック・ガーデンの音楽を送って来るが、豆をいるようなドラや太鼓の音だけがはっきりと聞こえ、そして人を興奮させる。夕靄は薄霧をまじえて、ガーデンブリッジの高く聳えた吊鉄に蔽いかぶさり、電車が走りぬけると、この吊鉄の下に張られた電線から、ときどきパッパッと青い火花が散る。橋から東を眺めると、浦東の洋式倉庫が巨大な怪獣のように夕闇にうずくまり、百となく千となく、小さな眼に似た電燈をきらめかせている。西の方を眺めると、はっと息を呑ませるのは、ビルディングの屋上にたかだかと備えつけられた、しかも異様なまでに大きなネオンサインで、火のような赤い光と燐のような青い焰を吐いている。
Light, Heart, Power!³⁸

このように、上海の景色を見つめ、触覚、視覚、聴覚など身体の手五感を通じて、細緻な描写を行うことで、小説の冒頭から上海の雰囲気伝えてる。この段落の前半は静かに吹いている五月の風、徐々に流れている蘇州河と黄浦江の水、また水面に揺ら揺らと浮かんでいる船などに筆を置き、一つの爽やかな景色を描いているが、後半になると、電車と電線から飛ぶ「青い火花」、詰め込んでいる「洋式倉庫」、煌いている「電燈」、とりわけ幻のような「ネオンサイン」を取り入れ、現代大都市の要素を備えている〈魔都〉上海を表していきながら、最後に“Light, Heart, Power!”を付け加えて、西洋の現代性の到来を強調する。

自然景色と都市全貌についての描写を冒頭に置いた作品『子夜』には、続けて呉荪甫と彼の二番目の姉である杜竹斎夫妻三人を載せている三台の車が登場し、上海の都市全体を見廻していく。

この時——この天国のような五月の黄昏どき、三台の一九三〇年型シボレーが、稲妻のようにガーデンブリッジを突抜け、西に曲り、北蘇州路を疾走して行った。(三頁)

³⁸ 茅盾『真夜中』(尾坂徳司訳、千代田書房、一九五一・一〇、三頁、以下は頁数のみ)。

呉蓀甫と杜竹斎夫妻が登場する場面である。彼らは、双橋鎮から避難してくる父親・呉老人、四番目の妹・恵芳、七番目の弟・阿萱を迎えに行く。この三台のシボレーが北蘇州路に沿って、南京路と河南路の交差点を経て、西藏路を通り抜け、平坦な静安寺路に入ってから、呉蓀甫の家に着く。注目に値するのが、この車で移動する際に、上海においては他者である呉老人の目で上海を観察していることである。

この時、交通を指揮する電光が緑にかわった。ウー老人（呉老人—引用者注、以下同様）の車はまた前に進む。さまざまな車輛の海を突きぬけ、着飾った、肉の光に輝やく男と女の海を突き抜け、前へ進んだ！機械の騒音、自動車の臭い屁、女から発散する匂い、ネオンの赤い光、——あらゆる悪夢に似た都会の精霊は、容赦なくウー老人の朽ちはてた心を押つぶした。（一四頁）

呉老人の見た上海の景色は、明らかに前記の“Light, Heart, Power!”を髣髴とさせる描写である。二五年もの間、書齋から離れず、『太上感應篇』を信奉してきた呉老人は、ある意味古い中国を象徴する者であり、上海が象徴している現代社会を厭離する他者である。このように他者の視線と意識を追って上海を捉える装置は、都市風景の展示や社会情勢の説明などに、より有効的であるだろう。呉老人は港から家までの乗車時間に、様々な刺激を受けて二回も意識を失った。呉老人が意識不明になった直後、作者は「どれほどの時間の立ったであろうか、ウー老人はふうッと息を吹き返した。耳もとで話声が揺れ動いている」と老人の意識を取り戻させ、再び彼の視線、或いは意識に沿って話を進める。彼が一回目に意識が戻った時には、傍に坐っている二番目と四番目の娘が交わす上海のストライキについての話を聞いた。第二回目の時は、双橋鎮で起こった共産党の騒動などが聞こえた。この二人の娘の談話によって、呉老人は上海や双橋鎮の大きな社会情勢を知り始めるのである。このように、小説導入部の第一章において、茅盾は呉老人を他者として設定し、この他者が車で移動する短い時間での見聞を通じて、現代都市である上海の実態と当時の農村と都市の社会情勢などを読者の前に展開する。

このことは呉老人の死によって結束し、その後は葬式の場面に入る。茅盾は第二章、第三章において、呉蓀甫の家を一つの大きな空間にし、その中で活動しているグループの談話に焦点を当て、より具体的に上海、更に中国の社会情勢を叙述していく。知識青年から

の社会評論、軍人から軍事情勢の分析、民族実業家からの現状報告、金融資本家の動きなどがすべて含まれている。

呉宅に設けている「枢の間の右側にある大食堂」という空間では、最初に軍人雷鳴と黄奮が内戦の情勢をめぐって会話をを行う。

チョウ・チュンウェイ（周仲偉）が口火を切ったばかりなのに、もう数人の者が口を揃えて訊きはじめた。

「戦況は結局どうなんですか？どうなっているんです？」

レイ（雷）参謀はかすかに微笑しながら曖昧に答える。

「だいたい新聞のニュースと大差ありません。」

「新聞は毎日中央軍の勝利ですよ。しかし業者間のニュースでは、みんなこちらが不利だとなってます。新聞が正確なニュースをのせないから、人心がますます動揺すると云うわけですか。」（三六頁）

多数の人々が内戦の状況について様々な観点を示したり、疑ったりしているが、最後まで結論が出ない。『子夜』では、軍事情勢が金融市場の動きを左右する大きな背景と設定され、呉荪甫と金融資本家との対決には影響的な存在である。

この会話場面が終ると、民族資本家である周仲偉、孫吉人、朱吟秋たちによる中国工業と外国資本をめぐる会話へ変わっていく。

「まったくですな！しかしチーレンさんの御存知なのは半分だけで、あとの半分は知らないようですな。ぼくらの製糸界について云うと、目下のところ哀れな限りで、四面楚歌ですよ。職工は賃銀値上を要求するし、外国向けには日本生糸の競争がある。税が重くて金融界は融資してくれない。考えてくださいよ。コストが高くて売れ行きが悪い。そのうえ資金がつかまっているんです。希望が持てますか？ぼくは考えるたびに憂鬱になるんですよ！」（四四頁）

マッチ会社の社長チョウ・チュンウェイ（周仲偉）は自国製の商品を使おうという提議をしたが、唐雲山に自国製の商品の質を改良する必要があるという皮肉的な質問を投げかけられる。しかし、孫吉人が会話に入り、話題を商品の質から職工のストライキへ広めてい

き、さらに、朱吟秋の補足によって、中国本土の企業が直面している危機を明らかにする。外国資本に侵入されて民族資本企業の苦境、労働者と資本家との対立、民族資本家と金融資本家の矛盾が浮き上がってくる。民族企業家と買弁金融資本家との矛盾は後に呉蓀甫と民族企業連盟を作って外国資本と対抗することに繋がり、労働者階級と資産階級との矛盾は、後の労働者のストライキへ展開していく。

一方、ガーデンの亭という空間では、金融資本家たちの会話が行なわれている。

庭に出て、アスファルトの道を通り抜けいちばん大きな築山に登った。頂上には六角の亭があって、二人の紳士が待ちくたびれている。一人は四十すぎの中肉中背の男で、顎がとがり、窪んだ黒い眼には力強い光がある。これが先刻チェ・インチュウ（陳吟秋）たちの話題に上ったチャオ・ポータオ（趙伯韜）で、公債界の魔王である。彼はトー・チュウチャイ（杜竹斎）が息をきらせて築山に登って来るのを見つけると、連れの方をむいた。（四九頁）

金融界の魔王・趙伯韜の登場するシーンである。金融資本家趙伯韜と信託会社の社長である尚仲礼は計略をかけて、杜竹斎と呉蓀甫を追い落とそうと企んでいる。この二人の闘争の関係が始まって、それ以降作品全体を貫く。

また、金融資本家たちと離れた池の岸という空間では、詩人、学生、弁護士という、中国の若いインテリ階層を代表する青年男子三名（範博文、呉芝生、秋隼）と女学生二人（林佩珊と張素素）が民族利益と階級利益との間に衝突があるかどうかについて論争している。最後、呉蓀甫の書齋という空間では、製糸工場で混乱を齎したストライキについて、呉蓀甫と工場の担当者である莫乾丞との談話も行われている。この二人の対話から、工場の紛争を引き起こした原因とその紛争を企てた人々の名前が出てくる。

九時頃だったのでしょうか、第二組長をやっているワン・チンチェン（王金貞）が会計室へ飛込んで来て、十二列目の車のヤオ・チンフォン（姚金鳳）が規則を犯して云うことを聞かないというのです。その時、第九組長のシュエ・パオチュウ（薛宝珠）も、ヤオに向って会計室へ行くようにどなろうとしたんだそうです。ところが、まさかと思った第十二列の女工たちが、みんな糸巻車をとめて、ヤオ・チンフォン（姚金鳳）に加勢して騒ぎだしたのです。――わたくしどもは、ワン・チンチェン（王金貞）の知

らせを聞いて、すぐ押えに行こうとしていますと、叫び声が聞えて来て、シュエ・パオチュウ（薛宝珠）がヤオ・チンフォン（姚金鳳）を引張りこんで来ました。しかし糸繰場の女工たちはもう全部糸巻車をとめておりました——」（六四頁）

工場の総務長莫乾丞によって語られているストライキは、ここでは直接的な描写を省き、側面からその経緯、表と裏の指導者の名前、女工たちの反抗情緒、管理者側の人間などを紹介し、後の第十三、十四、十五章において労働者ストライキの取り上げるため、伏線を敷いていると窺える。

この通り、『子夜』の第一章においては、呉老人を通して車の移動につれて上海を観察し、娘の会話から社会の情勢を知る。第二章、第三章においては、呉宅という大きな空間で各階層の会話を描くことによって、各階層の間に潜んでいる矛盾を顕在化させ、混沌としている中国の現実を描き出す。注意しなければならないのが、矛盾は人物の階級を定着し、各階級の人間の会話から、社会における相容れない関係を提起することである。このような同じ平面に各種の関係を示すことを、銭理群は「蜘蛛巣式的な密集構造」と呼ぶ³⁹が、この関係は平面に留まらず、「ひとつのマッスとして、以下、大いなる建造物の空間づくりをするための礎石を打ち込」⁴⁰むという役割を果たしている。

6-2 「歴史」の冒頭の導入

前述したが、「歴史」の冒頭が「序章」と「石を愛する男」である。「序章」の第一節では、竜田が家に帰るまでに見た風景や出会った事件を述べて、社会の全体像を紹介する。第二節と第三節及び「石を愛する男」は、主に寝る前の竜田が学生たちとの交流会を回想し、登場人物を集める段階に入る。

小説は『列子・湯問』の神話から始まる。共工と顓頊が帝の座を争ったため、女媧が補修した天柱を再び折って、天を歪めさせたという神話を通し、天、地だけではなく、人間の世でも歪んで傾いているという中国の全体像を根源的に遡り、「歪む」という特徴を強調する。続いて中国情勢を次のように述べる。

³⁹前掲、《中国現代文学三十年》（一七九頁）。

⁴⁰前掲、『二十世紀の十大小説』（二三一頁）。

地東南に満たず、とは、恐らく黄海支那海のことを云うのであろう。西北の涯、天山を一方の端、即ちこの世の際涯とすれば、そこから天地は黄海、東支那海に向けてぐっと傾き、水も人間も歪み傾いたままに、泡を立て流血して相争い、時に逆流し時に渦巻いて何処とも知れず満ち足らぬ低きへと流れてゆかねばならぬ。この世の果て、天山を起点として、東南に流れゆく百川水潦のうちでも、中国の大地にしっかりと四足の爪を食い込ませて海の彼岸、日本を凝視する二体の巨竜、黄河と揚子江は、それ自体中国である。中国の潜在勢力の一切はこの巨竜に象徴され、その口蓋のうちより溢れ出て来る。また外国の力の一切もまたこの口蓋をこじあげ、近代の利器を用いて顎部の蝶番いはずし、巨体の内部へ押し込み侵入してゆくのである。過去一世紀以上、それは侵入の時期であった。その時期が日本の敗退とともに終わったものとすれば――⁴¹

神話を利用して読者に歴史的なイメージを伝える堀田善衛は、続いて「黄海」や「東支那海」、「黄河」、「揚子江」など中国の実際の地名を使い、神話から現実世界へ移る。中国の現実として、堀田善衛はここで主に二つの勢力を取り上げている。一つは中国の所々に潜んで分布する所謂「潜在勢力」である。もう一つは中国に奥深く存在する「外国の力」である。この二つの勢力は中国と一体になり、「日本の敗退」と共に消失したわけではないと、冒頭で、作者は示唆している。

その後、日本人竜田の登場場面となる。

時間が切迫していた。

無軌道電車を普通の電車に乗り継ぎ、竜田は時計を気にしながらオーヴァーの襟を立て、真夜中近いのに黒眼鏡をかけて隅に坐っていた。(四頁)

戒厳令によって行動の制限される零時前に、竜田が交流会から急いで帰宅しているという状況を設定している。上海の他者としての呉老人と同じく、日本人の竜田は中国にとって

⁴¹ 前掲、堀田善衛「歴史」(新潮社、一九五三。引用は前掲『堀田善衛全集』第二巻、筑摩書房、一九七四年、四頁に拠る。以下は頁数のみ)。

の他者である。しかし、『子夜』に出てくる三台のシボレーと異なり、「歴史」の主人公竜田が使っている交通手段は電車と黄包車である。

電車に車掌の劉福昌（後にレジスタントグループのメンバーと知る）と偶然に会う場面が挿入されているが、電車と黄包車で移動する際に、竜田は戦後に残留した日本人という他者として上海の景色を見る。

バンドに、黄浦江に面して巨大な岩壁のように建ち並んだビルディングには十二カ国の旗がはためいている筈である。フランス系の中法工商銀行、英国系の匯豊すなわち香港上海銀行、大英銀行、大英会司、怡和（ジャーディン・マジスン）洋行、沙遜大樓、アメリカの亜細亜石油、オランダ系の和蘭銀行等々、名を思い出し数を数えるだけでも人を疲労させるほどに、それらはずらりと並んで、陸と海との両面に嫉妬深い眼を瞪り、吸盤のある手をのばしているのである。その手は占領とともに日本へものびていったであろう。（略）バンドで一番背の高いのは、日本で云えば日本銀行にあたる中国銀行であるが、背が高いということは、あたりの外国系のビルディングがあまりにも堂々と横幅も太くどっしりと位置しているために、眺めているとそれらどっしりとした建物に三方から押しつけられて脊骨も細くひよろひよろと天に伸び上がったかのように思われて来る。（七頁）

各国の旗が掲げられ、外国銀行が林立している景色を通じて、作者は外国資本が中国に甚だしく浸透していることを示唆している。特に、中国のシンボルである中国銀行が、「どっしり」とした外国銀行の前で「ひよろひよろと」見えるのは、言うまでもなく、中国民族資本が外国に抑えられている状態を象徴的な形で表しているに他ならない。ここは前記のような景色の描写を展開して、具体的に中国情勢、あるいは上海の情勢を説明する役割があると思われる。

零時になり、黄包車から降りた竜田は検問所で諮問を受けざるを得なかった。そこで彼は一つの事件を目撃する。歩哨の警告を無視して戒厳中の橋に突進して逃げたトラックから、アメリカのミルクが入った樽が四つ、そして死体が落ちた。そのミルクを見ている「流氓」の動きぶりを次のように記す。

（前略）その証拠に残った十五六人は、十一月の寒風にさらされながら汚い着衣を脱

ぎ、上半身裸になって、両の掌や手にもった罐詰の空罐らしいもので路上にこぼれた白い粉末状のものをすくいとり、それを袋代りの着衣の中にとりこんでいるのだ。兵は剣付の自動小銃をつき出して、形ばかり群衆を追う真似をした。しかし銃などは、それが火を吐き、剣が筋肉や腹部に刺し込まれぬ限りは、この餓えた人々にとっては無用のものである。(略) 美国牛奶、美国牛奶、と叫んだ。(略) 竜田はその夜の康沢邸での会合に来ていた一人、国際連合の戦災地救済機関につとめている洪希生という青年が、『アンラの救済物質の、一種のダンピングは見事に中国の民族産業を救済してくれましたよ、たんまり救済されすぎて、ただでさえ戦争やら戦後の接收騒ぎやらで瀕死状態になっていた民族産業は、主の救いをうけて昇天状態ですよ』と云ったことを思い出した。(一一頁)

この事件を通じて、アメリカで余剰となった戦争物資が救済物資として中国に入るが、民衆の手元には届かず、政府の要員と貿易商の結託によって安価で販売され、民族産業を破産へと追いつめる社会状況を、作品に反映させている。飢える民衆、過剰なアメリカの救済物資、破滅へ向う民族産業などのファクターによって、内戦中の中国の全体像が浮かび上がってくる。この事件は「石を愛する男」中の洪希生の救済物資についての話と繋がって、つまり、中国の民族産業の衰弱状態と民衆の惨状を結び付ける出来事として捉え、第三部、第四部の民衆暴動が起こるための伏線を張っている。

検問所で李安耀の妻・リュシェンヌ夫人(圧力団体のメンバ)が竜田の保護役として登場し、後の「無人地帯」で左林との繋がりのための伏線を設ける。その後、竜田が帰宅して、大学の討論会で学生グループと知り合った過程と、レジスタントグループのメンバが康沢邸で集まって会話する場面を詳細に回想する。葬式で各階層のグループによる会話を通じて主要人物を集める『子夜』と少し違って、「歴史」では竜田とレジスタントグループが康沢宅で集まって会話することになっている。以下はその場面からの引用である。

そして彼は前後十に近い学校をまわったこれらの討論会のうち、約四回連続して出席している学生が三人いることに、とうから気付いていた。その一人が先程天皇制に関する質問をした史量才で、あとの二人は、康沢という茶のダブルの背広を見事に着こなした青年紳士とも云うべき学生と、その愛人らしい周雪章という青衣の女学生であった。愛人らしいというのは、この小柄な眼鏡をかけた女学生は衆人環視の中でも

平然として康沢の腕をとって坐っていたから、竜田はそう思ったのである。(一五頁)

討論会で知り合った史量才、康沢、周雪章と一緒に康沢の家に着くと、竜田は他のメンバーと会うことができた。

二人の先客は、ソファに掛けていたが、一同が入ってゆくと立って来てそれぞれ握手をかわした。垢と食べ物か、それとも仕事のせいなのか、粗末な中国服の咽喉許と袖口を異様に光らせた、薄い灰色がかかった髪をして落ち窪んだ眼の男が、紡績工場の労働者で、陶一亭という名であった。そしてもう一人の、上から下までりゅうとした薄紫のギャバジンの背広を着てロイド眼鏡をかけた男が、アンラ(国連戦災地救済機関)につとめている洪希生、ということであった。(二二頁)

労働者である陶一亭と知識人の洪希生が、康沢の家で史量才、康沢、周雪章と合流する場面である。ここで注目したいのが、作者は人物の服装に焦点を当て、その服装から人物の階級を示していることである。このグループの「不調和」を意識的に強調することは、この「不調和」にも関わらず結ばれているグループの内在的な絆、すなわち、日中の「宿命」な関係からの「革命」を引き出す重要なプロセスとなっているのである。

また、各階級出身の人物による会話は、各方面から情報を提供して全体的に社会の情勢を示していく。

「私はアンラにつとめていますが、実はこの機関の仕事が進展すればするほど中国はたいへんなことになりはしないかと心配しています。戦災が米国の戦時余剰物質で救済されることは有難いことですが、只でさえ戦争と日本軍の占領で瀕死に近い中国の産業は、安くて良質な米国の日用品がどっと流れ込んで来たため、大打撃をうけて、うまはもう昇天に近い有様です。」(三〇頁)

これはアンラに勤める洪希生の話である。彼から米国の物資と中国民族企業の矛盾及び民衆の惨状が伝えられる。前述したが、これは第四部の民衆デモ運動の伏線となる。

一方、労働者の陶一亭から、次のように産業について状況説明がなされる。

「日本が負けたときまると、我々の工場でも日本人が織機を壊そうとしたり、在庫品を持ち出して売り飛ばそうとしましたが、これはどうにか我々労働者の手で食いとめました。そして我々が工場を管理して操業を続けながら、重慶政府からの接收を待っていたんです。(略) 名目上は政府機関が接收したことはなっていますが、実は個人所有みたいな形になり、在庫品は勿論泥棒同然な投機材料にする。全くたいへんな接收でしたよ。」(三〇頁)

労働者の惨状を示している。また、工場の接收を通して、労働者と日本人、労働者と国民党の矛盾を表す。

その後、大資本階級出身の康沢から、中国の買弁資本家と外国人と結託していることが明らかになる。

「今日も、下の食堂で、西洋人五人と日本人が一人、親父と姉たちと会食していますが、何を相談しているか、云いましょうか。そのうちの日本人というのは、戦争中××通商という日本陸軍の独占資本の手で阿片を売り込んでいた奴なのです。竜田さんには悪いけれど、一番悪質な日本人なのです。こいつらが親父の会社の金福貿易公司を根城にして化粧品や粉ミルクから、大きなものは飛行機まで一切合財密輸して、疲弊した中国の産業を一举にぶっこわそうとしているんです。それにこの日本人の阿片商人が——左林という名ですが、話によると昔はマルクス主義者だったそうです——
(略) 今はアメリカの飛行士を買収して日本へサッカリンを密輸するのに躍起になっているんです。その利益の一部を某機関へ献金して、中日親善のためなんていう名目を貰い、いまでも中華全土を大威張りで荒らしまわっているんですよ！」(三一～三二頁)

これは支配者側からの情報で、買弁資本家と外国資本家との利益関係についての説明である。中国の上層階級は利益のため、中国民衆に損害を与えることから、下層階級と上層階級の対立関係が見られる。また、康沢の話を通して、レジスタントグループと対峙する人間たちが登場する。その中心人物が左林である。

以上のように、序章の第一節では、中国にとっての他者である竜田の見た景色と事件を通して、中国の社会情勢を大まかに表す。第二節から「石を愛する男」までは、康沢宅に

集まるレジスタントグループのメンバーたちの会話から、中国社会の矛盾関係を、具体的な事項を通して示す。この冒頭に提起される人物と諸矛盾関係は、それ以降に発展していく。

以上をまとめてみると、『子夜』と「歴史」の冒頭部は同じ役割を果たしている。すなわち主要人物の登場と諸矛盾関係の提起。茅盾が自ら説明を加えるように、このような重要人物をすべて登場させ、いくつもの筋の糸口を同時に提出するのは、後にそれを合せて展開させるためである。⁴²最も強調したいのは、冒頭部の叙述の順番が似通っていることである。両作品の導入部とも、人物が登場する前に、風景の描写を通して、社会全体の輪郭を描き出していく。その後、上海における他者である人物が、交通手段を利用して上海を移動しながら、社会の全体情勢を呈する。最後に、登場人物が一つの空間に一堂に会し、社会の各種の矛盾関係を提起する。両作品の導入部の相似と、『子夜』の冒頭に対する堀田の賞讃を考え合わせると、堀田が「歴史」の冒頭を書く際に、『子夜』を意識的に模倣したと考えられる。

第七節 『子夜』と「歴史」の時間

第六節で分かるように、堀田は『子夜』の冒頭部を真似して、登場人物と社会情勢を全体的に一つの平面として設定して、その後に発展していく。時間は、まさにその諸関係を並行的に展開するための重要な装置だと考えられる。本節は、時間の逆戻りと時間の停止という二点から、堀田が如何に時間を操作して全体像を求めるかについて、『子夜』との比較を通して考察したい。

7-1 時間の逆戻りによる全体性への志向

『子夜』の第二章は、朝五時から正午十二時頃までの呉老人の葬儀の場面を描いている。第三章は「午後、空は黒雲に蔽われて異常にむし暑かった。もう二時になるのに」(六九頁)

⁴²松井博光『薄明の文学—中国のリアリズム作家・茅盾』(東方書店、一九七九・一〇)を参照した。

から始まり、午前話題の続きとして、民族資本家たちが民族工業を救う共同事業を計画するようになる。しかし、第四章となると、「ウー（呉）老人の遺骸を納棺したその日の午後、上海から水路で二百里（日本の約三十三里）あまり離れた双橋鎮で」（九七頁）という提示によって、第三章の時間に戻りながら、場面は呉荪甫の故郷で進行している農民破産の状況と農民革命闘争へ転換していく。第五章は「一日へだて々」（一二七頁）と記し、場面は再び上海呉荪甫の家に戻る。

第四章をほかの章と繋げているのが、第五章の冒頭で示されているように、新聞の紙面で農民革命闘争を知った呉荪甫が、故郷を「模範鎮」に作るという夢が破れることである。また、第六章の費小胡子や曾家駒、第七章の屠維岳の登場は、農民革命闘争で上海へ逃げてきたという理由を作るためである。夢の破滅であれ、人物の登場する理由としては、農民運動の消息を伝えている新聞を登場させるだけで充分で、わざわざ一つの章を設けて細かく描く必要はないであろう。それゆえ、第四章の存在の異様性が従来多くの研究者によって指摘されてきた。これに対し、この章の存在について、茅盾自らが次のように語る。

『子夜』は、元々農村と都市と両者の革命の発展を対比することによって、この時期に中国革命のトータルの面貌を反映し、作品の革命樂觀主義を強化すると計画したが、小説の第四章は伏線であった。⁴³

都会、農村の社会背景の全体を書こうという計画があつて、第四章を設けたという。つまり、茅盾は農村の革命運動を、都会と合わせながら一つの社会全体を呈する意識に基づいて、第四章を伏線にした。その計画の成否はともかくして、ここで注目したいのは、社会の全体を描こうとする茅盾が、作品内において時間を用いている、その手法である。彼は時間を順次に記録していくのではなく、「ウー老人の遺骸を納棺したその日の午後」という一文を利用して、再び第三章の時間に戻っている。つまり、「ウー老人の遺骸を納棺した」

⁴³ 以下は原文である。“《子夜》原来的計画是打算通過農村（那里的革命力量正在蓬勃發展）与城市（那里敵人力量比較集中因而也是比較強大的）兩者革命發展的对比、反映出这个時期中国革命的整個面貌、加強作品的革命樂觀主義。小説的第四章就是伏筆。”（茅盾：《再来補充幾句》、一九七七・一二。引用は《子夜》、人民文学出版社、二〇〇四・七、四七九頁に拠る）。一九三二年初版の後記にも似ていることが記されている。

という事件の時間標示を通して、読者の記憶を蘇らせ、第四章の農民運動と第三章の上海の葬式を並列に置くことをの暗示となっている。こういう逆戻りによって時間を停止すると同時に、読者の記憶を蘇生し、都会と農村の全体を同時に示すことが可能となる。

「歴史」においても、堀田は同様の手法を使っている。第二部「一九四六年中国」の第一節「零点運動」では、散策している竜田は郊外で劉福昌と偶然巡りあい、弾薬である「米」の運送を手伝い、その中の三袋を預ったことを描いている。この一節の最後は、竜田が預かった「米袋」を亜美経済会議（AAEC）に持ち帰る時、ホテルのボーイから、重慶から来た女が彼の部屋に泊まっていることを知ったが、その後すぐにAAECの会合に出席した。続いて第二節は、場面を重慶から来た萩原亮子の経歴へと転じていく。第三節となると、竜田の回想を通して、再び第一節の時間、すなわち十一月末日に戻る。

昨夕四時、野原へものを考えにゆき、五時半、虹橋飛行場付近で劉福昌に出会い、米袋をもってやった。六時半、黒市で紡績労働者の陶一亭に出会った。彼の薄い髪の毛が街灯の光りにすけて見えた。それからしばらくして、ホテルのボーイの小二に出会った。七時、米袋を三つ、左林の機関、亜美経済会議の事務所へ運んでやった。七時半、国際飯店のラムステッドの部屋での会議に左林と一緒に出了。(略)十時、会議が終った、ちょっと話があるという左林と二人、立德爾舞厅の別室で議論というより云い争いに近い会話をかわした。十一時、二人は別々に帰ることになり、左林は車代をおいて出ていった。⁴⁴

電車に乗っている竜田の回想によって、野原を散歩した時に劉福昌と出会ったという場面に戻った。こうして、重慶の女によって離れた第三節が、再び第一節と結びつけることができた。強調したいのは、堀田が、この場面に戻る時に、時間を加えていることである。この第三節で付け加えた時間は、竜田の行動を一コマコマとして記録する役割を果していると同時に、後の第四節の叙述と繋げる道具となっていると考えられる。

第四節「その前夜」の冒頭には、「一九四六年十一月末日午後七時」と時間を標示している。この時間を通じて、第三節の「七時、米袋を三つ、左林の機関、亜美経済会議の事務所へ運んでやった」という竜田の行動を思い出す。だが、第四節の「一九四六年十一月末

⁴⁴前掲、「歴史」（一二四頁）。

日午後七時」の場面は、「竜田がひきうけてくれた三つの米袋をのせた黄包車は、とうに町角を曲ってしまった。陶一亭と劉福昌たちも出発した」（「歴史」一二七頁）と記し、竜田を見送ってから出発しはじめる陶一亭と劉福昌の行動に変わる。

ここでは、第四節の「一九四六年十一月末日午後七時」という時間の設定は、読者に第三節の「午後七時」の竜田の行動を想起させる。つまり、この標示によって、読者の記憶にあった竜田の場面を蘇らせ、陶一亭や劉福昌の行動と重ね合わせる効果が生まれる。こうして「米袋」を運ぶ事件の全体像が浮かび上がってくるのである。

バフチンによると、言語には媒体としての制約があり、決して無限なものを表現することができないという。⁴⁵それ故、「選択と芸術の経済性を原則とした作品は、読者に必ず人生の一コマがあたかも首尾一貫した行為もしくは事件、それも極く数の限られた要因をもとにして因果関係が厳格に働いているような、一連の行為や事件で構成されている印象をあたえてしまう」⁴⁶。この言葉を逆に応用すると、「選択と芸術の経済性を原則とした作品」は、少数の要因をもとにして因果関係で働く、しかも首尾一貫した行為や事件によって構成されている。この点からみると、『子夜』と「歴史」は、事件の全体を表すという手法のために、行為や事件が過度に断絶している。よって、バフチンの言うような「選択と芸術の経済性を原則とした」作品ではないと言えるだろう。ここで強調したいのが、茅盾と堀田は、作品内で起こる事件と事件とを断片を繋ぐために時間を道具として使っていることである。すなわち、時間を通じて、読者の記憶にある場面を蘇らせながら、視点が違う場面へ転換して、事件の全体を語っていくのである。

7-2 連続の場面転換による全体性の達成

前述したが、『子夜』の第二章では、呉老人の葬式を通じて人物が登場する。その時間の流れは「早朝の五時頃」（三一頁）→「時刻もゆっくりと正午に近づいて行った」（四二頁）→「もう十二時十五分よ」（六六頁）となっている。最初の五時から九時までは、簡単に天気を紹介するのみである。九時からは応接室の会話を中心に描くが、「時刻もゆっくりと正

⁴⁵ ミハイル・バフチン「トルストイの『復活』について」（『ミハイル・バフチン全著作』第五巻、精興社、二〇〇一年、四五頁）を参照した。

⁴⁶ 前掲、「トルストイの『復活』について」（五九頁）。

午に近づいて行った」(四二頁)という時間の表示に応じて、同じ応接室の雰囲気も変化していくことがあらわされている。

「時刻もゆっくりと正午に近づいて行った」、弔客が次第にへる。表門と枢の間にいる二組の「楽隊」はもう「組換え」したように吹いたり叩いたりしている。二組とも音楽をとぎらせると、人々は不意に耳もとから何か抜き去られたような寂しさを感じた。こんな時には「トルコ風呂」「ダンサー」「映画スター」などと云う魅惑的な名詞が特に響き渡る。

不意に人々が口をとぎした。この明らさまな肉感的放談が突然「静寂」にぶつかって、申訳ないような気になったのである。

タン・ユンシャンが半ば意識的に禿頭をかいて、仲間の者を一瞥しながら、だしぬけにハハハ、と笑う。すると周りの者が了解したように哄笑する。思いがけない気づまりは打開できた。

笑声が去ると、レイ参謀がまじめな顔をチョウ・チュンウェイにむける。

「誰でも金が高くて銀が安ければ実業を復興させ、国産品を発展させるい々機会だと云ってますが、それは本当なんですか？」(四二頁)

この場面では、時間の変わり目を、「楽隊」の動態を通じて示している。同じ応接室で同じ会話をする人々は「楽隊」の雰囲気が変わることによって、その気持ちも一変する。この時点になる以前に興奮気味に話されていた「トルコ風呂」「ダンサー」「映画スター」などと云う「魅惑的な名詞」が、瞬間、人々に申し訳ない思いを起こさせ、群衆全体が「静寂」となっている。だが、タンの笑い声によって、会話は再開していく。この一瞬の変化によって、同じ空間でも、正午以前とはっきり区別できるようになる。そして、語り手の視線は再びレイ参謀とチョウ・チュンウェイたちに投げかけられ、中国の民族企業の現状についての会話に戻る。

この時点の場面の転換については、『子夜』の冒頭を分析した時に詳しく提示したが、ここでも簡単に記しておく。まず応接室のレイ参謀たちの民族企業に関する会話(四三頁)から、庭の四阿にいる金融界の魔王・趙伯韜と尚仲礼(四九頁)へ変わる。その次は、この金融資本家たちと離れた池の岸にいる学生グループ(五三頁)に転じ、最後に、呉蓀甫の書齋(六四頁)で終わる。この会話の場面の結束を象徴するのが、呉蓀甫の姉であるフ

一ファンが書斎に入って言った言葉である。即ち、「まだ早い？もう十二時十五分よ！外じゃもう食事してるわ！」(六七頁)。ここで分かるように、この多くの場面は「時刻もゆっくりと正午に近づいて行った」から「もう十二時十五分よ」までという極めて短い時間に行われたことである。この場面の転換では、純粹時間が停止されていると言えるだろう。特に「歴史」において場面転換の多い場面が、第二部の第四節「その前夜」だと思われる。第四節における具体的な時刻の提示は、「一九四六年十一月末日午後七時」(一二七頁)、「同日 午後八時」(一四〇頁)、「同日 午後九時」(一五三頁)、「同日 午後九時半」(一六〇頁)、「同日 午後十一時」(一七三頁)、「十二月一日 午前零時」(一八二頁)となっている。各時間帯において各々の人物の行動が語られるが、最後の「十二月一日 午前零時」となると、登場人物主要人物の行動が全部示されている。以下に人物、空間、行動を分け、簡略に「午前零時」の人物の場面転換を呈示する。

(表八) 人物の場面転換

人物	空間	行動
康沢、洪希生、史量才	康沢邸	会話
左林	左林の事務所	亮子と電話
竜田	淫売窟	朝鮮人の淫売といる
陶一亭	陶の家	同郷人が来ている
周雪章	周の家	父と会話する
劉福昌	外	康沢と電話する
羅紹良	ホテル	左林と電話する
康沢、洪、史と	康沢邸	会話
史量才	康沢邸	友達に電話する
周雪章	周の家	考える
陶一亭	陶の家	考える
竜田	帰宅する途中	考える
竜田(一時)	左林事務所	左林と会話する
康沢、洪、史	康沢邸	会話する
萩原亮子	ホテル	考える

竜田	左林事務所	左林と論争する
----	-------	---------

表八から分かるように、零時という時点で、堀田はこの作品の主要人物を登場させ、彼らの活動を細かく述べている。『子夜』より、場面の転換が一層頻繁となっている。しかも、人物の場面が一回ずつではなく、二回、三回と循環的に回っている。これは時間の流れより、空間の変化によって小説が進んでいると言えよう。このような時間の叙述から空間叙述に変化することが、視点を複数化し、場面や事件の全体を表すと考えられる。

前述したような時間をヒントにして読者の記憶を喚起し、事件の断片を繋いで全体像を表すという手法と異なり、場面の転換によって事件や人物の全体を提示する手法は、むしろ読者の視覚を利用していると考えられる。

A・A・メンディロウによると、「一時的全体像の幻想は非常に短い文学作品の場合にも生じてくる」という。それは各主題を急いで読む時に、一時的な全体像が幻想として生まれてくるからである。⁴⁷すなわち、事件や人物に関する様々な断片を組み合わせ、急いで読者の眼前に展開することで、その全体像を描き出すことが可能となる。この意味で、『子夜』と「歴史」は、読者の「視覚」あるいは「幻想」を利用して、次々に場面の転換によって、事件や空間の全体を表していると言えるだろう。

以上、「歴史」と『子夜』の時間を分析することによって、この両作品の時間の停止という手法は、通常のリアリズム小説と異なり、事件や人物を全体的に提示することを目指して、読者の記憶や視覚を利用し、意識的に時間を用いていると結論づけられる。堀田の「歴史」及び彼によるエッセイや評論での言葉を考え合わせると、このような時間の逆戻りと場面転換を使って事件の全体を表す手法は、茅盾から影響を受けたと言えるだろう。

本章は小説の全体構造と冒頭部の導入及び時間の操作から、中国リアリズム作家・茅盾の『子夜』と比較することによって、堀田が「歴史」において、歴史・社会・人間の全体像を求める手法について論じた。一つの対峙している関係を主線にして、またその主線をめぐって様々な関係を同時に提起するという全体構造から、「歴史」は構造的に第三章と第四章に論じた「祖国喪失」や「広場の孤独」から大きく変わったと見える。このような「一

⁴⁷ A・A・メンディロウ『小説と時間』（志賀謙、中林瑞松、西尾巖訳、早稲田大学出版部、一九七六、三〇頁）。

樹千枝」という全体構造の形成は、冒頭部の導入と時間の操作と切り離せないのである。冒頭部に重要人物の登場と諸矛盾関係の提起が出来たからこそ、後に発端、発展、結末という順序で小説の事件や人物を展開することができる。また、時間を逆戻させたり、時間の代わりに空間の転換をさせたりする手法が、諸矛盾関係の並行的な展開が可能にしたと考えられる。

『子夜』と「歴史」の構造と手法が相似していることから、長編小説「歴史」を創作した時に、堀田は茅盾の『子夜』に用いられている小説手法を転用したと言えよう。茅盾は堀田にとって、「全体小説」の作家であり、「小説言語とノンフィクション言語」によって二〇世紀の実験小説を創作する作家である。つまり、堀田が茅盾を上記のように位置づけていることは、堀田が「歴史」を創作する際に、茅盾の手法を転用した要因だと考えられる。「一樹千枝」という全体構造や、登場人物や諸矛盾関係を集中的に提起する冒頭、及び全体像を表す時間の調節を通して、「祖国喪失」や「広場の孤独」より一層にスケールが大きくなって、事件や人物も並行的に描けることができた。この「複雑多岐な現実を大胆に取組み、それを前向きに構成しようとする野心」⁴⁸は、「現代史を文学に収斂」させるという創作目標に向かう決心から発したものであろう。そして、その目標に向かって絶えず小説方法に挑戦する堀田の努力は、本論の第四章と第五章から仄見えるではないか。

⁴⁸ 「朝日新聞」(一九五三・十二・七)。

結語

本論は、戦時下の日本で堀田の参加した文学活動と団体、上海での実体験を考察した上で、日本に引揚げた後に書いた「祖国喪失」「広場の孤独」「歴史」について緻密な分析を行うことにより、堀田善衛と中国の関係、殊に堀田文学における「上海体験」の位置を、作家の思想や認識及び小説の創作方法などの面から考察した。最後に、もう一度全体を整理したい。

第一章では、堀田が山本健吉、吉田健一、河上徹太郎などと一緒に文学活動を行った同人誌『批評』を中心に調査して、戦時下の堀田の歴史観が小林秀雄と芳賀檀の影響を受けたことを論じた三好淳史の研究を踏まえ、同人誌『批評』に掲載した堀田のエッセイや評論、殊に「西行」の分析を通して、「上海体験」以前の堀田の歴史認識と文学観を確認した。

「未来について」、「何処へ？—立原道造論」、「覚書」から、堀田が自己存在に対する混迷から、文学者としての自己確立へという変化を辿ってのち、文学者として如何に生きていくのかという点に到達し、これが戦時中の堀田が最も関心を持った問題だと整理した。

当時の『批評』において、小説を救う道は古典を回復するほかないと唱えた山本健吉の古典提唱説が同時に載せられていたことと、小林秀雄の「西行」と驚くほど類似していることから、堀田の最初の古典評論である「西行」には、「国学」を提唱した『批評』グループの影響があったと指摘した。特に小林秀雄や堀田善衛の「西行」においては、日本人の知性、感性と強靱な意志を描くことと、素直さや誠実さを持つこと及び、民族精神に満ちた帝国日本文学の復興を提唱した河上の影響があることから、上海へ赴く以前の堀田は『批評』という媒体の中で、その同人である山本健吉や河上徹太郎及び小林秀雄たちの影響を受け、帝国日本の立場に立って文学活動を行なったと言える。

第二章では、従来の研究において堀田の「上海体験」の具体的な考察がなされていないという欠点を克服するため、堀田の『上海日記』や対談、エッセイなど本人の残した文章と、ほかの関係者の証言、公式文書など堀田以外の人物の記録に基づいて細緻な考察を行い、大きな歴史背景の下に堀田の「上海体験」の独自性を掘り起こした。特に彼の上海での「身分転換」を彼の認識に大きな影響を及ぼした要因だと捉えた。

戦争末期に、国際文化振興会に勤めていた堀田が、『日華文化交換論文集』を創刊するため、帝国日本の文化宣伝者として上海に渡ったことが判明した。その後、日本の「敗戦」

で帝国日本の文化宣伝者から一般の「敗戦国」の国民となり、また中国の中央宣伝部に留用して中国政策の宣伝者へという「身分転換」によって、堀田は日本の軍部や中国宣伝部など公式機関には人間性がないと看破し、国家や公式機関に属しない一個の人間として生きなければならないという新たな認識を獲得したと指摘した。最後に、「武力」より「心と心」の問題と「人性の問題」を重んじて国際問題を解決する堀田の主張が、自他の人間性を尊重して守るという認識に基づいていることを分析した。

以上、第一章と第二章においては、上海へ赴く以前の堀田の歴史認識と文学観、上海の体験によってもたらされた新たな認識を考察してきた。帝国日本側に立って文学活動を行った堀田が上海の体験で「公式組織」に対する不信感を持ち、一個の人間として「人性問題」を重視することになるという筋道を確認できた。このような認識が堀田の戦後の小説を通して如何に表現されたか論じるため、第三章と第四章では、テキストを再解釈しながら、堀田の思想と小説方法について分析した。

第三章では、堀田の戦後文学の出発点を象徴する「広場の孤独」を取り上げ、「占領」状態を表す作品と、知識人の苦悩を表す作品として位置付けられている先行研究に対して、本章は木垣と他の人物との関係に基づき、作品の全体構造を明らかにした上で、新たな読みを提示した。

まず、テキストの冒頭と結末の対比によって、「広場の孤独」は行動力のない、確固たる立場を持たない人間である木垣が、行動力のある人間に変身する物語として捉えられることを明示した。その後、木垣が、アメリカのジャーナリストで朝鮮戦争やインドシナ戦争への積極的な参加者ハント、同じ新聞社で働いている「左」の人間の御国、無国籍者で戦略物資を売るティルピッツ、新聞社の上司で「右」の人間の原口、国共内戦で中国から亡命している政治浮浪者張国寿という、様々な立場の登場人物との接触と離別を考察することによって、外部の人間たちとの接触を通して、木垣の内面心理の変化を克明に分析した。この過程を考察することにより、作者が木垣の内部心理に重心を置きながら、木垣の周囲、即ち外部の人物を「均齊的に」描いているという全体構造が浮かび上がり、「広場の孤独」を、外部状況と内面心理という両面の統合として考えなければならないと指摘した。

このような全体構造に基づいて考えると、先行研究において、「占領文学」や「国際政治小説」¹として捉えているのは、現実に即して描かれた外部状況の描写に注目しているだけ

¹ 前掲、本多秋五「国際関係に眼を開く堀田善衛」（『週刊読書人』一九六二・三・一九）

で、「知識人の苦悶」や「人間の無力感」²として読まれるのは、主に木垣の内面世界に拘っていると批判できるであろう。

以上の作業で、先行研究の読みが時代感覚の制限から離れておらず、いずれの読みも片方に傾いていると結論を結んだ。最後に、複雑な社会状況の下で様々な試行錯誤を体験しながら、「戦乱や革命」に参加しない意志を表明する木垣という人物像には、上海時代に国家・組織を抜け出して一個の人間になるという作家の意志の投影があったと指摘した。

第四章では、堀田初期文学のテーマを、「現代政治というメカニズム」対「主体性を喪失した人間存在」という対立関係に置く定説に対して、堀田の初期の代表作「祖国喪失」と「広場の孤独」とを取り上げ、両作品のキーワード「共犯」と「コミットメント」を通じて、相似する構造と人物の特徴を考察した上で、そのキーワードに託した堀田の意図を明らかにし、小説家としての出発点に立つ堀田の思考やその思考を文学化する手法を探究した。

この章はまず「祖国喪失」における「共犯者」対自覚者という構造を提示した。その後、「広場の孤独」における「コミット」する人間対自覚者という構造をも提示した。両作品の人物の構造や特徴が相似しているところから、「広場の孤独」のテーマは「祖国喪失」から承継したものであると指摘した。また、この分析によって、文学者としての出発点に立つ作家が、「コミットメント」と「共犯」という言葉を媒介して、戦争や歴史に対する認識を小説に取り入れるプロセスを解明した。最後に、評論「共犯者」の分析によって、「戦争犯罪」という角度から歴史や現代社会を見詰める堀田の視点を見出し、「祖国喪失」における「共犯者」対その自覚者という構造では、この歴史・社会の全体を描出しようという堀田の意図と、「共犯者」のあらゆる形態を描くことによって戦争を防止したいという堀田の目的がうかがえると指摘した。そのほか、物質化する／される人間である「共犯者」という言葉には、上海時代に獲得した堀田の認識が見られると論じ、上海体験との関係を明らかにした。

忘れてはならないのは、堀田が「共犯者」対その自覚者という人物構造を使って戦時下の人物の全体を表現しようと試みたことである。序でも触れたが、従来の先行研究では、「祖国喪失」と「広場の孤独」を排除して、「歴史」や「時間」及びそれ以降の作品は堀田

引用は『本多秋五全集』第七巻、菁柿堂、一九九五・八、五三九頁に拠る。

² 前掲、佐々木基一『戦後の作家と作品』（未来社、一九六七・六、一三〇頁）を参照した。

が全体小説に挑戦するものだと断じたが、第四章で分析した「祖国喪失」や「広場の孤独」の構造からは、かなり以前に堀田が全体小説の創作を試していたと証明できる。実際、「歴史を描こう」という小説創作の理念が上海時代の堀田の日記に記載されていた。上記の理由で、「祖国喪失」や「広場の孤独」も、「歴史」や「時間」と並べて、堀田が全体小説に挑戦する実験作に属しているとする事ができる。だが、なぜ異なる作風になっているのか、またはその作風は如何に変わったのかなど問題は第五章で行う問題意識となり、同時に本論の第四章と第五章を繋げる重要なポイントである。

第五章では、堀田の長篇小説「歴史」を取り上げ、社会の全体を如何に小説に書き込むのか、その小説手法を論証したが、堀田文学と中国文学の関係を強調するため、中国リアリズム作家である茅盾の『子夜』と比較する方法を採った。まず、堀田と茅盾の接触から、堀田が茅盾を巧みな手法を使って社会小説を書く作家と見なしたことを確認した。その後、小説の全体構造、冒頭部の導入、小説における時間の操作を、茅盾の『子夜』と比較しながら詳しく分析した。

『子夜』の全体構造と同様に、「歴史」は一つの対峙している関係を主線にし、発端、発展、結末という順序で事件や人物を繋いでいき、それは作品全体で一貫している。それ故、両作品の結末は人物の行方ではなく、その主線における関係の解体によって達成することとなる。また、「歴史」も、『子夜』の導入部と似て、自然の描写から入り、交通手段を利用して他者の視点を通して都市の風景や社会情勢などを大まかに紹介し、その後、主要人物を一つの空間の下に集め、彼らの会話を通して、社会の全体像や様々な矛盾関係を具体的に取り上げる。最後に、「歴史」では、時間を逆戻りさせたり、時間の流れより場面の転換を利用する手法が、『子夜』と似ている。この意識的に時間を停止する操作は細部を描くためではなく、事件や社会の全体像を、小説を通して表現するためである。

このように全体構造、小説の導入部、小説の時間を具体的に分析することにより、堀田が「歴史」でどのような手法を使って社会全体を描いたかと明らかにしただけではなく、「祖国喪失」や「広場の孤独」と作風が異なる理由を提示した。それは「歴史」と『子夜』の比較を通して分かったように、「現代史を文学に収斂する」創作方法に挑戦しつつあった堀田が、社会小説作家・茅盾の手法を転用して、「歴史」の作風をリアリズム小説に近づけたからである。

以上、本論文においては、堀田文学と中国との関連に主眼を置き、堀田善衛の「上海体験」及びその体験から始まる初期作品の形成と展開を考察した。出発点に立つ堀田の文学

には、日中戦争、上海での実体験、中国作家の影響など、中国と関わる要素は無視することのできない位置を占めていることを検証した。

だが、本論は堀田の出発点に焦点を絞るだけで、堀田文学と中国の関係性という、本来は堀田の全生涯に渡る課題にとっての氷山の一角しか論じることができなかった。その意味で、今後はこの課題を拡充させる必要がある。今後は以下の三つの面から堀田善衛文学と中国との関連を論じていきたい。

第一は、引き続き創作手法の面から堀田の作品を分析していくことである。〈歴史〉を小説に書き込むという創作理念を持って、堀田はその方法に挑戦していた。一九五三年一月から一九五五年一月まで書いた「時間」は、その前篇の「歴史」と同じく、「現代史を文学に収斂」する作品として話題となった。この小説は一九三七年の南京事件が起こる時代背景に生きる中国人の手記という形式で、一九三七年十二月十日から一九三八年六月一日までのことを述べたものである。その小説の形式は、明らかに第五章で論じた「歴史」と異なる。この変化からは、〈歴史〉を、手記として書くか、あるいは一つの関係を主線にして対立構造として描くかという堀田の迷いが見える。この問題は中国の矛盾にも見られる。

『腐蝕』を手記形式で書いた彼は、後に『子夜』に挑戦した。だが、注目したいのは、この両作家の迷いは、如何に二十世紀において写実という手法で社会の全体を描くかという問題を解決する挑戦から生まれたものである。さらに言えば、両方とも、長篇小説の原型であるロマンス小説と心理描写を中心にする現代小説とのバランスを保つという課題に挑戦したと考えられる。

第二は、堀田善衛の社会活動から中国との関連を考察していきたい。一九五七年に第二回日本文学代表団のメンバーとして、堀田は中国を再び訪問した。また、一九六一年にアジア・アフリカ作家会議の準備会で三回目の中国訪問をした。言うまでもなく、この時の堀田の立場は一九四〇年代と完全に異なって、日中国交正常化運動や反帝・反植民地運動を支援する側にいた。したがって、革命後の中国は、彼の作品において反帝・反植民地運動の成功例として取り上げ、ある種のモデル国となっている。たとえば、第二回中国訪問の後に書かれた一連の作品「上海にて」「運命」「河」では、その傾向が見られる。この視点は戦後に近代化をどのように見るのかという、「敗戦」直後に日本の思想界で流行した問題であり、毛沢東や竹内好なども関連して考える必要がある。

第三は、中国における堀田善衛作品の翻訳から中国との関連を考察していきたい。堀田の短編「影の部分」（一九五二年）や長篇「時間」（一九五三年～五五年）、評論「冷たい雨

の中で——安保全権団を見送る」(一九六〇年)及び長篇「鬼無鬼島」(一九五七年)は、中国語に翻訳された。訳された作品の数は少ないが、評論「冷たい雨の中で——安保全権団を見送る」は「朝日新聞」に掲載された直後に、中国で『世界文学』という雑誌に掲載された。長篇「鬼無鬼島」は一九六三年に中国でのアジア・アフリカ会議に向けて訳されたものである。「影の部分」と「時間」は一九八〇年代に入ってから翻訳された。このように、作品の翻訳は日中関係という政治の動向、あるいは社会運動の動きと緊密な関係を持っているため、大きな社会環境の下で堀田の作品が如何に受け入れられたか、あるいは誤読されたのかを考察していきたい。

以上は堀田文学と中国との関連を引き続き研究する方向性と可能性を示しただけで、資料の調査が不十分で、まだ具体的な方法と計画については現在構想の段階でしかない。だが、これまで述べたように、堀田文学と中国との関連をめぐる研究は、日中文学史と政治史に内包する多くの重要な問題を露呈させ、戦後に断絶した日中関係史を文学の面から論じられるのではないかと考えている。本論を、その数多くの課題へと踏み出す第一歩としたい。

初出一覧

第一章 「上海体験」前の堀田善衛文学について

— 『批評』を中心に—

大阪大学比較文学会『阪大比較文学』（第六号）二〇〇九年．九九～一一二頁．

第二章 堀田善衛と「上海体験」

— 「身分転換」でめざめた日中関係への思考

大阪大学比較文学会『阪大比較文学』（第七号）二〇一一年．（二〇一二発行予定）

第三章 歴史認識への意志（一）

— 「広場の孤独」再読—

書き下ろし（日本比較文学学会第四四回関西大会における口頭発表原稿に加筆・修正を施したもの）

第四章 歴史認識への意志（二）

— 「祖国喪失」の「共犯」と「広場の孤独」の「コミットメント」を通して—

チューラーロンコーン大学『日本研究論集』（第六号）二〇一二．（二〇一二年一〇月発行予定）

第五章 新たな小説方法への追求

— 「歴史」と『子夜』の比較を通して—

書き下ろし（大阪大学・チューラーロンコーン大学 第三回日本文学国際研究交流会における口頭発表原稿に加筆・修正を施したもの）

書 誌 (年代順)

堀田善衛著作

堀田善衛編『講座中国Ⅳ—これからの中国』筑摩書房、一九六七年。

——『堀田善衛全集1～16』（第一次）筑摩書房、一九七四年～一九七五年。

——『堀田善衛全集1～16』（第二次）筑摩書房、一九九三年～一九九四年。

——『めぐりあいし人びと』集英社、一九九三年。

——『ラ・ロシュフーコー公爵伝説』集英社、一九九八年。

——『別離と邂逅の詩』集英社、二〇〇一年五月。

——『時代と人間』徳間書店スタジオジブリ、二〇〇四年。

——『堀田善衛上海日記—滬上天下一九四五』（紅野謙介）編集英社、二〇〇八年。

——『天上大風—同時代評セレクション1986—1998』（紅野謙介編）ちくま学芸文庫、二〇〇九年。

対談・座談会（単行本及び雑誌記事）

清水幾太郎、亀井勝一郎、堀田善衛など「座談会 独立国の条件」『群像』、一九五二年六月。

堀田善衛・竹山道雄等「座談会 思想と行動」『新潮』、一九五三年一月号。

堀田善衛・武田泰淳「対談 現代の混沌について」『文学界』、一九五三年七月号。

堀田善衛・竹内好等「座談会 日本の近代と国民文学」『新日本文学』、一九五三年十二月号。

堀田善衛・佐々木基一「創作対談 日本・革命・人間」『新日本文学』、一九五五年六月号。

堀田善衛・三島由紀夫等「座談会 日本の現実と新しい文学の可能性」『世界』、一九五六年四月号。

堀田善衛・三島由紀夫等「座談会 戦前派・戦中派・戦後派」『文芸』、一九五六年七月号。

堀田善衛・野間宏等「座談会 第一次戦後派の基盤」『文芸』、一九五六年十月号。

堀田善衛・佐々木基一、武田泰淳「座談会 アジアの社会と文学—アジア作家会議の模様を聞く—」『新日本文学』、一九五七年四月。

竹内好、加藤周一、堀田善衛、石田雄「座談会 アジアのなかの日本」『世界』、一九五八年五月。

野間宏、中野重治、江口朴郎、岡倉古志郎、堀田善衛「座談会 アジア・アフリカと日本—現代ナショナリズムの思想と文化」『新日本文学』、一九六〇年十月。

堀田善衛・武田泰淳等「座談会 中国から帰って」『朝日ジャーナル』、一九六一年十二月三十一日。

堀田善衛・武田泰淳等「座談会 アジア・アフリカ文明の未来」『新日本文学』、一九六二年五月号。

竹内実、武田泰淳、三宅艶子、堀田善衛「座談会 世界文明とアジア・アフリカ—第二回A・

A作家会議の問題点』『新日本文学』、一九六二年五月。
堀田善衛、花田清輝「座談会 歴史・政治・文学」『新日本文学』、一九六二年七月。
中野好夫、堀田善衛「対談 外国における日本文学」『文学』、一九六二年十月。
堀田善衛・川喜田二郎等「座談会 アジアにおける中国」（『展望』一九六五・十二）、『激動するアジア—現代の教養13』筑摩書房、一九六七年。
古田紹欽『対話 人間いかに生くべきか』社会思想社、一九六七年。
堀田善衛・古林尚「対談」（『図書新聞』一九七〇・五・二）『戦後作家が語る』筑摩書房、一九七一年。
堀田善衛・竹内好等『日中の原点から』河出書房、一九七二年。
堀田善衛『けいざい問答』文藝春秋、一九七三年四月。
堀田善衛・武田泰淳『私はもう中国を語らない』朝日新聞社、一九七三年。
堀田善衛、長洲一二、戴国輝など「座談会 自分と「他者」」『討論 日本のなかのアジア』平凡社、一九七三年八月。
野間宏、堀田善衛、栗原幸夫「座談会 天下大乱の時代と文学」『潮』、一九七六年五月。
奥野健男、堀田善衛「対談 堀田文学の軌跡をたどる」、一九八〇年。
堀田善衛・五木寛之「対談 方丈記再読」（『国文学』一九八〇・九月）『方丈記私記』筑摩書房文庫版所収、一九八八年。
坂口謹一郎他『対談集<文明論>の旅—生活文化を世界に探る』サントリー株式会社、一九八一年三月。
堀田善衛・筱田一士「対談 西欧中世の路上より」（『波』一九八五・四）『路上の人』徳間書店スタジオジブリ、二〇〇四年。
鶴見俊輔、堀田善衛「対談 ゆっくりした重さと軽い素早さのあいだに」『ちくま』、一九九一年五月。
堀田善衛・加藤周一『ヨーロッパ・二つの窓』朝日文芸文庫、一九九三年。
堀田善衛・司馬遼太郎等『時代の風音』朝日新聞社、一九九七年。
武藤功編『堀田善衛—その文学と思想』同時代社、二〇〇一年。
堀田善衛・埴谷雄高等『わが文学、わが昭和史』『埴谷雄高全集14』講談社、二〇〇五年。
大岡玲編『文芸誌「海」精選対談集』中央公論新社、二〇〇六年一〇月。

特集

『堀田善衛追悼特集』『すばる』、一九九八年十一月号。
『堀田善衛特集』『熱風』、二〇〇八年九月号。
『堀田善衛展—スタジオジブリが描く乱世』（パンフレット・ビデオ）神奈川県近代文学館、二〇〇八年十月。
『水平線と羅針盤—堀田善衛のメッセージ』（テレビ番組）北日本放送制作、二〇一〇年一月二日。

堀田善衛に関する評論と論文

一九五一年

日野啓三「堀田善衛論」『近代文学』、一九五一年九月。

北鬼助「彷徨える日本人——堀田善衛論——」『文学生活』、一九五一年一〇月。

一九五二年

山本健吉「堀田善衛論」『三田文学』、一九五二年五月。

近藤日出造「堀田善衛—作家訪問」『文学界』、一九五二年一〇月。

(座)本多秋五(他)「広場の孤独と共通の広場——堀田善衛芥川賞記念祝賀会記録」『近代文学』、一九五二年五月。

白井浩司「祖国喪失」『三田文学』、一九五二年八月。

那須國男「堀田善衛著『祖国喪失』」『近代文学』、一九五二年九月。

中村真一郎「堀田善衛著『祖国喪失』」『文学界』、一九五二年八月。

一九五三年

日沼倫太郎「乱世の文学—堀田善衛—」『文芸首都』、一九五三年五月。

服部達氏「堀田善衛素描」『近代文学』、一九五三年六月。

(手紙)堀田善衛、椎名麟三「現代をどう生きるか」、『群像』、大日本雄弁会講談社、一九五三年五月号。

一九五四年

石上玄一郎「堀田善衛著『歴史』」『文学界』、一九五四年二月。

西野辰吉「堀田善衛著『歴史』」『近代文学』、一九五四年三月。

一九五五年

十返肇「堀田善衛の日本人論」『文学界』、一九五五年六月。

日野啓三「堀田善衛『時間』・『夜の森』」『三田文学』、一九五五年七月。

一九五六年

加藤守雄「堀田善衛の小説」『三田文学』、一九五六年四月号。

村杉昭「位置選択への決意」『文藝首都』一九五六年四月。

(座) 中島健蔵、加藤周一、平野謙、村松剛「文学として現代史をいかに書くか——堀田善衛著「記念碑」「奇妙な青春」をめぐって」『新日本文学』、一九五六年九月。

一九五七年

吉本隆明「「記念碑」・「奇妙な青春」批判——「特攻くずれ」と「黨員くずれ」の問題」『近代文学』、一九五七年九月。

一九五八年

平野謙「堀田善衛」(昭和30年6月、33年10月補筆)『現代日本文学 27』筑摩書房、一九七七年九月

清水徹「堀田善衛論——日本的なものとの格闘」『三田文学』、一九五八年一〇月。

一九五九年

大西巨人「戯曲『運命』の不愉快」、一九五九年二月一〇日。

開高健「加藤周一と堀田善衛の紀行文——肉体の欠除と肉体の氾濫——」『文学』、一九五九年一月。

羽山英作「堀田善衛著『河』」『新日本文学』、一九五九年八月。

椎名麟三「「運命」についての報告——その劇曲と舞台——」『文学』第二七巻、一九五九年六月。

一九六〇年

埴谷雄高「堀田善衛と開高健」『新潮』、一九六〇年八月。

一九六一年

(座) 中村真一郎、本田秋五など「戦後文学の批判と確認 第8回」の「堀田善衛(下)——その仕事と人間」『近代文学』、一九六一年三月。

羽山英作「堀田善衛論——体験について——」『新日本文学』、一九六一年七月。

一九六二年

羽山英作「堀田善衛」、『日本文学』、一九六二年二月。

(座) 村松剛・奥野健男等「佐藤春夫と堀田善衛」『文学界』、一九六二年三月号。

杉浦明平「堀田善衛「海鳴りの底から」」『文学』、一九六二年三月。

西野辰吉「堀田善衛「海なりの底から」論」『文化評論』、一九六二年六月。

平林一「『戦後』と現代——『海鳴りの底から』をめぐる問題」『日本文学』、一九六二年九月。

檜山久雄「海鳴りはきこえるか——堀田善衛 その思想と方法についての覚えがき」『新日本文学』、一九六二年二月。

一九六三年

平野謙「解説」『新日本文学全集30』集英社、一九六三年。

吉本隆明「『記念碑』『奇妙な青春』批判」（『近代文学』一九五七・九）『芸術的抵抗と挫折』未来社、一九六三年。

一九六五年

木下順二「『上海にて』と上海についての感想」『上海にて』勁草書房、一九六五年四月。

安江武夫「小説の中の政治—堀田善衛論—」『近代文学研究』、一九六五年一〇月。

一九六六年

鈴木昭一「堀田善衛——「スフィンクス」論」『日本文学』、一九六六年六月。

（座）小田切秀雄など「文学的立場」の同人、堀田善衛「戦後文学の国際的背景」『文学的立場』、一九六六年一一、一二号。

一九六七年

鈴木昭一「堀田善衛論——「審判」を中心として」『日本文学』、一九六七年二月。

一九六八年

大坪公子「堀田善衛の方法と世界」『日本文藝研究』、一九六八年三月。

村松剛「解説」『日本の文学73』中央公論社、一九六八年。

一九六九年

大江健三郎「中国を経験する」『上海にて』筑摩叢書、一九六九年一月。

一九七〇年

吉開那津子「堀田善衛——「海鳴りの底から」など」『民主文学』、一九七〇年六月。

粟津則雄「記憶について——S・ソントグ「死の装具」堀田善衛「橋上幻像」『海』、一九七〇年六月。

池内輝雄「堀田善衛論—その戦後文学の出発点について」『言語と文芸』、一九七〇年七月。

本多秋五「解説」『日本現代文学全集99』講談社、一九七〇年。

久保田正文「堀田善衛入門」『日本現代文学全集99』講談社、一九七〇年。

一九七一年

奥野健男「堀田善衛」『現代日本の文学40』学習研究社、一九七一年。

大江健三郎「解説」『新潮日本文学47』新潮社、一九七一年。

一九七二年

松本新「堀田善衛の文学について」『文化評論』、一九七二年九月。

佐々木基一「堀田善衛論」『現代日本文学大系87』筑摩書房、一九七二年。

一九七三年

千頭剛「堀田善衛における『政治と文学』『民主文学』、一九七三年五月。

塩谷郁夫「歴史を観る目——堀田善衛の「方丈記私記」をめぐって」『民主文学』、一九七三年一〇月。

松原新一「人間と歴史に対する責任」『現代の文学14』講談社、一九七三年。

一九七四年

大江健三郎「典型的人間、典型的文学者」『堀田善衛全集1』筑摩書房、一九七四年六月。

菊池昌典「歴史的現実とモノローグの世界」、『堀田善衛全集3』解説、筑摩書房、一九七四年八月。

真継伸彦「日本的心性との対峙——「記念碑」「奇妙な青春」「鬼無鬼島」論——」『堀田善衛全集4』筑摩書房、一九七四年九月。

一九七五年

松原新一「状況の全体にむけて」『堀田善衛全集7』筑摩書房、一九七五年一月。

平野謙「現代における個人の責任」『堀田善衛全集6』筑摩書房、一九七五年二月。

長田弘「れぶぐりかの人間」『堀田善衛全集16』筑摩書房、一九七五年三月。

菊池祐則「戦後文学と民族の問題——霜多正次、堀田善衛、大江健三郎に即して——」『民主文学』、一九七五年五月。

塩谷雄高「解説」『現代日本文学 27』筑摩書房、一九七五年。

一九七六年

武田友寿「『方丈記私記』・終末のなかの発端——堀田善衛論」『三田文学』、一九七六年一〇月。

一九七七年

林文雄「堀田善衛「ゴヤ」のなかの“光と影”」『民主文学』、一九七七年十一月。

佐々木基一「人と文学」『筑摩現代文学大系73』筑摩書房、一九七七年。

一九七八年

竹内泰広「堀田善衛とアジア」『戦後文学とアジア』毎日新聞社、一九七八年一二月。

松原新一「堀田善衛」『戦後の文学』有斐閣、一九七八年。

一九八〇年

栗原幸夫「解説」『新潮現代文学29』新潮社、一九八〇年。

一九八六年

津田孝「『戦後派』の一つの現在——堀田善衛論」『民主文学』、一九八六年一二月。

富岡幸一郎「サトウルヌスの叫び——堀田善衛論」『戦後文学のアルケオロジー』福武書店、一九八六年。

一九八八年

三好淳史「戦時中の堀田善衛」『日本文学誌要』、一九八八年六月。

一九八九年

清水徹「堀田善衛・人と作品」『昭和文学全集17』小学館、一九八九年。

一九九一年

後藤繁雄「堀田善衛」（インタビュー・一九九一）『独特老人』筑摩書房、二〇〇一年。

一九九二年

三好淳史「堀田善衛論——敗戦前後の日本を描いた二つの作品——」『国語と国文学』、一九九二年七月。

一九九三年

三好淳史「堀田善衛の戦後」『日本文学』、一九九三年六月。

一九九四年

多岐祐介「堀田善衛の戦後意識」（『早稲田文学』一九九四・八）『文学の旧街道』旺史社、二〇〇二年。

一九九五年

千頭剛「堀田善衛『方丈記私記』黙示録的終末観」『戦後文学の作家たち』関西書院、一九九五年。

一九九六年

塩谷郁夫「堀田善衛における歴史と人間の観察」『文学・社会へ地球へ』、一九九六年九月。
石田仁志「堀田善衛『広場の孤独』論——横光利一からの承継——」『論樹』、一九九六年九月。

一九九八年

小田実「三人の死顔」『新潮』、一九九八年一月。
木下順二「堀田善衛のこと」『群像』、一九九八年一月。
高史明「詩人の眼」『広場の孤独』集英社文庫、一九九八年。

一九九九年

橋本進「堀田さんの『重層史観』に魅せられて」『めぐりあいし人びと』集英社文庫、一九九九年。
石田仁志「研究動向 堀田善衛」『昭和文学研究』、一九九九年九月。

二〇〇〇年

伊豆利彦「堀田善衛における知識人の戦争責任—『記念碑』と『広場の孤独』を中心に」『民主文学』、二〇〇〇年八月。

二〇〇一年

山下宏明「国際会議と文学——堀田善衛に即して——」『愛知淑徳大学国語国文』、二〇〇一年三月。

二〇〇三年

柏木和子「堀田善衛『広場の孤独』」『民主文学』、二〇〇三年五月。

花森重行「歴史に抗する“歴史”へ——堀田善衛における上海体験と「第三世界」——」『日本学報』、二〇〇三年三月。

佐谷和彦「東京大空襲 1945・三・一〇——田中清光と堀田善衛の実体験をめぐって」『みすず』、二〇〇三年八月。

矢崎彰「堀田善衛——上海から被占領下の日本へ」『文学』、二〇〇三年九月。

二〇〇五年

伊豆利彦「堀田善衛——『若き日の詩人たちの肖像』と『記念碑』」『国文学 解釈と鑑賞』、二〇〇五年一〇月。

二〇〇六年

津久井喜子「堀田善衛著『海鳴りの底から』における“プロムナード”の考察」『明星大学研究紀要 人文学部』、二〇〇六年三月。

二〇〇七年

大橋毅彦「〈マラーネ〉ゲルハルトの赤い舌——堀田善衛『祖国喪失』からの問いかけ」『国文学研究』、二〇〇七年三月。

二〇〇九年

黒田大河「堀田善衛と上海——『祖国喪失』と『無国籍』のあいだで——」『日本近代文学』、二〇〇九年一二月。

堀田善衛研究以外の引用と参考文献

単行本

- 茅盾『真夜中』（第一、二部）尾坂徳司訳、千代田書房、一九五一年。
近藤忠義編『現代文学総説Ⅱ 大正昭和作家篇』学燈社、一九五二年。
亀井勝一郎『亀井勝一郎著作集』創元社、一九五三年。
中村真一郎『戦後文学の回想』筑摩書房、一九五三年。
矢内原伊作『実存主義の文学』河出書房、一九五五年二月。
茅盾著『東洋のリアリズム』（加藤平八訳）新読書社、一九五九年。
加藤周一『東京日記』朝日新聞社、一九六〇年。
小田切秀雄『文学史』東洋経済新報社、一九六一年。
長谷川泉『近代日本文学思潮史』至文堂、一九六一年。
亀井勝一郎「中国の旅」講談社、一九六二年七月。
竹内好『中国現代文学選集 第四巻』平凡社、一九六三年。
久松潜一等編『日本歌人講座 中世の歌人Ⅰ』弘文堂新社、一九六五年。
瀬沼茂樹『戦後文学の動向』明治書院、一九六六年。
堀田善衛『講座中国Ⅳ これからの中国』筑摩書房（一九六七・一一）、一九七二年。
加藤周一『続 羊の歌—わが回想—』（岩波新書 一九六八・九）、一九七八年二月。
河上徹太郎『河上徹太郎全集第二巻』勁草書房、一九六九年。
竹内好『中国を知るために』第一集（勁草書房 一九六九）一九七三年五月。
久松潜一『講座日本文学11 近代編』三省堂、一九六九年。
久松潜一監修『講座 日本文学の争点 6 現代編』明治書院、一九六九年。
高橋和巳『戦後日本思想大系13』筑摩書房、一九六九年。
大岡昇平『私自身の証言』中央公論社、一九七二年五月。
井上靖「朱い門」『井上靖小説全集 18』新潮社、一九七四年。
大久保典夫『昭和文学史の構想と分析』至文堂、一九七一年。
久松潜一編『新版日本文学史7 近代Ⅱ』至文堂、一九七三年。
『討論 日本の中のアジア』平凡社、一九七三年。
木下順二『木下順二評論集 5』未来社、一九七四年。
——『忘却について』平凡社、一九七四年。
——『木下順二評論集 6』未来社、一九七四年。
——『木下順二評論集 7』未来社、一九七五年。
——『木下順二評論集 8』未来社、一九七八年。
『戦後文学とアジア』毎日新聞社、一九七五年一二月。
A・A・メンディロウ著『小説と時間』（志賀謙、中林瑞松、西尾巖訳）早稲田大学出版部、一九七六年。
三好行雄『日本文学全史 6』学燈社、一九七七年一月。

中野重治『中野重治全集第二十三卷』筑摩書房、一九七八年三月。
『芥川賞全集 第四卷』文藝春秋、一九七九年。
松井博光『薄明の文学——中国のリアリズム作家・茅盾』東方書店、一九七九年一〇月。
竹内好『近代の超克』筑摩書房、一九八三年。
福永武彦『二十世紀小説論』岩波書店、一九八四年一月。
伊藤信一『戦後文学への断想』（非売品）、一九八六年。
梅棹忠夫『文化の秘境をさぐる』講談社、一九八五年。
鷺田小弥太『昭和思想史60年』三一書房、一九八六年七月。
加々美光行『逆説としての中国革命』田畑書店、一九八六年。
日本文学協会『日本文学講座6』大修館書店、一九八八年六月。
河上徹太郎『戦後の虚実』日本図書センター、一九九〇年。
文部省教科書『民主主義』径書房、一九九五年。
『本多秋五全集 第七卷』菁柿堂、一九九五年八月。
柄谷行人『近代日本の批評Ⅱ 昭和篇下』講談社、一九九七年。
「岩波講座 日本文学史」第一四卷（岩波書店 一九九七）、二〇〇〇年第二刷り。
芝崎厚土『近代日本と国際文化交流 国際文化振興会の創設と展開』有信堂高文社、一九九九年。
小田実『私の文学——「文」との対話』新潮社、二〇〇〇年五月。
ミハイル・バフチン「小説における時間と時空間の諸形式」精興社、二〇〇一年。
川西政明『昭和文学史』（上、中、下）、講談社、二〇〇一年。
小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、二〇〇一年一月。
桑島由美子『茅盾研究——「新文学」の批評・メディア空間』汲古書院、二〇〇六年。
大仏次郎『終戦日記』文春文庫、二〇〇七年七月。
半藤一利『昭和史残日録』筑摩書房、二〇〇七年一月。
小林秀雄「西行」『小林秀雄全作品 十四』新潮社、二〇〇七年。
白洲正子『西行』新潮社、二〇〇八年十二月。
加藤周一『私にとっての20世紀』岩波書店、二〇〇九年四月。

評論と座談会と論文

河上徹太郎「大正時代以後の日本文学」『批評』、一九四四年十一月号。
（座）荒正人、小田切秀雄など「文学者の責務」『人間』、一九四六年四月。
（座）「現代文学の諸問題」『文化展望』第一一号三帆書房、一九四七年一二月。
大岡昇平「実験小説といふ言葉について」『文学』、一九五二年六月。
椎名麟三「転換期のリアリズム」『文学』、一九五二年六月。
田宮虎彦「初歩的な立場から」『文学』、一九五二年六月。
久松潜一編『近代日本文学辞典』東京堂出版（一九五四）、一九六五年。
中野重治「アジア・アフリカ作家会議と日本の運命」『文学』、一九五九年六月

加藤周一「アジア・アフリカ会議から帰って」『文学』、一九五九年四月

本多秋五「昔、中国四十日の旅」『群像』、一九七九年一二月。

竹内実「中野重治と中国」『新日本文学』、一九七九年一二月。

『「支那」の語源についての考察』『人民日報』、一九九九年五月七日。

花森重行「「記憶」と「記録」の狭間で——梅棹忠夫の戦中と戦後をめぐって——」『待兼山論叢』第三八号、大阪大学大学院研究科、二〇〇四年一二月。

(座)川村湊、富岡幸一郎、柘植光彦「戦後派の再検討」『国文学 解釈と鑑賞』第七〇巻一一号、二〇〇五年一二月。

雑誌

『批評』(第六卷第二号)批評発行所、一九四四年二月。

『中央公論 文藝特集』中央公論社、一九五二年新春号。

『中央公論』中央公論社、一九五六年六月号。

『20億民族の発言——AA作家会議——東京大会を迎えて』アジアアフリカ作家会議日本協議会刊、一九六一年三月。

『文学的立場』(第一号)勁草書房、一九七〇年六月。

大久保典夫編『新版現代作家辞典』東京堂出版、一九八一年。

『国文学』第四〇巻八号、一九九五年七月。

『すばる』集英社、二〇〇〇年八月。

『すばる』集英社、一九九八年一二月。

高橋哲哉編『思想読本7〈歴史認識〉論争』作品社(二〇〇二・一〇)、二〇〇三年一二月。

『新聞と戦争』朝日新聞社、二〇〇八年九月。

新聞

『東京日日新聞』、一九五〇年五月一日。

『読書ウイークリー』、一九五〇年五月六日。

『東京新聞』、一九五〇年五月八日。

『東京新聞』、一九五〇年五月九日。

『毎日新聞』、一九五一年四月二七日。

『毎日新聞』、一九五一年八月二三日。

『凶書新聞』、一九五一年一二月三日。

『朝日新聞』、一九五二年一月六日。

『北日本新聞』、一九五二年一月二三日。

『東京タイムズ』、一九五二年一月二四日。
『中日新聞』、一九五二年一月二四日。
『学芸』、一九五二年一月二五日。
『学芸』、一九五二年二月二四日。
『朝日新聞』、一九五二年三月二四日。
『全日出版』、一九五二年一〇月二一日。

中国語参考文献

卢卡奇：《小说》，以群译，生活书店发行，1938年。
茅盾：《茅盾文集 第5卷》，香港今代图书公司，1966年5月。
李岫：《茅盾研究在国外》，湖南人民出版社，1984年8月。
吕元明：《日本文学史》，吉林人民出版社，1987年12月。
李德纯：《战后日本文学》，辽宁人民出版社，1988年2月。
茅盾：《茅盾全集》第19卷，人民文学出版社，1991年。
钱理群、温儒敏、吴福辉：《中国现代文学三十年》，北京大学出版社，1998年7月第一版，2005年8月第22次印刷。
叶渭渠：《日本文学思潮史》，台湾五南图书出版股份有限公司，2003年。
刘崇稜：《日本文学史》，台湾五南图书出版股份有限公司，2003年。
小森阳一著：《天皇的玉音放送》，陈多友译，三联书店，2004年8月。
茅盾：《子夜》，人民文学出版社，2004年7月。
罗平汉著：《当代历史问题札记二集》，广西师范大学出版社，2006年2月。
马军：《国民党政权在沪粮政的演变及后果》，上海古籍出版社，2006年8月。
陈祖恩：《寻访东洋人》，上海社会科学院出版社，2007年1月。
陈祖恩：《上海日侨社会生活史》，上海辞书出版社，2008年。
安丸良夫：刘金才，徐滔等译《近代天皇观的形成》，北京大学出版社，2010年1月。
李欧梵：《上海摩登：一种新都市文化在中国》，人民文学出版社，2010年3月。
陈祖恩：《上海的日本文化地图》，上海锦绣文章出版社，2010年4月。
王健：《上海的犹太文化地图》，上海锦绣文章出版社，2010年4月。
汪之成：《上海的俄国文化地图》，上海锦绣文章出版社，2010年4月。
米哈伊尔·巴赫金：《陀思妥耶夫斯基诗学问题》，刘虎译，中央编译出版社，2010年6月。
安敏成：姜涛译《现实主义的限制——革命时代的中国小说》，江苏人民出版社，2001年8月。

论文

孙中田：〈试论茅盾的创作〉，《东北师范大学科学集刊》，1956年第2期。
李岫：《结构的艺术与艺术的结构——谈《子夜》》，《茅盾研究论文选集》（下），湖南人民出版社，1983年11月。

邵伯周：《两部成就不同的现实主义小说——《子夜》与《金钱》的比较研究》，《茅盾研究论文选集》下，湖南人民出版社，1983年11月。

许志安：《取精用宏 推陈出新——试论茅盾长篇小说对中外小说结构艺术的继承与革新》，《茅盾研究论文选集》下，湖南人民出版社，1983年11月。

王中忱：《茅盾艺术技巧论二题》《信阳师范学院学报》，1985年1期。

王中忱：《论茅盾与新浪漫主义文学思潮》《浙江学刊》，1985年第4期。

王中忱：《重读茅盾的〈子夜〉》，《海南广播电视大学学报》，2002年2期。

《导报》第二期，改造日报社，1945年12月。

